

阪神・淡路大震災 30 年

災害メモリアルアクションKOBE

ACTION 2025

伝える大震災、つながる防災

目次

開会のあいさつ	1
第1部：活動報告会	
兵庫県立舞子高等学校	2
滋賀県立彦根東高等学校	5
兵庫県立尼崎小田高等学校	8
TEAM-3A	11
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム	14
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム	17
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	20
神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	23
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	26
兵庫県立大学 学生災害復興支援団体 LAN	29
パネルディスカッション	33
閉会のあいさつ	44
第2部：阪神・淡路大震災30年 特別企画	
震災30年スペシャル座談会	45
記念ミニコンサート	51
特別シンポジウム	52
グラフィックファシリテーション記録	71
災害メモリアルアクション KOBE2025 のことば	73
プログラム	74
委員・学生名簿	77
発表風景等	79

災害メモリアルアクション KOBÉ ACTION2025

「KOBÉ のことば」

日 時：2025年1月11日
開会 午前10時00分



第1部：災害メモリアルアクション KOBÉ2025 活動報告会

開会のあいさつ

○牧企画委員会委員長

皆さん、明けましておめでとうございます。企画委員長を仰せつかっております京都大学防災研究所の牧と申します。

神戸で明けましておめでとうございますというのは、本日よりも、本当は1月17日に、皆さんにお目にかかっているなことを考えるという意味で、明けましておめでとうございますという方がふさわしいのではという気もいたしますが、取りあえず1月ですので、明けましておめでとうございます。

それから、この「災害メモリアルアクション KOBÉ」、本日の第2部で、この30年の議論をさせていただきますけれども、「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」、それからこの前にございました「災害メモリアル KOBÉ」で大変御活躍をいただきました小林郁雄先生が、残念ながら昨年お亡くなりになりました。小林先生は、大変このメモリアルの活動には御貢献いただきました。この会場で、昨年追悼式典が行われました。まずは御冥福をお祈りしたいと思います。

この30年という期間をどう考えればいいのか、今朝、こちらに向かう途中で考えておりました。皆さんの年齢から30引いていただくと、今日ご参加いただいております多くの方々にはマイナスになるかと思えます。私、今57歳ですので30を引きますと27歳です。先ほど安富先生にお伺いしていたら、忘れましたが30幾つ、とおっしゃっておられました。皆さんの年から30引いていただいた年というのがこの阪神・淡路大震災が起こった年でございまして、大変長い時間が経過したと思えますし、その阪神・淡路大震災のことをこの30年間考え続けている、この「メモリアル」という名前のつく活動は大変すばらしいものだと思っております。

この災害メモリアルアクション KOBÉ において、この10年間何をしようとしてきたのか。震災を体験していない人が、震災を体験していない人に伝える仕組みをつくり上げるということ、この10年間考えてまいりました。その背景は御理解いただけたと思いますが、震災を体験した人はだんだんと少なくなっていくなかで、震災を体験していない人が、震災を体験していない人に伝えるということが大変重要だろうと思っております。

そして、私たち、まだ年寄りではないですが、この震災を体験した人だけでは考えられない課題があると思っております。私たち震災を知っている人が考えても、知らない人が知らない人に伝えるということがどういふことなのかは分かりません。だから、私たちは、今日この後、御発表いただく震災を経験していない人たちと一緒に、この10年間を考えていきたいと思っております。

本日、前半にパネルディスカッションがございまして、その後、この30年を振り返る時間がございまして。その中で出てくる議論ですが、この20年から30年という長期の語り継ぎをやっていくなかで、気づいたこともございました。20年から30年という未知の領域で続けてきたということには、大変価値があったと思えます。いつも言っていますが、阪神・淡路大震災に続いて新潟中越地震、東日本大震災、そして能登半島地震が発生し、我々の阪神・淡路大震災の取組が、いつもフロントランナーということになります。

今日はこの10年間、それからさらに、1年目からの30年間というのも、同時に考えていきたいと思っております。長丁場にはなりますが、本日よりよろしくお願いいたします。以上で私の御挨拶とさせていただきます。



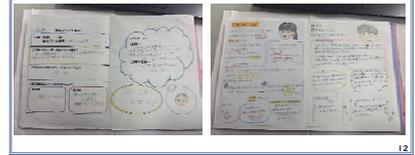
牧紀男委員長

兵庫県立 舞子高等学校

インタビューのまとめ方の改良

改良前

改良後



舞子高校チーム

災害メモリアルアクションKOBÉ2025



舞子高校チームの紹介

1年生2人、2年生13人、3年生2人の計17人で、「防災読本・避難所運営マニュアル班」と「インタビュー班」に分かれて活動している。

舞子高校チームは、舞子高校に着任した先生へのインタビューを行っている。歴代の先輩が行ってきたインタビュー活動に加えて、昨年度から『防災読本』の作成にも取り組んでいる。さらに今年度は、『避難所運営マニュアル』の作成にも挑戦した。また、インタビューの内容をより多くの人に報せる工夫もしている。

今年度のチーム目標

『相手の気持ちを考えよう』

●目標設定の理由(私たちの課題)

防災読本班が昨年度作成した『防災読本mini(簡易版)』は読み手にとって読みづらい紙面であった。インタビュー活動では、一問一答形式になってしまい、先生が本当に伝えたかったことを引き出せていなかった。

●今年度の改善点

『防災読本』に掲載する内容を絞り、大きい文字で読みやすい紙面を心がける。インタビュアーは事前準備を徹底し、インタビュー方法を見直した。

防災読本・避難所運営マニュアル班

●『防災読本』作成

○作成の目的

災害への備えや、発災時に役立つ情報を提供し、読み手がいざという時、自分の命・家族の命を守ることができるようになるため。

○内容

3部構成で、「事前の備え編」「災害発生時編」「避難所編」からなる。

●『避難所運営マニュアル』作成

○作成の目的

舞子高校の生徒が避難所運営について知ることで、災害時に運営の手伝いができるようになるため。

○内容

次の8項目からなる。
「避難所情報」「避難所での生活」「避難所の衛生管理について」「避難所での健康管理」「子供・高齢者」「障害のある人・外国の人」「ペットについて」「過去の取り組み」

インタビュー班

○インタビューの動機

舞子高校に着任した先生から被災体験を聞き、その内容を冊子にまとめて伝えることによって、読み手に震災体験を自分事として捉えてもらうために始めた。

○活動内容

新着任の先生方に、「当時のまち・家・先生の心の様子」「先生の心の支えになったもの・こと」「震災後先生の中で変わったこと」「生徒・当時の自分へのメッセージ」の4つの項目をインタビューしている。震災を経験していない先生には、ご自身が学生時代に学ばれたり、震災のお話を聞いたりして対策したことや、意識の変化について、お聞きした。

○活動の改善点

読み手に温かい印象を与えられるよう、冊子のまとめ方を手書きにこだわった。多くの人に冊子を読んでもらうために、今年度のインタビュー内容をデータ化し、舞子高校のホームページに掲載する予定である。

今後の展望

●「防災読本・避難所運営マニュアル班」

今年度の経験を踏まえ、「防災読本」や「避難所運営マニュアル」を、より実践的な内容に修正して改良していきたい。

●「インタビュー班」

引き続き、舞子高校に着任された先生方にインタビューを行い、冊子作成に取り組む。震災を経験した先生が減っていることから、インタビュー対象を地域の人にも広げて震災体験を聞いたり、能登半島地震の支援活動を体験した生徒に話を聞いたりすることも検討していきたい。

○**舞子高校1** 皆さん、こんにちは。これから舞子高校チームの発表を始めます。よろしくお願いします。

発表の流れは次のとおりです。

初めに、舞子高校チームの紹介をします。舞子高校チームは17人で活動をしています。入り口でお配りした冊子を作った防災読本班と、先生のインタビューを行い、その内容をまとめるインタビュー班の2つの班に分かれて活動を行っています。

次にキックオフ会や中間報告会でいただいた意見についてお話しします。

○**舞子高校2** まずインタビュー班がいただいた意見です。インタビュー内容をまとめた冊子が1冊しかないことから、これから生きる人や次の世代の人たちに、被災体験インタビューの話を広めることが難しかったです。

○**舞子高校3** 防災読本班では、昨年度校内で配布した防災読本について、読みにくいという御指摘をキックオフ会などでいただいたため、今年度はレイアウトについて改良を行いました。本日は、改良したものを入り口に配布させていただきました。

○**舞子高校1** 次に、今年度の目標について発表します。

今年度の目標は、相手の気持ちを考えようです。インタビューの対象となる先生や防災読本、避難所運営マニュアルの読み手のことをより一層考えた活動を行いたいと考え、この目標を掲げました。

最後に今年度の活動報告をします。

○**舞子高校2** インタビュー班では次のような活動を行いました。新着任の先生に行ったインタビューでは、阪神・淡路大震災の当時の状況や思ったこと、まだ生まれていなくて阪神・淡路大震災を経験していない先生には、学生時代に震災の授業で学んだことや思ったことなどをお聞きしました。そしてインタビュー内容の工夫とまとめ方の改良、冊子のデータ化をしました。

○**舞子高校4** インタビュー内容については、アポ取りの段階で先生の当時の年齢や居住地について伺い、それぞれに合った質問を考えました。そのことから、インタビューの際に話を深めることができました。

右下にあるメモは、7月10日に先生へインタビューをした際に使ったメモです。事前に質問内容を考えることで、当日のインタビューを円滑に進めることができます。

実際にアポを取った際に、震災後、先生が三宮を先生の御自身のお母様と歩いたことをお聞きしました。そこからなぜ歩こうと思ったのか、歩いてどう思ったかをインタビューしました。



私はこのお話を聞いて、先生が当時加古川に住んでいて、被害をあまり受けることはなかったのですが、兵庫県民として震災を知らないのは駄目だというふうにお考えになって三宮を歩かれたそうです。私はこの話を聞いて被害を受けなくてよかったで終わるのではなく、震災を知ろうとする姿勢に、私だったら安心して終わっていたと思うのですごく勇気のある行動だなと思いました。

またインタビュー冊子のまとめ方についても改良を行いました。先生1人当たりのサイズをA4からA5に変更し、まとまり感が出るようにしました。

また、決まった枠組みをなくすことで、書き手が自由にレイアウトを組み立てられるようになり、自由度が増し、伝えたいことがより伝えられるようになりました。

そのほかに、この冊子のデータ化も行いました。これにより、先生方のお話を広げやすくなりました。

このQRコードを読み取るか、舞子高校環境防災科と検索していただくと、データ化した冊子を御覧いただけます。よかったら今、御覧ください。

○**舞子高校2** よかったら今、スマホでQRコードを読み込んでいただいて、皆さんに見ていただけたらうれしいです。

○**舞子高校4** 開いていただいたら、舞子高校の先生に震災当時の記憶をインタビューという見出しが出てきます。

右の写真のようなインタビューを改良後のインタビューをした写真が出てくるので、また見てください。

○**舞子高校3** 防災読本班では、昨年度作成した防災読本の改良を行いました。入り口でお配りしていますので、そちらを御覧ください。

まず、防災読本の1ページ目、マイ避難カードのページがありますが、ここは行間を広くすることで書き込みやすくなりました。



また、3ページ目、5ページ目、9ページ目には書き込めるページを用意しました。これはメモリアルアクションの活動でいただいた意見を基に作成しました。

入り口でお配りした冊子は、実際の配布するサイズよりもちょっと小さくなっていますので、ちょっと書き込めるか、書き込めないかなと思うかもしれませんが、実際のサイズであれば十分書き込めるサイズはあると思っています。

避難所運営マニュアルも並行して作成しました。こちらも防災読本と同じようなレイアウトになっています。

例えば、5ページ目では熱中症や心のケアについて取り上げています。こちらのページでは、この紙面に載せきれなかった情報もあるので、QRコードを用いてさらに詳細な内容を調べられるようにしています。

また、一番後ろのページ、11ページには石田裕之さんや齋藤幸男先生のお話を掲載しています。

○舞子高校 1 これですべて舞子高校の発表を終わります。御清聴ありがとうございました。



滋賀県立彦根東高等学校

能登号 (1面)

1面では2024年3月、新聞部員が石川県を訪れた際に見た光景を取り上げた。地震の被害を受けた地域を訪れる中で、能登半島地震というものがどれほどの被害をもたらしたのか、そして大きな震災を経験したことがない自分が震災の恐ろしさを全く分かっていなかったことに気づいた。



災害の記憶の風化と報道について考える

はじめに

東日本大震災から13年、震災に対する報道の在り方について学ぶ最中で2024年1月1日能登半島地震が起こった。私たち新聞部はこのような震災の記憶が風化していくことと報道の関係について考えた。

能登

能登半島地震が起きて2か月後の2024年3月、新聞部は石川県へ取材へと出向いた。震源から近い七尾市などでは建物が全壊していたり、地盤が隆起していたりと大きな震災を経験したことがない私たちには未曾有の光景であった。

震源から少し離れた金沢では、建物の全壊はなかったものの建物の破損や棚のものが散らばったりと決して被害は小さくなかった

福島での学び

2023年12月から2024年1月にかけて行われた福島学カレッジに我々新聞部は参加した。そこで私たちは「東日本大震災の風化にともなう報道の変化」というテーマのもとに東日本大震災について報道する新聞は発災した2011年から2024年までの13年間でどのような報道の変化があったのかを調べた。

↓ 研究を経て

報道の風化は大きく4つの段階に分けられるということが分かった。



考察：報道と風化の段階

【風化の第一段階】

単なる事実が報道される

【風化の第二段階】

東日本大震災とはどのような災害だったのかという報道されなくなる

【風化の第三段階】

震災とは直接関係のない特集記事で、「東日本大震災」が出てくる割合が増える

【風化の第四段階】

どんな記事にも「東日本大震災」という語が出ない

まとめ

・記憶の風化は今も進行しており私たちが調べた東日本大震災も調査から風化が進んでいるといえる
・またその一方で風化というものが行き着く先は必ずしも悪い方向とは言えないのではないだろうか

○彦根東高校1 滋賀県から参りました彦根東高校新聞部の小谷、北川です。短い時間ですがよろしくお願ひします。

本日はこのような流れでお話しさせていただきます。

能登半島地震について実際に現地へと赴き取材したことや、東日本大震災に関して、1年で行ったアクションについて報告します。

○彦根東高校2 私たち新聞部は文章をしっかりと読み、読者に深く考えてもらうということを目標にし、震災報道や鉄道の利用者減少など、社会問題にも切り込んでいます。

○彦根東高校1 そんな新聞部のモットーは「やりたいことをやる」です。校内だけでの取材にとどまらず、県内、県外問わず取材してきました。

○彦根東高校2 新聞部では、福島をつなぐということで、2011年東日本大震災が発生した当時の福島県立相馬高校出版局から「相馬高校新聞」が届いたことをきっかけに、発災から現在まで約13年東日本大震災について取り上げた福島号を発行していました。しかし、2024年の1月1日に能登半島地震が発生しました。そこで私たちは、その2か月後の3月に石川県へ取材に行きました。そして、福島から能登へということで、能登での取材を取り上げることにしました。

これは実際に去年の9月に発行した能登号の記事です。1面では私たちが七尾市、内灘町、金沢市と能登半島地震で被害があった場所に行き、実際に見た光景です。石川県内でも地域によって被害の大きさや復興の進みなどに違いがありました。

○彦根東高校2 2、3面では、石川県の中でも震源地に近い七尾市や内灘町でのことを取り上げました。ここでは全壊した建物や高く盛り上がった地盤など、地震によって大きな被害があったことがうかがわれました。

○彦根東高校1 また、現地でお店を営業している人は、しばらく営業ができないという事態が続いていたそうです。

○彦根東高校2 4、5面では金沢市の取材を取り上げました。そこでは金沢市に住まれている方や、そこで働いておられる方や、観光に来られている方などに取材をしました。金沢市では、実際に訪れて被害はあまりなかったように見受けられたんですけど、取材をする中で、建物の天井板が落ちたり家の中が散乱したりと、金沢市でも多くの被害があったことが分かりました。

6面では、地震に対して自分たちにできることを考え、防災や震災への報道の在り方などについて取り上げました。

○彦根東高校1 このような活動は高校生だから、もっと言えば高校生記者だからできたことです。特に被災地でのマスコミによる取材は、マスコミ疲れにより断られることも多いそうですが、高校生が取材してくれるのだったらと、ほとんど快諾いただけました。高校生記者として、私たちのモットー「やりたいことをやる」が実現でき、震災というものを身近に感じる事ができた1年間でした。

○彦根東高校2 次に私たちのアクションを1つ紹介します。

アクションの1つは福島学カレッジへの参加です。震災、特に東日本大震災について、部員4名でおとし12月から去年の1月まで、約2か月間研究活動を行いました。私たちは風化について研究し、年月がたつにつれて新聞の震災報道の在り方はどのように変化し、またそこから新聞報道において、風化がどのように見られるかを考察しました。タイトルは「東日本大震災の風化に伴う報道の変化」とし、研究を続けてきました。

○彦根東高校1 研究発表をした際の実際のスライドの幾つかで、少し研究内容を説明させていただきます。

研究動機は、メディアは風化にどのように向き合ってきたかということについて興味を持ったからであり、研究の目的はスライドのとおりです。

○彦根東高校2 また、風化の定義を、人々がその災害の具体的な被害を忘れていき、もう一度同じような災害が起こったときに、逃げ遅れが生じるような状態というふうに定義づけしました。

○彦根東高校1 実際に調査した新聞は、朝日新聞の2012年から23年の各年12月に発行された新聞です。発災月の3月ではなく12月としているのは、防災という意味合いでは特定の月に限らず発信し続けていくことが重要であり、また、12月が東日本大震災に関わる記事の総数が最も少なく、年月がたつことによる新聞報道における報道の変化が分かりやすく表れていたからです。

○彦根東高校2 詳細は省略しますが、このような項目で実際に対象の全ての記事について内容調査を行いました。分かったこととして、1つ目は、例えば発災10年、右側の矢印です。そういう節目では記事数の増加が見られず、5年から10年の間に東日本大震災へのメディアの関心が薄れたことが分かりました。また、発



災5年で東日本大震災に直接関係していない記事が過半数を上回ったこともわかりました。

○彦根東高校1 ほかにも調査結果はありますが省略します。

そして、結論として、風化には4段階あることがわかりました。検証はしていませんが、恐らく阪神・淡路大震災についても同じようなことが起こっていたのだらうと考えています。私たちは、新聞報道が東日本大震災の被害をどのように伝えているかに着目しました。スライドのように、風化の第二段階が被害詳細が報道されなくなり、東日本大震災がどのような震災であったか人々が忘れていくという段階です。発災後5年でこの段階へと移行したことがわかりました。

○彦根東高校2 また、第三段階は東日本大震災に直接関係していない記事の割合が大きく増えるという段階です。この段階で復興が一段落し、メディアとしての被害を伝えていくことへの関心が薄れます。これが約10年で第三段階へと移行しつつあることがわかりました。

○彦根東高校1 最後に、ある質問を皆さんに投げかけたいと思っています。私たちが研究を進めていく中で、私たちに尋ねられた質問がありました。それは風化は進行してはいけないのかという質問でした。

○彦根東高校2 私たちはこの1年間、メディアとして風化を防がなければならないという立場に立って活動を続けてきました。しかし、質問では、大規模な震災を経験した人々にとって、震災をずっと覚えていくということは苦しいことなのではないかと尋ねられました。

○彦根東高校1 実は風化を防がなければならないというのは、被害を受けていない人による勝手な押しつけなのかもしれないのです。

○彦根東高校2 研究をしていく中で、実際は福島で被害を受けたかなり多くの人が、福島を離れたまま戻っ

てきていないことがわかりました。

○彦根東高校1 多くの被災者にとって、震災を思い出すのは苦しいだけなのかもしれません。そして、風化してもいい、忘れてもいい、この言葉が被災者を悲しみから救うこともあると思います。

○彦根東高校2 ただ、風化を防ぐということは、もう一度同じような震災が起こったときに避難を促す役割があると考えています。

○彦根東高校1 しかし、これは現代の技術があれば、一般の人々の記憶が風化しても被害は防げると考えることもできると思います。例えば南海トラフ地震の注意喚起として、映像シミュレーションを活用した報道が行われてきました。南海トラフ地震の前例、昭和南海地震の被害を伝え続け、風化を防いでいくことよりも、現代技術を用いたほうが発災時に避難を促すことができるかもしれません。

○彦根東高校2 このように、あくまで一意見として、一般の人々にとって、風化の進行は絶対的に悪いことではないと考えられると思うのです。風化については様々な意見があると思います。私たちがこの問題については考え続けていきたいと思っています。

○彦根東高校1、2 御清聴ありがとうございました。

兵庫県立 尼崎小田高等学校



阪神・淡路大震災30年 災害メモリアルアクションKOBЕ 2025

尼崎小田高等学校看護医療・健康類型

荒木楓 大竹咲綾 喜納歩葉 中塚莉子

『助けて』といえる地域コミュニティづくり

「災害が発生した時に学校が『HUB』となり、
地域コミュニティが協力できる関係の構築」を
⇒平素からの「顔の見える関係づくり」
「自助を支え、公助を補い、互近所・共助を強化する」

今年度の活動内容

【第1】災害時要配慮者(避難行動要支援者)の支援を考える

ア-1:「安心防災帳」の作成と障がいを持つ人と実施(11月9日)

(障害を持つ人5名、支援者3名、高校生5名参加、教員1名、計14名)

(以下、国立障害者リハビリテーションセンター研究所作成を使用)



【学習】①地域のハザードマップの提示と過去の災害で発生した被害の概要②地域の指定避難所、福祉避難所の状況の提示
【ワーク】オーダーメイドの備えリストの作成、ライフライン(電気、ガス、水道)が停止した状態で「日常生活するために必要な備え」を「備えシール一覧」から選んで確認していた。

利用者さん(障がいを持つ人)の声

○防災のこと、知らなかった。今から勉強しますわ。○おもしろかったです。○楽しかったです。○難しかったです。○懐中電灯がいるわ。ろうそく危ないわ。



高校生の声

○どう説明すれば理解してもらえるのかが苦労をした。支援者の方がよく理解しやすいように助けて下さった。○家の中に何があるのかなどわかっておられないので、支援者の方に聞いたが、支援者の方もおおよしかわからないとのことであった。○ほとんど準備がされていないことがわかった。これを契機にやっていたいと言われていた。○地域とのつながりが薄いと感じた。医師や看護師とも災害時、業などどうするかの話し合いがされておらず、連携の大切さがあった。○利用者さんと支援者がいっしょにこのような取り組みを行うことでどんな支援が必要なのかをわかり、災害時につながるのではないかと考えた。継続的な取り組みが必要であろう。

支援者の声

○この取り組みを通して、お互いを知る機会になり、1対1で話をすることで、理解が深まったと思う。○普段から障がい者ではなく、地域の～さんと顔の見える関係で関わりたい。災害時に助け合うことができると思う。○障がいを持つ人は他にもできないのではない。できないところを支援するだけで、私たちが変わらない。○災害は避難訓練以外には、防災・減災について考えることはないの、貴重であった。支援者として、今後どう取り組むのか、考えるきっかけになった。○支援者も、利用者さんが避難行動要支援名簿に登録されているかどうかを管理していない。ささく共有化していきたい。○防災・減災という観点で備えておられる家族さんはほほいなく思う。大きな課題である。

ア-2:「安心防災帳」の作成を高齢者の方と実施(12月19日) 高齢の方15名、高校生4名、教員1名、市役所職員2名、計22名 高齢者の方の声(自治会)

○携帯トイレ、非常持ち出し袋、笛は特に必要だと思った。○防災意識を絶えず持つことが大切だ。○近所の方と共有しないといけないと思った。○災害について全く準備していないことが気づかされた。耳が聞こえないことで話の理解が進まず、災害時に不安を感じた。○家に帰って、家族と話し合いたい。



イ: 災害時要配慮者・支援者へのインタビュー

【人工呼吸器ユーザーの方 ご本人にインタビュー 豊中市】
○電源がなくて生きていけない。困ったら手を差し伸べてほしい。
○電源のバッテリーなど貸し出しや補助金を出してほしい。各家庭で用意には限界がある。各家庭で病院に振り分け、病院がバグしないようにと案が出ているが至急実施してほしい。
【医療的ケアが必要な方 支援者にインタビュー 尼崎市】
○電源の確保を、避難できるようにしてほしい
○福祉避難所より大規模病院や医療的ケアができる場所に避難するため、避難できる所をもっと増やしてほしい
→個別避難計画の対象者である。不安が多いし、福祉避難所では対応できない。
「公助」の必要性。
【障害者の方ご本人にインタビュー 尼崎市 調色色素変性症、クローン病、パーキンソン病】
○自助を徹底的に行っている。見ただけでは障害とはわからない。障害について知ってもらいたい。遠ざけるのではなく、想像力を発揮し、理解し、歩み寄ってほしい。
→「障害」といっても多くの人は知らない。同じ病気でも人によって症状が全く違う。

ウ: 発達障がいをもつ人の理解促進のための劇の再考・上映 (先軍作成を引き継ぐ)

【第2】防災・減災文化を地域社会に!

- 8月2日(金) 防災ジュニアリーダー阪神・丹波地区研修会
防災・減災イベント(伊丹・イオンモール)
 - 10月6日(土) 尼崎市民祭り(尼崎市立中央中学校体育館)
 - 11月10日(日) 第7回あまおだ減災フェス(小田南生涯学習プラザ)
 - 11月10日(日) 「普段の献立にも役立つ おやこ防災クッキング」
 - 11月22日(金) 「つながる防災」あまおだ防災訓練(本校)
避難所開設、フレイル防災、救急法、災害食クッキング、ペット防災
 - 12月17日(火) 難波の梅小学校防災出前授業(難波の梅小学校)
 - 12月18日(水) 杭瀬小学校防災出前授業(杭瀬小学校)
 - 12月19日(木) 立花西小学校防災出前授業(立花西小学校)
- 【今後の予定】
- 1月25日(土) 防災・減災を地域住民と中学生と考えるワークショップ

- 防災ジュニアリーダー阪神・丹波地区研修会
- 第7回あまおだ減災フェス
- 「普段の献立にも役立つ おやこ防災クッキング」

「親子で保育園の子もまたが『楽しかったよ』と笑顔を見せてくれた。一方、改善すべきところもたくさんあった。例えば、サインボード作りではハサミを使う工程があるため、小さい子にはハサミが扱えなかったり、危険が伴うことだ。また、開通し難いや神経衰弱では楽しんでもうええもの、このゲームを通して理解してほしいことが伝わっていないのではないかと感じた。



●つながる防災

市公式YoutubeのURL フレイル予防体操動画
市公式HPのURL フレイル予防体操動画

約200名弱の参加 地域住民約60名、看護医療・健康類型生徒65名、震災・学校支援チーム(EARTH)約35名、主催側25名

●小学校へのお出前授業

●子どもと一緒にスリッパを作った。一度作っただけでは覚えられないから完成したものを聞いて、一から作ったり、作り方を覚えた子は他の友達に教えてあげたりと主権性を持って楽しんで学んでくれたことに感じた。●防災リュックのプースを担当して、改善点は終わった後に正解として、なぜ必要なのかを書いたプリントを配布すれば家庭の防災リュックの確認にも活用することができたのではないかと感じた。●全体での勉強タイムの作り方の話やサインボード作りのプースで学んだことを活かして、「これはトイレを作るのに必要な防災リュックに入れておくべきだ」との意見もあり、学んですぐ知識を高用してくれていたことが嬉しかった。●子どもたちだけでなく、高齢の方や中学生、親世代と幅広い世代のペットを飼っている方へ、ペット防災がいかに大切かということを伝えられるような機会があればなと感じた。

まとめ

2016年から地域コミュニティづくりに取り組んで9年が経過しようとしている。能登半島地震、それに続く豪雨災害において、災害時「要配慮者」の処遇、避難所の生活の状況は以前よりは進んだとは言え、心許ない。「要配慮者」自身の自助・共助の動きも鈍い。9年間、防災・減災文化を地域に根付かせ、地域コミュニティを構築することが、地域医療・地域福祉につながることを考え、看護・医療類型として取り組んできた。「つながる防災」の住民の参加者は60名を越えた。「あまおだ減災フェス」を7年間、地道に取り組んできた成果であるとも言える。「継続は力なり」、地道に続けていくしかない!

○**尼崎小田高校 1** 兵庫県立尼崎小田高校看護医療健康類型です。よろしくお願いします。

○**尼崎小田高校 2** 災害時に助けてと言えるように、ふだんから顔の見える関係づくりイコール地域コミュニティづくりを実践している取組について報告します。

今年度の活動は大きく分けて、2つあります。第1にメインの活動である災害時要配慮者の支援についてです。

まずは安心防災手帳の作成です。これは障害を持つ方、高齢者の方と支援者、そして私たち高校生が話し合いながら、災害が起こりライフラインが停止したと仮定し、7日間の生活をしていくために必要な備えを身体・精神状況と生活状況を考慮し、話し合っていくというものです。

11月9日に障害を持つ方と、12月19日に高齢者の方とこのような取組を行いました。この写真は11月9日に実施したときの写真です。これからそれぞれの声を報告します。

まずは施設の利用者さんの声です。興味を持ち、新しい気づきがあったことが分かります。

次に支援者の声です。施設ではなかなか防災・減災について考える機会がなく、今後支援者としてどのように取り組むべきか考えるきっかけになった、防災・減災という観点で備えておられる御家族さんはいないと思う、大きな課題である、です。

防災・減災に意識的に取り組んでいる NPO 法人ですが、実態はこのように心もとない状況です。なかなか進んでいないのが実態だと言えます。

最後に私たち高校生の声です。地域コミュニティのつながりが希薄であり、災害時のことをあんまり考えられていないことが分かったことです。だからこそ、このような地道な取組が必要であると切実に思いました。



○**尼崎小田高校 3** これは12月19日に行われたある自治会の高齢者向けのイベントです。これらに参加された方、高齢者の方の声があります。これらの声を聞いていると備蓄品の準備が足りていないことが分かります。

このときアンケートも採りましたが、ここに参加されている方全員が65歳以上で、避難行動要支援者名簿の存在のことが知りませんでした。地道ですがこの活動を広げていき、浸透させていくことが大切だと考えました。

次に、災害時要配慮者の支援、2つ目です。

避難行動要支援者のイ、人工呼吸ユーザーの方、医療ケア児の支援者の方、難病患者の方にインタビューしました。私たちの知らない苦労と災害時の対応について教えていただきました。

人工呼吸器ユーザーの方、医療的ケア児の支援者の方は、電源の確保を公助で行ってほしいこと、福祉避難所への避難ではなく、病院への避難を求められています。

難病患者の方は自助を徹底的にやっています。私たちを遠ざけるのではなく、想像力を発揮して歩み寄ってほしいとメッセージをくれました。

私たちはこのことを市民の方、市役所の方に伝えていくことが役割だと考えています。

○**尼崎小田高校 4** 災害時要配慮者支援について、3つ目です。

昨年度先輩たちが、自閉スペクトラム症のナミちゃんの生きづらさとお母さんの苦労、支援の方法について、劇の作成を再考しています。

○**尼崎小田高校 1** 多くの報道がされているように、能登半島地震のときも、発達障害を持った人の避難所での生きづらさは変わっていません。多くの市民に伝えていくことの必要性を感じ、より伝わるように改善をしているところです。

8月には災害メモリアルアクション KOBE2025 に集まる大学生や高校生の意見を聞き、その意見を基に再構成をしています。

今までの5年間、看護医療健康類型では、災害時要配慮者の方の生きづらさと関わり方の劇を通して訴えてきました。これらを後輩に引き継ぎ、2025年度には集大成を作りたいと思っています。

第2の取組として防災・減災文化を地域社会に広げていくことです。「防災・減災意識を日常化・自分事にしていくには」「災害時の要配慮者のことを自分事にしていくのか」というテーマに、1月25日にワー

クショップを行う予定です。それを残して、全て終わりました。

12月の終わりの3日間は小学校に行き、防災出前授業を行ってきました。防災・減災を楽しく、日常のこととし、特別なものではないと考えてほしいという思いでイベントを通して、啓発に取り組んできました。

8月2日に行った伊丹イオンモールでの防災・減災イベントと、11月10日に行ったあまおだ減災フェス、同時に行った親子防災クッキングの様子の写真と感想を掲載しています。イオンモールでの防災・減災イベントでは子供たちの喜ぶ姿を見れた一方、間違い探しや神経衰弱などのゲームの意義が子供たちに伝わっていないのではないかとという反省点が述べられました。

あまおだ減災フェス、同時に開催された親子防災クッキングでは、災害食は災害食ではないと思うほどおいしく、子供たちに非常に好評でした。

また、高校生が主体的に地域で防災・減災文化を広めていることに対してお褒めの言葉をいただきました。

今年で7年目のあまおだ減災フェスは、地域では定着した行事になっています。

○**尼崎小田高校2** 11月22日につながる防災を行いました。

本校が主催となって、兵庫県立大学大学院、尼崎市防災士会、日本赤十字社兵庫県支部、兵庫県の学校支援チーム「EARTH」の先生方と一緒に、救命法、AED、災害食、ペット防災、避難所の開設、ダンボールベッドとトイレの作り方など、各ブースに分かれて学びました。多くの生徒がつながることの大切さを感想で書いていました。

また、参加された「EARTH」の先生方からは、地域住民がたくさん参加されていることに驚いた、活動を続けている成果だと感じた、生徒が地域住民との関わりに慣れていると感じた、日頃の取組ゆえだと感じた、高校生が地域の高齢者と話しているのを見て、地域の防災にとって大切な取組だと感じた、地域力の強さを感じた、高校生が中心になって自ら行動している姿を見ることができた、というように、ここ8年間地域コミュニティづくりを頑張ってきた成果が少しずつ形になっているなと思いました。

○**尼崎小田高校3** これは3校の小学校訪問の出前授業の感想です。

防災リュックを担当した。終了後に「なぜ必要なのか」を書いたプリントなどを配れば自宅での防災リュックの確認を生かすことができたのではないかと



思った、などの感想がありました。

小学生に防災を伝えるということは大変なことですが、子供たちに伝わってよかったという思いであふれました。

最後に、どこにも災害時要配慮者の中にはペットは入っていないのですが、私たち飼い主にとってはかけがえのないもので、人と変わらず災害時には特別な配慮が必要な弱者ではあると思いました。だからこそ、災害時にペットを守るために、飼い主がきちんと災害時に備えて平素からペットと向き合うことと、訓練をしていくことが大切であるということで、そのことは声を大にして伝えたいです。

災害時配慮者の支援について詳しく述べてきましたが、能登半島地震においても災害時要配慮者の生きづらさは変わっていません。この取組を始めて9年、むなしい、もうやめよう、進まない、でも看護医療健康類型だから。そのことはいつも頭の中で回っています。

今年度も行政の隙間を埋めるという取組を地道にやっていくしかないという思いで取り組んできました。

○**尼崎小田高校4** 防災安心手帳の取組の中でさえ、防災に関心のなかった障害を持つ人が、私たち高校生と関わったことで、防災手帳を冷蔵庫に貼って保管したということを支援者から連絡がありました。微力だが無力ではないと思いつつ、後輩に引き継ぎます。

以上で報告を終わります。ありがとうございました。

TEAM-3A

めいなん防災ジュニアリーダーMRDPからTEAM-3Aまで		
2013	2022	2024
2013年生徒会・ボランティア部員で防災ジュニアリーダーがスタート。次の地域防災活動のグループが誕生！ めいなん防災ジュニアリーダーMRDP	2022年現役生と卒業生で活動する新しいメンバー登録制グループが誕生！学校以外で活動する自主活動グループ TEAM-3A	行政・企業などと連携して地域の未来を担うユース育成プロジェクトを明石市内でスタート！
		

TEAM-3A



Produced by 特定非営利活動法人TEAM・あげあげ

【CONCEPT】いつでも・どこでも・だれでも楽しく防災

チーム名の三つのAは A(akashi)A(association)A(age) 明石のyouthが地域防災に取り組むチームを表します。

1. チーム紹介

2022年5月

明石市内の高校生が幅広く地域防災の活動に取り組むために自主的に集合!!
NPO法人TEAM・あげあげのサポートで学生による地域防災チームを結成!!

チームの前身めいなん防災ジュニアリーダーMRDPで培った「地域で繋がる防災」の実践を開始しました。

現在は31名(中学生から社会人まで幅広いユース世代)がメンバー登録して活動中!!

2024年からの目標
地域でユース育成!!



TEAM-3Aの活動はTEAM・あげあげのホームページで随時紹介しています。以下のQRコードからご覧ください



2. オリジナリティ

- I 「できることをできる人がする」自主性重視のチーム
- II 視点を地域コミュニティに置いた取り組み
- III 手作り感覚の活動

3. 2024年度の主な活動(12月まで)

【今年度からの活動指針】

- 各地域にユース世代の育成を提案する。
- 阪神・淡路大震災から30年を迎えるにあたって震災の振り返りを通じて現在の地域の問題と解決に向き合ってもらいたい。
- 5月 鳥羽まちづくり協議会主催で地域のユース世代育成を提案。
- 7月 西明石活性化プランワークショップで若い世代の夢を提案。
この月から高齢化の進むマンション・地域の自治会で阪神・淡路大震災の振り返りと地域の問題と解決に向けた協議に取り組んでいただく。グループから大学4年の明石市が公募する「市民参画推進委員」に選ばれる。
- 8月 「さかな文化祭あかし」への出展を依頼され「魚を使った非常食」開発の取り組みを開始!
- 10月 連携している明石市・明石市社協・コープこうべから秋以降のイベントへの出展依頼を受ける。
- 12月 明石市立江井島小学校で阪神・淡路大震災から学ぶ「ぼうさい」について防災学習を実施。

年明け以降も防災訓練、小学校での防災授業などすでに数件の依頼がありました。明石市内においてはTEAM-3Aはユース世代の地域防災グループとして認知されてきたことを実感します。また、これまで活動の定番であったオリジナルゲーム「あにまるず」と阪神・淡路大震災から30年の節目にスタートした「防災とは何か?」という簡単なようで一言で答えにくいテーマへの取り組みが、これまで関係のあった地域では浸透していることも感じる一年でした。

◎TEAM-3A From Now

●2013年兵庫県教育委員会の「中高生防災リーダー育成事業」参加により明石南高校に地域に防災を伝える地域活動チーム「めいなん防災ジュニアリーダーMRDP」がスタートしました。部活動でも生徒会活動でもなく普通の生徒たちによる手作り感覚の活動はオリジナルの防災ゲーム「あにまるず」を誕生させました。この活動は新聞やテレビでも紹介され地域に知られるようになり2022年に活動が停止状態になり、学校を離れた在校生と卒業生による自主活動チームTEAM-3Aが誕生しました。

●2023年から「未来のあかしを担うユース育成」を目標に掲げ2024年にはこれまでのメンバーのほかに地域の中から自発的に中学生や他明石南高校以外からも加入し、社会人から中学生まで幅広い年代のチームになりました。この取り組みをさらに地域に広げていきます!!



明石市が主催するタウンミーティングに積極的に参加
地域のユース育成を呼びかけます!!



2024年の最大の変化は中学生と明石南高校以外の関係者の参加!!
両端にいるのがその二人。左:兵庫大学教育学部2年 右:野々池中学校2年



上:鳥羽小学校区まちづくり協議会主催で生まれ育った地域で活動します!!は直轄したメンバー、大きな招きが起りました。



UniDelight TAKASAGO
2024年のもう一つのトピックはTEAM-3Aに刺激された高砂高校の有志生徒のグループが誕生したことです。「灯が人を繋ぐ」をテーマで災害時にも光で安全安心に過ごせるように工夫した取り組みを展開しました。

◎2024年のTEAM-3A



7.27 シャルマンコーポ防災研修会



10.5学生ボランティア集合!



11.2あかしボランティアフェスタ



11.9和阪小学校区ボランティア交流会防災研修会



11.24大蔵中学校区ボランティア交流会防災研修会



12.6江井島小学校防災授業



12.8平和のついで

2024年は能登半島地震と阪神・淡路大震災から30年を活動の内容に置いてメンバーが防災学習の講師を務めました。定番メニューの「あにまるず」は主にフェスで実施してこれまでと同じように「備え」の大切さを伝えました。

明石市民参画推進委員

明石市が今年度公募した委員にTEAM-3Aのメンバー西岡ゆき(兵庫県立大学4年)が選ばれました!!
2年間の任期で明石のまちづくりに行政とともに取り組んでいきます。

○ **TEAM-3A 1** 今から、TEAM-3A の発表を行います。兵庫教育大学の平川莉子です。

○ **TEAM-3A 2** 野々池中学校の奥田彩世です。

○ **TEAM-3A 3** 明石南高校2年生、チーム代表の松岡友菜です。本日はよろしくお祈りします。

まず最初に、8月のキックオフ会で見ていただいた動画をもう一度見ていただこうと思います。

[映像視聴]

○ **TEAM-3A 1** 私からは、めいなん防災ジュニアリーダー MRDP から TEAM-3A までの背景を簡単に説明させていただきたいと思います。

2013年に生徒会やボランティア部員で防災ジュニアリーダーがスタートされました。次の年、地域の防災有志のグループが誕生しました。それがめいなん防災ジュニアリーダー MRDP というものです。

次に2022年に、現役生と卒業生で活動を行う新しいメンバー登録制グループが誕生しました。学校という枠にはまらない自主グループです。それが TEAM-3A になります。

そして2024年から現在にかけては、行政や企業などと連携をしていき、地域の未来を担うユース育成のプロジェクトを明石市内でスタートしました。私は TEAM-3A が結成される前の防災ジュニアリーダー MRDP から活動を行ってきました。

今から防災ジュニアリーダーに参加した理由や活動内容について、簡単に御説明させていただきたいと思います。

まず、私が参加しようと思った理由は、学生が主体となり地域の方と関わり合う姿や、復興支援のため被災地を訪れる姿に憧れを抱いたためです。

主な活動内容は、高校1年生の際、復興支援のため南三陸を訪れました。その際、地震、津波の恐ろしさを肌で実感するとともに、災害の経験を継承していくことの大切さを改めて実感しました。そして高校2年生から現在にかけては、高齢者施設で、防災替え歌のイベントを行ったり、オリジナル防災ゲーム「あにまるず」の活動を行ったり、様々な活動をしてきました。

これらの経験を得て、私は地域コミュニティの重要性を知るきっかけとなりました。日常時に情報交換を行うことで、災害時に迅速な対応ができること、共助の大切さを学ぶことになりました。今後も地域とのつながりを大切に、活動の幅を広げていきたいと考えています。

○ **TEAM-3A 3** 私も同じように、この TEAM-3A に入ったきっかけなどを話していきたいと思います。

私が入った理由は、学校の部活動の先輩が入っていたという簡単な理由でしたが、今ではこの明石市長さんからもすごい期待されているこの大きなチームで、代表としてたくさんの行事を通じて、いろんな方と関わることが楽しくて今の活動を続けています。

今年もチーム代表として、このチームを大きく成長させていけるように頑張っていきたいと思います。

○ **TEAM-3A 2** 私もこのチームに入った理由をちょっと説明します。

幼稚園のときに、防災ジュニアリーダーで明南高校のお兄さん、お姉さんたちがやっている活動に参加して、すごく楽しくて憧れを持って、自分も参加したいと思ったときに、3Aの活動を知ったので参加するようになりました。

中学生でまだまだ分からないこととかもあるけど、頑張るので応援よろしくお願いします。

○ **TEAM-3A 3** ここからは去年の活動の特徴について、少し紹介させてください。

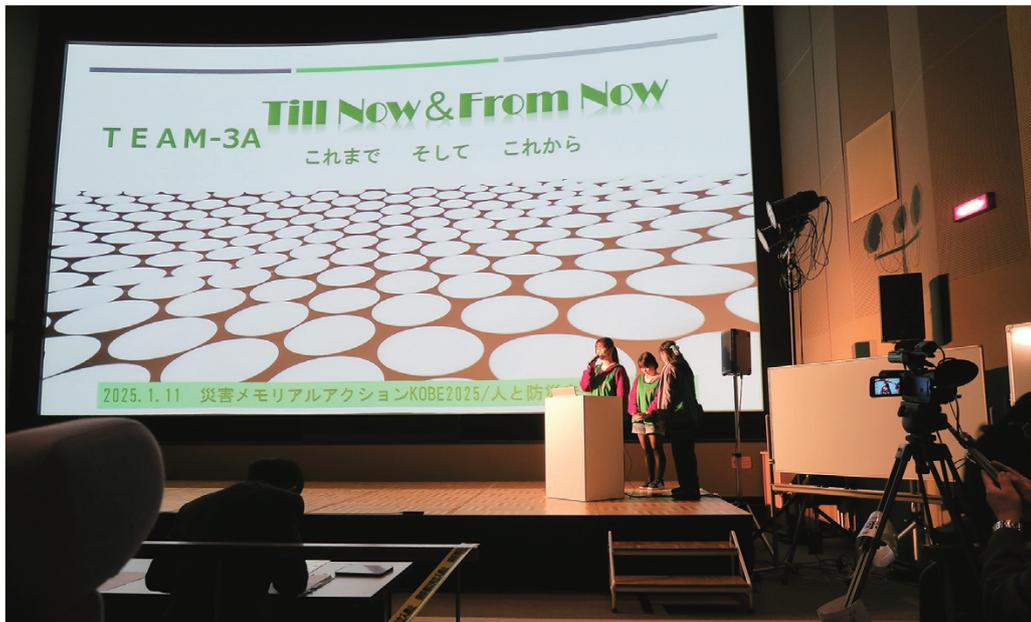
フェスでは楽しく防災を伝える自助と共助の大切さを、私たちのオリジナルゲーム「あにまるず」で伝えてきました。元日に発生した能登半島地震と、阪神・淡路大震災から30年をきっかけに、防災研修会や小学校の防災授業で私たちが講師を務めて、たくさんのイベントをしてきました。

そして、今年度からの活動は今までどおり「いつでもどこでも誰でも楽しくぼうさい」、できる人が、できるときに、できることをモットーに頑張っていきます。

そして活動できるいうユース世代を増やしていくことです。私たちの活動を一緒にできる仲間を増やしていこう、増やしていきたいなというので、今年も活動していきます。

その1つとして、高砂高校の有志グループ「ユニテライト」というのが誕生しました。2年前から交流の





あった高砂高校の有志グループが誕生し、グループ名はこちらです。活動のコンセプトは、明かりが人をつなぐ、大きな地震が起こって停電が続いても安心できる、手作りランタンで活動を開始しました。

そして、今年度は私たちのチームでも新しいグッズを作っていきたいなと思っています。それでジェンダーレスの防災紙芝居に挑戦しようかなと思っています。

視覚障害者や聴覚障害者の人にも対応できる防災紙芝居を作っていきたいなという考えが出て、そこからみんなでミーティングを今年は重ねて、作っていきたいなと思います。

御清聴ありがとうございました。これからもTEAM-3Aをよろしく願いいたします。

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135° (明石高専防災団) 開発チーム



D-PRO135°

明石高専防災団 開発班

新ゲーム「だうでい」の完成

2023年4月から始まった、防災版人狼ゲームの企画。昨年度は、防災の組み込み方を考えながらルールを土台を作りました。また、対象年齢を同世代に絞ると方針を定め、冬にこのゲームを”災害疑雨(だうでい) -doubting disasters-”と命名しました。2024春はカード版、夏はアプリ版の初版が完成し、メモリアルアクションのキックオフ会より校外展開を始めました。その後、知り合いやメモリアルアクションで繋がりのある高校を中心に展開を進めていきました。地域連携チームが展開を通して集まった感想やフィードバックを開発チームに報告し、アプリ版の改善やカード版第2版の製作を行いました。



だうでいの地域実装と改善

体験していただく中で、初期に多くあったフィードバックはゲームそのものに関するものでした。例えば、理解に時間がかかる・カードが読みにくいなどです。そのため、はじめのころは防災意識の変化や学んだことを聞く段階に進めませんでした。ゲーム説明方法やデザイン変更を通して、ゲームの不備に気を取られず、そして防災に自然と意識が向くよう改善しました。

体験した人からは、「防災のゲームと聞いたので乗り気ではなかったが、防災の要素を除いても魅力があるほど、ゲームそのものが面白かった。」「遊ぶほど防災グッズが暗記レベルで覚えられる。」「友達だけでなく家族でも遊びたいが、このルールでは少し難しい」などの声をいただきました。何回でもやりたいと思える・遊んだ後に防災について考えてもらえるゲームとなれるよう、改善を進めます。



「つめつめ」の完成

今まで、数多くの地域のイベントでゲームを体験していただきました。イベントの参加者層は3~10歳程度ですが、幼稚園児には難しいゲームもあり、遊んでいただけないこともあり。そこで、防災グッズをついで集め自分だけの防災バックを作る、直感的なゲーム「つめつめ」を開発しました。

夏に行った防災イベントでは、すぐ近くに防災グッズの販売スペースがあり、「釣ったもの実物をすぐ確認」という流れに持っていくことが出来ました。このゲームはまだ実装の経験が浅く、改善も行えていません。今後は広報に力を入れ、つめつめの経験値を増やしていきます。



今後の活動

だうでいは、今年一年を通して基盤が整いました。神戸新聞社さんにもだうでいを取り上げていただき、認知度が少しずつ高まっています。来年度はだうでいの展開をより活発に行っていきます。つめつめの対象年齢は、これまで参加したイベントの参加者層と一致するので、経験を積みやすいゲームです。まずは存在を知ってもらうことを第一に活動します。

新しいことへの挑戦がメインの一年でした。様々なゲームが生み出されてきましたが、ゲームはあくまで手段に過ぎず、一番大切なことは「このゲームが、遊んだ人の意識をどう変化させたか」です。作って終わりではなく、継続して活動を行い、ゲームの効果を知ることが来年度の目標です。目的を忘れず、今後も開発と改善を進めます。



2015年夏に結成された明石高専防災団 D-PRO135° は有志の学生が集い日々さまざまな防災への関わり方を見つけるために日々活動しています。



○**明石高専1** 明石高専防災団 D-PRO135° 開発チームの西田です。よろしくお願いいたします。

明石高専 D-PRO135° には主に大きく分けて2つの活動があるのですが、まず1つが防災ゲームの作成、こちらは開発チームが担当しています。

そして、作成した防災ゲームを用いて地域に広めたり、地域の中学校などを訪問して防災講義を行ったりするのが、後に発表する地域連携チームとなります。

今年度 D-PRO135° の全体のテーマとして「本当の意味での全世代を目指す」というのをテーマとして設定しました。

私たちは活動10周年目を迎えて、今までも全世代に対応しているというのをアピール・ポイントとしてきましたが、今年は特に今までカバーできていなかった世代に着目して活動していくということにしました。

昨年度から部員の中で、校外に出て幼稚園や高齢者の方に活動を行っているけれども、D-PROの部員ではないクラスメイトとかには何も活動を行っていないのではないかという声が出て、じゃあ今年は高校生に防災を広げていこうということになりました。

今年度の活動は大きく分けて2つありました。まずは、昨年度の4月から開発を始めている「だうでい」の活動です。こちらは高校生をテーマに人狼ゲームと防災を組み合わせるゲームを作りました。今年度、地域実装を開始して改善版も作りました。

そしてこちらは、幼児世代に向けた「つめつめ」というゲームです。中間報告会でも少し報告しましたが、こちら地域実装を少しずつ始めています。

今日の最終報告会では、私たちの今年度の一番のメインの活動であった「だうでい」について説明しようと思います。

まず4月から中間報告会をまとめると、4月にカード版が完成して、夏頃アプリ版も完成しました。そちらをメモリアルアクションや明石高専内で展開し、それ以降も舞子高校などにも体験していただきました。

そして、改善点があったので、これから改善していきますというのが中間報告会までの話です。

また、高専防災・減災コンテストという高専生が地域の課題を見つけて解決するために活動するというコンテストがあるのですが、そちらも書類審査が通過したので、引き続き活動するという報告もしました。

次に制作についてです。

私たちの「だうでい」の一番の目的は、防災を知らない、防災にふだん興味を持たない高校生が遊んで、防災について考えるきっかけをつくるというのが一番



の目標でした。しかし、それ以前の問題としてカードが読みにくい、少しカードに今っぽさがないとか、ゲームそのものに支障があるような問題点がフィードバックで幾つか出てきました。

そこで、こちら開発チームは文字を分かりやすくし、アイテムカードに名前を入れ、役職カードを変えるといった小さな改善点ですが、そちらを作っていました。

まずはイラストに文字を入れ、全員がこのカードはこれであると認知できるようにすること、そして、少し分かりにくいかもしれませんが、上のほうに書いてある文字を見やすくすること、そして、色を変えたりして、どんな色が必須なカードであるのかを分かるようにするといった改善を始めました。

そして、カードそのもののデザインも、さらにクオリティーを上げて、高校生が遊びたいと思えるようなデザインに変えました。

また、中間報告会以降も認知度の向上に努めました。2つあります。高専防災・減災コンテストの最終審査会と、神戸新聞社さんからの取材がありました。

12月に行われた高専防災・減災コンテストでは、私たちの今年度の地域に「だうでい」を広める活動で、NHK会長賞を受賞することができました。

この機会を通じて、全国の高専生に「だうでい」を知っていただくことができ、高専防災・減災コンテストの前泊などで、5回もゲームしていただいた高専もありました。

そして、こちら神戸新聞では、アプリ版のQRコードをつけていただいたので、そこから1週間くらいは一気にアクセス数が増えたので、そこからフィードバックもいただくことができました。

ということで、今後の「だうでい」の重要にすべき点についてお話しします。

私たちの一番初めの目的は、防災意識の変化という



ふうに先ほどお話ししましたが、今年度はそこに行くまでにいろいろ弊害があったので、なかなか防災意識の変化について考えていただくことができなかったということが今年度の問題点でした。なので、来年度からはゲーム後にどんな会話をしてくれるのか、ゲーム内にちりばめられた防災要素は本当に効果があるのか、防災について調べたり考えたりするきっかけになっているのかといった、一番の目的が達成できているのかを中心に来年度は活動していきたいと思えます。

そして継続性、私たちが知らないところで誰かが遊んでいるという目標を達成できるかということを中心に、来年度は活動していきたいと思えます。

今後の予定、来年度の目標です。

まず1つは、ゲームの改良です。引き続きフィードバックをたくさんいただきたいと思っているので、ゲームの改良に努めていきたいと思えます。

また、私たちのふだんの参加するイベントは、子供を対象にしたイベントが多いので、自分たちで高校生が集まるイベントを開催するとか、参加して、自分たちから能動的に「だうでい」を広めていきたいと考えています。

また、フィードバックでは、もう少し役職とかに種類があるほうが、何回もやりたいという気持ちになれるといった声や、家族でもこの「だうでい」で遊びたいので、子供も分かるようなライト版も作っていただきたいという声がありました。

高校生に広めるには、高校生だけが分かるような複雑なゲームではなく、高校生とその家族も遊べるよう

な「だうでい」にしていくことが、今後の課題だと思います。

来年度は作って終わりではなく、「だうでい」の効果を中心に調べるような1年にしていきたいと思っています。

御清聴ありがとうございました。

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135° (明石高専防災団) 地域連携チーム

R6年度D-PRO135° テーマ

「本当の意味での全世代を目指す」

2024/1/11

明石高専防災団D-PRO135° 地域連携チーム



D-PRO135°

明石高専防災団 地域連携班

地域のイベントへの参加

今年度も多くの防災イベントへ参加し、「楽しい防災」をテーマに防災ゲームや講義を通して幅広い世代に防災を広める活動を行いました。

今年度の防災イベントでは、代表的なD-PRO135°のオリジナルゲーム「RESQ」、2022年度より展開を始めた「TRY!」、今年度開発した「つめつめ」「だうでい」など、それぞれの参加者層や目的に合わせて、これまで開発したゲームを使い分けることが出来ました。

12月は、尼崎小田高校主催のイベントへの参加のお誘いをいただき、ゲームを参加者や主催者に体験していただけました。



「逃げ地図」でのワークショップ

活動初期によく行っていた「逃げ地図」のワークショップ。11月に顧問の本塚先生が講義を行ったことで、メンバー内で逃げ地図への関心が高まりました。現在、洲本市生涯学習課と協力し、逃げ地図を利用した防災講義の準備を進めています。逃げ地図のご依頼をいただけるよう、存在と魅力を広めたいと考えています。



地域の学校などへの防災授業

今年度も兵庫県内の中学校で防災授業を行いました。継続的な依頼をいただいている中学校では、生徒が毎年違う授業を受けられるよう工夫しました。

今年度は、新たに幼稚園での授業も行いました。現在所属しているメンバーにとっては初の試みでしたが、紙芝居や新聞紙を用いたスリッパ作り、段ボールで作るキャタピラー体験など、幼稚園児が楽しく学べる工夫を行いました。

また、親子向けのイベントでも防災講義をさせていただきました。親も子も聞いて学びになる内容を考え、誰もが楽しめる講義を目指してお話しました。今後は中学校以外への働きかけも活発に行っていきたいです。



今年度の振り返りと今後の活動

今年度は、D-PRO全体として「本当の意味での全世代」を目指して活動しました。新たに始めた活動を来年度以降に繋げていくために、広報や後輩への引継ぎに力をいれていきます。

また、メモリアルアクションで出会った尼崎小田高校と防災イベントを通して繋がる事が出来ました。今後、防災に携わる者同士の関係も大切にし、共同で何かに取り組むなど活動の可能性を広げたいと考えています。

現在も、多くの防災講義と防災イベントの参加の依頼が届いています。日々活動内容やゲームが増えているD-PRO135°。講義・イベントごとに対象者のことをよく調べ、それぞれに最も適した防災ゲーム・講義を提供できるよう努めます。



○**明石高専2** 今から明石高専防災団 D-PRO135° 地域連携チームの久保田が発表します。よろしくお願ひします。

私たちは開発班同様、「本当の意味での全世代を目指す」というテーマで活動を行いました。これまでも全世代を対象にした防災を広げることがモットーに活動していましたが、カバーできていたようではなかった世代がありました。

そこで、今年度はよりそれぞれの世代に対応した防災ゲームや防災交流を開くことで、よりそれぞれの世代が防災を学べるように活動をしました。

こちらが今年度の主な活動内容になります。

まずは地域のイベントへの参加です。芦屋市で行われた55フェスタについてです。これは7歳と4歳など兄弟姉妹の子に参加していただきました。しかし幼稚園ぐらいの子にはゲームが難しく、弟、妹は待つだけという状況になってしまいました。

私たちは小さな子から年配の方までをモットーに活動を行っているため、このイベントでも全世代を対象にしたゲームを行ったのですが、参加できない人もいました。全世代対応ゲームといっても抜け穴があります。その抜け穴を埋めないと本当の全世代とは言えないため、その世代をターゲットに新たなゲームを作りました。

その1つが「つめつめ」というゲームになります。こちらの写真にあるような釣りですね。防災と釣りを掛け合わせたゲームを明石ビブレで行いました。これはシンプルな遊びになっていて、子供でも分かりやすいゲームになっています。

また、この遊んでいる場所の近くに、防災リュックの中身、ハザードマップなど、防災に関する資料を展示しており、遊び終わった子供たちやその家族と一緒にそれらを見て話し合っていました。

これは小さい子供が防災に興味を持てるだけでなく、それぞれの家の防災について考えるきっかけになれるゲームになりました。

また、過去に行っていた「逃げ地図」という活動も再開しました。「逃げ地図」は避難所までどれぐらい離れているか、色で確認できるという活動です。「逃げ地図」は実際にその地域の地図を使用するため、避難経路について実際に歩いて確認できるようになっています。実際に動くことでイメージがしやすく、記憶に残りやすいイベントになっています。これは私たちが過去によく行っていたため、今までを振り返るきっかけになりました。

続いて、地域イベントに参加、「あまおだ ふゆまつり」についてです。こちらでは高校生を対象にした「だうでい」というゲームを体験してもらいました。高校生を対象にしているイベントや講義はあまりなく、最初は明石高専生にゲームの意見や感想を聞いていました。しかし、よりよいゲームにするために、ほかの学校でも開催することで、新たな意見を取り入れることができました。これらを生かしてゲームを改善し、また新たな場所にこのゲームを広めたいです。

続いて、防災講義についてです。今までの防災講義でよくあった中学校、小学校などの継続依頼への対応を行いました。また、今までの資料を使い回すのではなく、そのときの時期や時事ニュースを加えた内容を加え、新たな講義を行いました。

また、幼稚園でも防災講義を行いました。防災に関わる紙芝居を作成し、紙芝居の中に出てきた新聞紙のスリッパを作る体験をしてもらいました。しかし、スリッパを折るのは難しく、先生方が折って渡すといった形になってしまいました。スリッパを作ったという記憶は残りますが、作り方は覚えていないという状況になってしまいました。もう少し簡単で、実用的なものを折ることを改善点として挙げました。

また、段ボールキャタピラーで避難所の退屈や運動不足解消方法を楽しく学び、大変な状況になってもできることがある、私たちにしかできないこともあると感じてもらえるような講義にしました。

続いて、1月から3月の活動の一覧です。

今までの全世代対応ゲームではなく、今後は新たに幼稚園ぐらいの子を対象にした「つめつめ」というゲームを使用し、活動を広げていきます。

来年度に向けてです。今年度は対応できていなかった2つの世代について、新たに防災の講義やゲームを考え実施しました。それらを次世代へと共有しつつ、





今まで続けてきたものも続けられるように、しっかり引き継ぎをします。

また、今年度行った初の試みは、継続するだけではなく、徐々に改善することでよりよいゲームにしていきます。

また、全世代が対応していない、まだ対応できていない世代もあると思うので、その世代にも対応したゲームを新たに考案できたらなと思っています。

以上で発表を終わります。御清聴ありがとうございました。

災害メモリアルアクションKOBÉ 2025

能登半島地震調査・最終発表

神戸学院大学 / 現代社会学部 / 社会防災学科 / 安富ゼミ



危機管理・初期対応

- 行政（災害対策本部）
 - 地域防災計画+自主防災組織の在り方
→公助に偏らないために、自助を進めていく
市民が自立することが初期対応
- 住民（仮設住宅に住む方）
 - 高齢者の多い過疎地域=コミュニティの重要性
→自助・共助だけでなく、公助も必要だ
「行政が応えてくれないので寂しく感じる。（聞き取り調査）」

意見のすれ違い

復旧・復興

- 行政の人手不足
 - 復旧に対しての市役所内の人員が足りず、被災者への充分な支援が行き渡らない。
 - また、各自治体から支援に出せる人材も多くはないため、全国での公務員不足が露になった。
- 受け入れ側の問題
 - そもそも支援者の宿泊施設が不足しているため、支援者用の宿泊施設を準備するところからだった。



マンパワー不足



-----Member-----

教授 安富 信
3年 中井 亜胡 東 実穂 植村 佳奈
宮本 優斗 安富 大貴 加賀山 潤
北添 凌駕 大角 悠真 福本 颯多
大塚 陽仁 岡崎 陸央

○**神戸学院大学 1** ただいまより安富ゼミの発表を始めさせていただきます。

まず、私たち初期対応・危機管理班から発表させていただきます。

○**神戸学院大学 2** 1月1日に発生した能登半島地震に際して、私たちは現地で二度ボランティア活動を行い、輪島市の市役所と仮設住宅でお話をお伺いしました。輪島市の市役所と仮設住宅の意見で見えてきた課題として、行政と市民のずれ違いが顕著であるように感じました。

今回は、その双方の意見をまとめ、具体的な解決策を考えました。市役所と市民のずれ違いに関して、まずそれぞれの意見から、お互いに行き違いが起きている点を探していきました。

○**神戸学院大学 3** 市役所は市民が自立することが初期対応だと考えていました。災害対策本部は意思決定をし、市や市長のフォローをしないといけない。今回の失敗、市民が抱えている問題といたしましては、公助に偏りすぎていた点です。

また、やらなければいけないことが多く、市民に手が回らなかった点、地域コミュニティが漁師と農家で仲間分けされているため、不仲だと考えられていました。

そして、市役所側が考える今後に関して、市民が自立できるようにすることと、人員とリソースの分担です。

○**神戸学院大学 4** 次に、市民の方からの意見です。まず、行政からのフォローが手薄いという意見をいただきました。特に輪島は備蓄が少なく、初日は何も食べられなかったという意見が多くて、それでも近隣の方とみんなで協力し合って、途中から来たボランティアの方からのアドバイスも積極的に取り入れることで、何とか避難所の運営を行ったという意見をいただ



きました。

次に市役所の上の方に、現在の避難所の状況を見ていただきたいという思いがあるらしいんですけども、なかなか手が回らないのか、市役所の上の方が来てくださらないという意見もありました。

さらに、輪島の市役所の方は閉鎖的で部外者の方を嫌っているという意見も多くありまして、それでちょっと確執があるかなと私は感じました。

また、行政の方が答えてくれなくて寂しいという意見がありました。一例としては、輪島の方とかは、一家に1台じゃなくて、1人1台車を持っている方がたくさんいらっしゃるそうなんですけれども、駐車場の場所を空けてほしいと行政の方に言ってもなかなか意見を聞いてくれなくて、私たちの意見が、もしかして文句みたいな感じで受け取られてるんじゃないかなと感じている、という意見をいただきました。

そこから「両者の想い」ですけども、行政の方たちとしては自分たちで自立してもらって、自分たちでできることは全て自分たちでやってほしい、そして私たちはもっと復旧のほうに手を回せるから、そうやってほしいというふうに感じているそうなんですけども、市民の方としてはもっと行政と一緒にコミュニケーションを取って、みんなでもっとよくしていきたいと考えている。そういういわゆる両者の確執があって、なかなかうまく行かない。お互いにあの人たちは閉鎖的だと考えていて、いわゆる村社会だとお互いが思っていることで、うまくかみ合わないという問題が輪島で今起こっております。それが軋轢を生んでいるのではないかなと私たちは考えました。

課題と必要なことといたしましては、まずそういう確執というものを取り除くために、市民と行政の方で積極的なコミュニケーションを取る場が必要だと考えます。ですけども、市役所の方もやっぱり復旧のほうで手いっぱい、なかなかそういう機会をつくるのが難しいと思いますので、まずは復旧のほうをしっかりと行って、復興に関しては、例えば長田の事例にあるように、市民と行政の方で積極的に意見をぶつけ合うことで、よりよい復興ができると思いますので、そういう場を設ける必要があると思います。

けれども、深刻な人手不足で、輪島とかに支援に来ていただける市役所の方、職員の方がいらっしゃるないので、そういう問題を解決することが大事かなと思います。

○**神戸学院大学 1** 続いて復旧・復興班について、お伝

えます。

当時の復旧の段階では、初期の復旧はもう全然役場が機能していなくて、進んでいないとお話を聞きました。

何で機能していないのかというと、やることが多過ぎるというのが1つありました。何でやることが多過ぎるのかといたら、人手が足りない。僕らが現地行ったときも人が街中にいないし、話を聞きに行ったときも人が全然いないという印象がありました。

支援者として入ってくる支援職員がすごく少ない。まず公務員自体がとにかく減っているらしく、プラスで周りの自治体もなかなか人を出すことができないというのはありました。人がまずいないので力不足なのが現状です。

次に、受入れ側の問題なんですけど、まず受け入れようと考えていても、受け入れる人たちを泊める、受け入れる場所がないのです。そのために、支援職員専用に仮設住宅を造っています。また、珠洲市からトレーラーハウスを持って来るなどして対策をしています。これらを備えるだけでも、およそ1,000万円ぐらいのお金がかかってしまいます。

次に、人口についてなんですけど、2040年までには8,700人ぐらいになる、推計で高齢化率が57%ぐらいになるというのが現状です。2040年の90歳以上の人口は10%です。今回の地震の発生を考慮していないのかなと思いました。2040年の90歳以上の割合は増えているのかもしれないと書いているんですけど、実際増えると僕は思っています。

○神戸学院大学2 次に、港について話していきます。

まず復旧の段階では、国の制度を使いながら復旧をしていっております。しかしながら、国の災害復旧制度というのは3年をめどに復旧していくということになっております。

ただし、自分が話を聞いたところ、恐らく3年では復旧もできないということでした。これは能登の事業者だけでは回らないということです。

次に、公費解体について説明していきます。公費解体が進んでいない。まだ倒れていたりとかそういったところ、輪島塗りのところがやっとなんか解体されるようになってきたとか、そういうニュースがあったと思います。公費解体のためには所有者の人たち全員が判子をつく必要があるのですが、それは勝手に人の財産を取ってはいけないということが根本にあるのです。これが向こうの場合、空き家とかも結構増えているということもあって、相続がされていないとか、お父さん



のところ、おじいちゃんであったりとか、さらに遡って多くの人の判子が必要になってくる。そのために公費解体が進まないという原因もあります。

また、先祖代々持っているとか、周りの人が持っているという可能性もあるため、そういった事実確認を進めていくということが、先ほどおっしゃいましたマンパワーが不足しているというところで、進まない原因になっています。

つまり、いろんな問題が結構重なっている結果、公費解体が遅れているということになっております。

○神戸学院大学1 最後に、復興に向けてということですが、これは基本的に目の前に起きている問題に対してどうにかしてくれという言葉が、市民側からは聞こえてきました。

また、実際に復旧・復興のための会議というものがあつたらしいのですが、未来志向を持っていた人からすると、基本的に目の前に対しての問題を解決してくれということが不満だったと思われております。

ただ、現状はとにかく目の前の問題に対してやっていこうということが、形として動き出すということが今の現状となっております。

以上で安富ゼミの発表を終わります。御清聴ありがとうございました。



特別号

新・全力！学院タイムズ

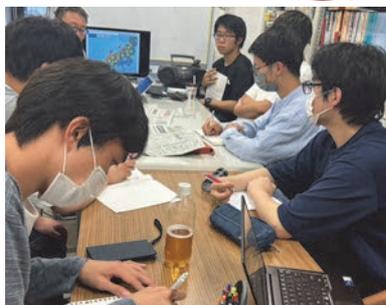
編集・発行
クローズアップ
研究会

新・全力！
学院タイムズ
2025年
(令和7年)
1月発行

特別号

再び社会に「なぜ」を問いかける

クローズアップ
社会研究会



クローズアップ社会研究会とは？

クロ社研ことクローズアップ社会研究会とは、顧問の安富信教授・局長の小林春奈をはじめとし、活動している団体だ。政治や防災といった時事問題に対して「なぜ？」という疑問を持ち、研究を行い、世の中に発信をしている。現在は4年生2名、3年生5名、2年生2名、1年生3名の計12名で活動している。去年のメモアクでは「山火事」という一味違った研究を行ったが、今回は再び「選挙と防災」に着目して研究を行った。

メモアク2025年の選挙と防災

再び「選挙と防災」をテーマにした理由

令和6年能登半島地震が発生

+

2024年度東京都知事選が行われる

➡ 再び「選挙と防災」に興味を持つ

「選挙と防災」における目的

目的は候補者と投票者のギャップについて調べることだ。

方法は以下の通りだ。

候補者視点の考え…選挙公約にて
投票者視点の考え…インタビュー、アンケートにて

メモアク2025での軌跡



公約調査

アンケート調査

インタビュー

比較・考察

新聞発行

公約調査

政見放送や選挙公報を用いて調査した。

アンケート調査

投票に行くにあたってどのような点を重視するか調査した。

インタビュー調査

神戸学院大学社会防災学科の教授陣にインタビューをした。

○**神戸学院大学4、5** こんにちは。今からクローズアップ社会研究会の最終発表を始めます。発表を担当する小林と名越です。よろしくお願いします。

○**神戸学院大学4** 最終発表の流れです。

これまでの振り返り、アンケート調査の結果、文献調査の結果、インタビュー調査の結果、まとめの順に発表いたします。

今回の研究テーマは選挙と防災です。候補者と投票者のギャップについて、今回調査しました。

調査方法は主に3点です。1つ目はアンケート調査、2つ目はインタビュー調査、3点目は文献調査になります。

まず初めにアンケート調査です。アンケート対象は神戸学院大学現代社会学部の学生を中心に、様々な方々に御協力いただきました。

アンケート結果に移ります。あなたが最も重視している政策は、という問いに対して、最も回答が多かったのが経済・財政政策でした。防災を最も重要視するという学生の回答は25.8%でした。

次に、2番目に重視する政策はという問いに対しては社会保障が挙げられました。

最後に、3番目に重視する政策は防災が挙がりました。

このアンケート結果から、防災を最も重視している学生は25.8%であり、7項目のうち2番目に重視されているということが分かりました。

現代社会学部ということもあり、日頃から防災を学習している学生が多いことから、防災を意識している学生が多いのではないかと推察しました。防災以外の項目では、経済と社会保障が重視されているということも分かりました。

次に選挙公約についてです。兵庫県知事選挙の選挙公報、政見放送を見て、1つ目、選挙の立候補者が何人か、2つ目、公約に防災を掲げている候補者が何人かということ調べました。

候補者ごとの防災政策についてです。2024年では7人中5人が、2021年には5人中1人が公約に防災を掲げていました。

2024年の公約には災害強化対策や、阪神・淡路大震災30年を意識しての対策が主に公約として挙げられました。この選挙公約から、2021年のときよりも防災を掲げている候補者が増加していること、つまり防災が意識されてきているということが分かります。

投票者、候補者ともに防災意識が高まってきていることも読み取れます。能登半島地震や南海トラフ地震

臨時情報があったからではないかと推察しました。また、30年前に阪神・淡路大震災が起きているという地域特性も影響しているのではないかと思います。

○**神戸学院大学5** 次は、インタビューを通して見えてきた候補者とのギャップについて、話していきます。

まず質問内容なんですけど、前回中間発表のときに指摘を受けたので変更しまして、教授の専門分野を交えた現状の防災の課題とその課題に対してあればよいと思う政策について、社会防災学科の教授6名にお聞きしました。

挙げられた課題はこのようになっています。地域の高齢化やコミュニティの希薄化、避難所の質の問題、支援の偏りや伝えた教訓が生かされていないといった課題が挙げられました。

そして、これらの課題に対して提案された政策や解決策について見ていきます。

コミュニティの希薄化に対しては、住民一人一人が地域の一員だと自覚してコミュニティを維持していくことが必要だという意見が出た一方で、行政のほうから多世代の関わり場の設けたり、自治体でのデジタル面でのサポートを行ったりといったことをしていくべきだという意見が出ました。

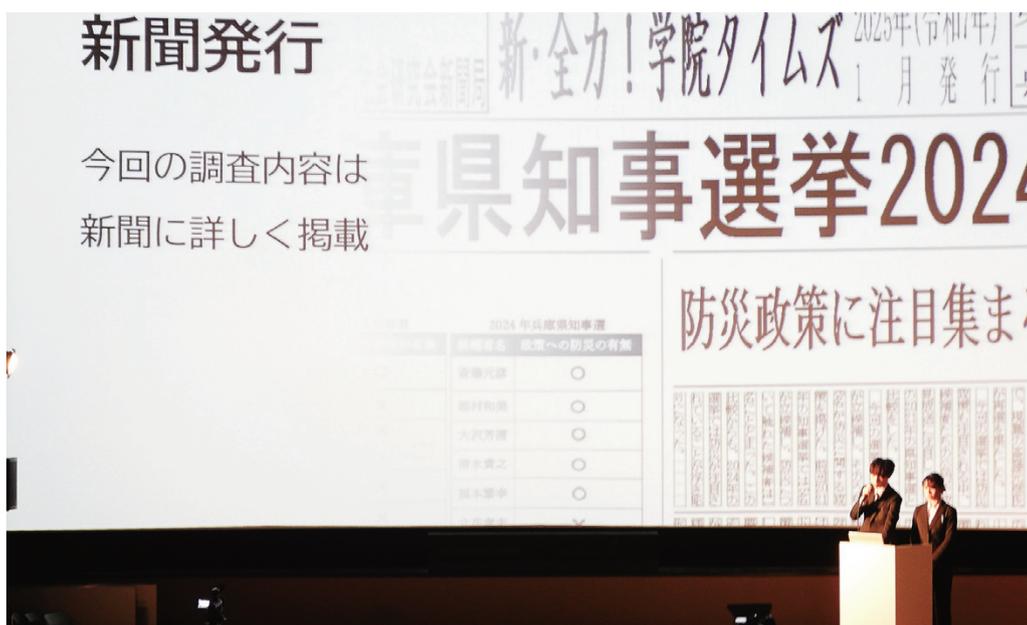
また、避難所のバリアフリー化や防潮堤の設置といった政策案も出されました。

そして、前回の能登半島地震での対応を見て、伝えた教訓が生かされていないといった意見が出て、それらの課題に対しては防災人材の育成や、公的でない記録も含めた震災の記録を残していくことが必要ではないかという意見がありました。

それで、教授からインタビューで意見を聞いたところ、大体ソフト対策の意見が多めであった印象です。

これらは、教授の出した政策案と兵庫県知事選の5者の公約を比較したものになります。防潮堤の設置で





あったり、避難所のバリアフリー化、防災教育や災害に強い地域づくりなど、共通しているワードが多いことが見てとれます。

また、選挙公報の公約を見てみると、複合災害の対策であったり津波・高潮への対策など、全体的にハード対策が多いことが分かります。

まとめです。こうした政策に共通点も見られる中で、候補者の公約はハード対策が多いことが、教授からはソフト対策の意見が多いことが分かりました。こうしたことから候補者のハード対策だけではなく、それにソフトの要素を反映させていって、両立させていく必要があると考えました。

そして、今回最後に成果物として、調査内容を詳しく載せた新聞を発行しております。先ほどお配りしたものになりますので、ぜひ御覧ください。

以上でクローズアップ社会研究会の発表を終わります。御清聴ありがとうございました。

阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか？ 東日本大震災における福島県の災害関連死の実態

保田 香音 Kanon YASUDA / 関西大学 3回生
篠原 まどか Madoka SHINOHARA / 関西大学 3回生
松本 庄平 Shohei MATSUMOTO / 関西大学 3回生

背景・目的

令和6年能登半島地震では、関連死による犠牲者が270名を超えた。その要因の一つとして、被災者が生活拠点を迅速に確保できなかったり、住み慣れない地域での拠点確保を余儀なくされたことが挙げられる。

また、東日本大震災の福島県では原発事故の影響により、生活拠点の確保が困難となり、これが災害関連死の増加に繋がったと考えられる。

本研究では、人口統計データや災害関連死申立書を用い、福島県における災害関連死の実態を分析した。具体的には、以下の3点に焦点を当てた。

- (1) 申し立てられていない災害関連死の把握
- (2) 生活拠点の数と滞在期間 (分析対象：楢葉町)
- (3) 関連死における自死 (分析対象：楢葉町)

災害関連死が社会的に初めて注目された阪神・淡路大震災から30年が経過した。その後も繰り返されている現実を踏まえ、当時の教訓は生かされているかを検証する。

結果

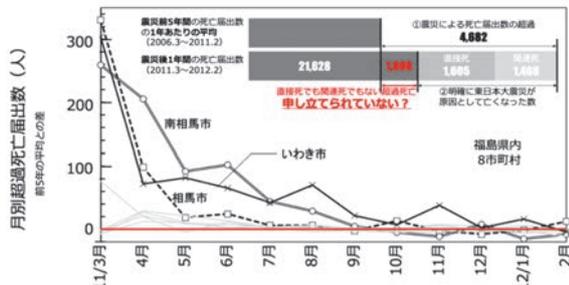


図2 東日本大震災後の福島県内8市町村における月別超過志願届出数

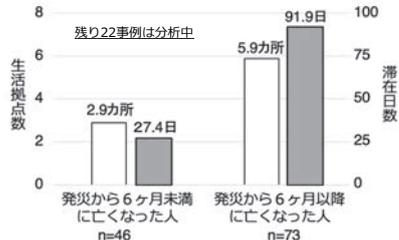


図3 生活拠点の数と1カ所あたりの滞在日数 (東日本大震災時の楢葉町の関連死163事例)

- 図2・死亡届出数の超過は震災から6ヶ月間に集中している
- 公表されている直接死と関連死の数だけでは、死亡届出数の超過を説明できない。申し立てられていない関連死か？
- 図3
- 6ヶ月以上経過後に亡くなった方々の拠点数は、それ未満の方々よりも平均で3カ所多い
 - 6ヶ月以上経過してから亡くなった方々の1カ所あたりの滞在日数は91.9日と長い。
- 図4
- 死亡直前の身体は健康的だった。住み慣れた町からの離別や配偶者との死別、被災した自宅の目撃などの影響を受け、震災から1年以上経過後に死亡に至った。

データ

- I. 福島県の市町村別・月別死亡届出数 (2006-2015)
- II. 楢葉町災害弔慰金支給審査委員会に提出された関連死等の申立書



手法

申し立てられていない災害関連死

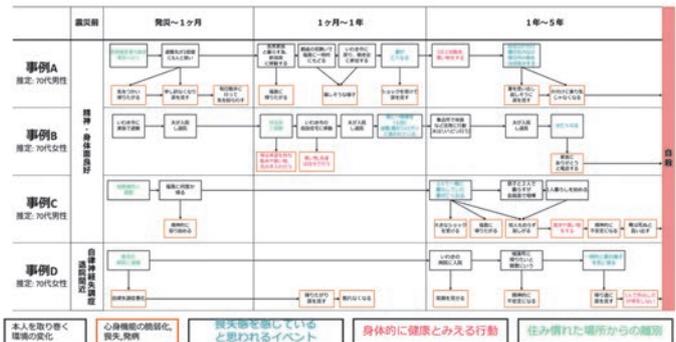
1. 2006年3月~2011年2月の震災前平均死亡届出数を算出
2. 震災前平均死亡届出数から超過した2011年の死亡届出数を算出
3. 超過分と震災を原因とした死亡届出数の差が申し立てられていない関連死であると推定

生活拠点の数と滞在期間

1. 各事例の生活拠点数とそこに滞在した日数を用いて、生活拠点数と生活拠点1つあたりの滞在日数の平均をそれぞれ算出
2. 6ヶ月以前で死亡した事例と6ヶ月以降に死亡した事例の違いを分析

災害関連死における自死

1. 死亡原因が自死の事例 (4件/176件) について、「本人を取り巻く生活環境の変化」「それによる心身機能の脆弱化・喪失・発病」を時系列で整理
2. 被災者が死亡するまでに経験した出来事を分析



結論

1. (1) 申し立てられていない災害関連死が存在する可能性があること、(2) 半年が経過しても生活拠点が安定しなかったこと、移動してしばらく問題が起きなかったことから、油断してはいけないこと、(3) 一見すると健康に見える方が、喪失感を伴う経験により生きる気力を失い自死に至った事例から、被災者の悲しみが長期的に継続することを踏まえた心理的支援が重要であること、が分かった。
2. 阪神・淡路大震災では、これらの問題がどのように認識され、どのような教訓が導出されたのか、誰がその教訓を使い、東日本大震災における福島県や能登半島地震の犠牲者がどれだけ軽減されたのか、さらに分析を進めたい。

○**関西大学 1** 関西大学社会安全学部奥村研究室の保田香音です。よろしくお願いいたします。

私たち奥村ゼミは、災害関連死における阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか検証すべく、東日本大震災における福島県の災害関連死の実態を調査しました。

背景です。令和6年能登半島地震では、災害関連死による犠牲者が270名を超えました。その要因の1つとして、被災者が生活拠点を迅速に確保できなかったこと、住み慣れない地域での拠点確保を余儀なくされたことが挙げられます。

東日本大震災でも同様に多数の災害関連死が発生しました。特に福島県の関連死は、原発事故の現況により生活拠点の確保が困難となり、災害関連死の増加につながったと考えられています。

災害関連死が社会的に初めて注目された阪神・淡路大震災から30年が経過しました。このように、この後も繰り返されている現状を踏まえ、当時の教訓は生かされているのかを検証するために、今回は福島県における関連死の実態を分析しました。

本研究では、楢葉町災害弔慰金支給審査委員会に提出された関連死などの申立書を分析に用いました。

この申立書には、図に示したような氏名、死亡の原因、死亡日、死亡場所、既往症、経過などの内容が記載されています。黒塗りになっている部分がありますが、氏名以外は全て分析に用いました。

まずは、申し立てられていない災害関連死の手法についてです。福島県における2011年の死亡届出数と震災前5年間の年間平均死亡届出数を比較しました。

2011年から1年間に提出された死亡届出数と、震災前5年間の年間平均死亡届出数との差を算出します。

差である超過分から、直接死、関連死を除いた死亡届出数が、震災前5年間の年間平均死亡届出数よりも

多ければ、申し立てられていない災害関連死の存在が明らかになると考えました。

次に、生活拠点の数と滞在期間についてです。

申立書のうち、6か月未満で亡くなった人と、6か月以降で亡くなった人に分類し、1件ごとに生活拠点の数と生活拠点1つ当たりの滞在日数を算出し、それぞれの平均を出しました。

最後に、災害関連死における自死の手法についてです。

まず、申立書のうち、自殺に該当するものを抽出しました。その後、被災者本人を取り巻く環境の変化、それによる心身機能の脆弱化・喪失・発病を時系列で整理しました。整理したものを用いて、被災者が死亡するまでに経験したイベントを分析しました。

結果です。まずは申し立てられていない災害関連死についてです。

この折れ線グラフは、市町村ごとの2011年と発災前の死亡届出数の差を表したグラフです。2011年の死亡届出数から、発災前の死亡届出数の平均を差し引いた値を示しています。

グラフの中にある赤い基準線は発災前と、2011年の死亡届出数の差が0である場合を示しています。この線上にある月は、発災前と平均して死亡届出数に変化がないと言えます。

このグラフから2011年の死亡届出数は、発災以降3か月ほどは平均並みに戻らないことがわかります。また、死亡届出数の超過は6か月間に集中しており、11月から2月にかけては死亡届出数が平年比で減少しています。

右上の棒グラフは、福島県全域で2011年の死亡届出数と発災前の年間平均死亡届出数を2011年3月から2012年3月までの1年間で比較したものです。

2011年の超過死亡届出数は4,682件でした。直接死、関連死を加味しても1,600件以上の増加が見込めます。この増加分には、災害関連死として死亡認定されていない死亡者が含まれる可能性があると考えています。

次に、生活拠点の数と滞在期間についての結果です。

拠点数に関して、発災から6か月以降に亡くなった方の拠点数は、それ以前に亡くなった方よりも平均で3か所多いです。このことから、半年経過しても拠点を転々とせざるを得なかった実態が判明しました。また、長期にわたって日常に戻れなかったことが考えられます。

1か所当たりの滞在日数に関しては、発災から6か月以降に亡くなった方は91.9日と長いことから、1か





所当たりの生活が長くなっても、生活拠点が安定しない実態が明らかになりました。また、移動して短期間で問題が起きなかったからといって、油断はできないことがわかります。

発災から6か月以降に亡くなった人は、6か月未満に亡くなった方に比べ、約7倍長く1つの拠点にとどまっていることがわかりました。

最後に、災害関連死における自死に関する結果です。

楡葉町の分析を行った結果、死亡直前の身体は健康的、住み慣れた町からの離別、配偶者との死別、被災した自宅の目撃、発災1年以上経過後に死亡という特徴が見られました。

これらの特徴から、身体は健康だが、喪失感を伴うイベントを経験し、悲しみを抱えながら生きる気力を失い自死されたこと、被災者の悲しみが長期間継続することを踏まえた心理的支援の重要性が示唆されます。

結論です。申し立てられていない災害関連死は存在する可能性が示唆されました。

生活拠点の数と滞在期間については、1つの生活拠点に長くとどまることができると、長い間生存できる可能性があると考えられます。

災害関連死における自死については、一見すると健康に見えても、喪失感を伴う経験をし、生きる気力を失い自死されたこと、被災者の悲しみは長期的に継続することを踏まえた心理的支援の重要性が示唆されます。

今後の課題はこちらです。

申し立てられていない災害関連死について、今回の

研究では、死亡届出数のみに焦点を当てました。今後は、転入・転出者数なども考慮して分析を行いたいと考えています。

生活拠点の数と滞在期間に関して、今回は生活拠点の数と生活拠点一つ当たりの滞在日数の視点から分析しました。今後は分析視点を増やして、さらに詳しく楡葉町の災害関連死の特徴を明らかにしたいと考えています。

災害関連死における自死について、今回は楡葉町の事例で分析を行いました。今後はほかの都道府県や、ほかの災害の事例での研究を行い、地域ごとの違いにも注目していきたいと思います。

最後に、今回の研究結果と阪神・淡路大震災の教訓についてです。

阪神・淡路大震災では、これらの問題がどのように認識され、どのような教訓が得られたのか、そして誰がその教訓を使い、東日本大震災における福島県や能登半島地震の犠牲をどれだけ軽減されたのか、さらに分析を進めたいと考えています。

参考文献はこちらです。

御清聴ありがとうございました。

兵庫県立大学

学生災害復興支援団体 LAN

LANと福島

- ・NPO法人野馬土のコミュニティカフェの建設支援から福島での復興支援活動が開始
- ・春と夏にメンバーを派遣し、様々な活動を行う
 - ① 現地の方からお話を聞く
 - ② 東日本大震災関連施設訪問
 - ③ 農業体験



LAN

災害メモリアルアクションKOBE

東北地方太平洋沖地震・令和6年能登半島地震 ～2つの地震から見た復興の共通点と違い～



兵庫県立大学学生災害復興支援団体LAN 北川 凌雅 芦田 悠真 島田 都羽

LANと被災地との関わり

LANと福島

- ・NPO法人野馬土のコミュニティカフェの建設支援から福島での復興支援活動が開始
- ・春と夏にメンバーを派遣し、様々な活動を行う
 - ① 現地の方からお話を聞く
 - ② 東日本大震災関連施設訪問
 - ③ 農業体験

LANと能登

- ・LAN主導で能登での活動は行っていないものの、メンバーが様々な形で支援を行う
 - ① 倒壊した家屋の片付け・掃除
 - ② 物資の運搬・陳列
 - ③ 足湯ボランティア
 - ④ 輪島塗の整理
 - ⑤ 津波被害の側溝の掃除
- ※④⑤は減災復興政策研究科主導の派遣



福島と能登の比較

福島と能登の共通点

被災状況

- ・津波による被害
- ・被災状況の中途半端に酷いところのみ報道される
 - 本当に酷いところはマスコミも入れない

復興

- ・復興に時間がかかる（ただし条件は違う）
 - 福島…原発事故による帰還困難区域の制定
 - 能登…半島（陸の孤島）のため支援が困難
- ・復興過程で何も生まれていない
- ・人口流出が避けられない

福島と能登の違い

被災状況

- ・発災時期：福島…平日、能登…元日
- ・国際支援の有無
 - 福島…在日米軍の「トモダチ作戦」が有名
 - 能登…現地の状況から国際支援を断る

復興

- ・復興を阻む大きな壁
 - 福島…原発事故の影響で支援できない
 - 能登…ボランティアが入らない（県が断る）

今後の復興に向けて

行政と住民

住民→行政への
要望の展開

普段からの関わり

地域のリーダー

地域の特性を
生かした復興

日頃からの
心の繋がり

ボランティア

復興のお手伝い

長期にわたる
関わり

私たち

SNSを活用した
発信

防災啓発活動

まとめ

- ・ボランティアの可能性は無限大
- ・日頃からの信頼関係、心の繋がりが大切
- ・復興過程で新たに生まれるものは何か？
- ・行政と住民のすれ違いにどう対応していくか？
- ・条件は違えど復興に大きな壁
- ・地域の中心となるリーダーの存在
- ・人口流出を食い止めるには？

残る課題

○**兵庫県立大学 1** これから、兵庫県立大学 LAN の発表を始めたいと思います。発表は、北川と芦田と島田で行います。よろしく願います。

まず、本日の発表内容についてですが、今回のこのメモリアルでのテーマが能登と福島を比較しているいろいろ考察してみようということなのですが、それに先立ちまして、初めに LAN について簡単に紹介した後、去年の9月15日と16日に行った福島派遣について、活動報告をさせていただきたいと思っています。

能登での活動に関しては、前回の中間報告にて発表させていただきましたので、割愛します。その後2つを比較、考察、そこから考える復興について、そして LAN で出た意見について発表します。

「LANって知らん？」ということで、LAN については去年8月のときの発表で、LAN の歴史であったり、ふだんの活動とかをお話しさせていただいたので、簡単にここで説明させていただきます。東日本大震災を機に発足した団体で、当時つなぐた福島県の NPO 法人野馬土さんと、その団体の代表を務めている農家の方なのですが、代表の三浦さんと今も関わりがあるため、現在でも毎年1回か2回程度交流しているという感じです。

ほかには兵庫県立大学の減災復興政策研究科であったり、他大学の大学生と交流をして、ボランティアに行ったりもしています。

福島派遣では農業支援をしたり、お祭りを開催したり、現地の視察をしたりしています。今年は1日目に三浦さんの説明を受けながら、原発の20キロ圏内の視察をして、相馬市、南相馬市、双葉町ら辺を車で回りました。

東日本大震災のときに津波で浸水した地域や、放射線のお話とか、当時のお話を聞いたり、そこから行政とどんなやり取りをして、どんなふうに農業を立て直していったかという話を伺いました。

この前にある左の写真がそのときの写真で、何億円か忘れてしまったんですけど、このお米の乾燥機の横で、これはこういうふうに行政職員とやり取りをして予算をつけてもらって購入したんだという三浦さんのお話を聞きました。

ほかにも最近住民の憩いの場としてつくられた新しい仮設の神社みたいなもののお話であったり、太陽光発電で企業に対して電気を売ってお金をもうけているというお話も伺いました。

2日目は三浦さんが運営している綿花栽培のお手伝いをさせていただきました。助成金であったり、予算

をつけてもらって購入した新型の農耕機械であったり、ラジコンの操作体験もさせていただきました。

能登についてはこちらのスライドを作成したのですが、時間の都合上省略させていただきます。

○**兵庫県立大学 2** 続きまして、福島と能登に行った際に感じた共通点と違いについて、発表させていただきたいと思います。

まず、共通点についてです。被災状況としては地震だけではなく津波による被害があったということです。

また、被災状況について、言い方は悪いかもしれませんが、中途半端にひどいところのみ報道されるということで、本当にひどいところはマスコミも入れなかったり、言い方は悪いかもしれませんが写真映えするような建物が、能登とかでもビルが倒れて家が下敷きになっているところの報道が結構多かったと思うんですけど、そういうところがよく報道されてしまって、本当の裏側が報道されないという問題点があったりします。

また、復興に時間がかかるということで、条件は違うんですが、福島に関しては原発による帰宅困難区域の設定や、能登は半島のため陸の孤島と化してしまい支援が困難だったというところがあります。

また、人口が流出してしまって、お年寄りだけが残って、それによる復興過程で何も生まれないというところがあります。

また、違いとしては、発災時期、曜日が全然違ったというところ。福島は平日に発生したものの、能登は元日に発生したため、帰省されている方が多く、行政としても思っていた状況とは違うというところがありました。

また、国際支援の有無に関してです。福島、主にこちら、在日米軍による「トモダチ作戦」は仙台空港な



どが有名ですが、全世界から国際支援を受け入れました。ただ、能登に関しては、現地の状況、行く交通手段がないというところから、国際支援を断ったというところがあります。

また、復興に関しては、復興を阻む大きな壁としては先ほど申し上げたとおり原発による事故や、能登に関してはボランティアが入らない、これは県が来ないでくれと言って断ったことによって、ボランティアが入らないというところがありました。

○**兵庫県立大学3** それでは、今まで挙げてきたことから、今後の復興について4つの点からお話しさせていただきますと思います。

まず1つ目が、地域のリーダーということで、被災地でのリーダーの存在というのは、その地域のことをよく知っているため、地域の特性を生かした復興ができるということと、ボランティアもお話を伺いながら支援ができる、内部と外部の両方から、そのつながりを持てる存在ということで、とても重要であると考えています。

そのため、日頃からの心のつながりが大切ということで、地域のお祭りなどのイベントを通じた交流が大切なのと、その地域のリーダーの存在がかえって浮かないようにしていくというのも大事ではないかなと考えています。

また、復興はボランティア中心でやるものではないため、その地域住民の復興のお手伝いとボランティアは定義づけられるべきではないかなと考えています。

2つ目に行政と住民の関係について、お話しさせていただきますと思います。

時々挙げられるのが、行政と住民のすれ違いということです。行政側としては住民の意見を聞きたいんですけど、住民からすると行政が意見を聞いてくれないという感じで、すれ違いが起きてしまうという現状になっています。

この原因が、ふだんから行政と住民の双方の関わりがあるかないかの違いかなと考えておられて、これがお互いの信頼関係につながってくるのではないかなと考えています。

ですが、それを阻む壁としては、行政側として意見を聞く場を設置するにも、行政は平日の昼間に主に活動されているんですけど、住民はそこが一番忙しい時間ということで、その時間のマッチがなかなか合わないのかなと感じました。また、目安箱を通じて、直接会わずとも意見を聞くにも、記名するのか、記名しないのか、この匿名性の違いがあるし、行政からすると

個人一人一人の意見を聞いていくと、今度は平等性が求められるという点もすごい難しい点なのかなと感じました。

住民の中には、行政に要望を出すのが得意な人もいるんですけど、これについては地域差があるということも知っておくべきかなと感じました。その点で大事なのは、行政職員の方も1人の被災者なので、その認識は忘れちゃいけないと感じました。

3つ目として挙げられるのが、ボランティアの存在です。ボランティアの有無は、発災直後だけじゃなく、その後の復興にも大きく関わってくるということで、ボランティアの存在はすごい重要なんですけど、ボランティアを断ることの必要性ということで、先ほどもお話があったように能登半島地震の際には、最初ボランティアを断っていたというお話があったんです。発災直後はボランティアの人命を考えたときにも、最善の選択だったかもしれないのですが、ファーストペンギンを潰してはならないということで、第一に積極的に行動する人の機会を潰してしまうと、後ろに続いていく人もいなくなってしまうのではないかなという懸念もあります。

そのため、ボランティアがどこまで介入するかの難しさが挙げられまして、被災者の方自身でできることは被災者の方にやってもらって、ボランティアはボランティアでできることをやるという、この分担が大事なのかなと考えています。

最後4つ目に挙げられるのが、私たちにできることです。さっきボランティアの活動も挙げさせてもらったんですけど、ボランティアの活動だけじゃなく、できることをこのスライドでは2つ挙げさせてもらっています。

1つ目がSNSでの発信ということで、これは現在の情報技術の発展ならではということで、現地で活動したことや感じたこととか現状を多くの人に知ってもらうことで、時間的な制約があんまりない大学生などにおすすめるのではないかなと考えています。

SNSで発信することは不謹慎かどうかというのは、プライバシーの問題とか、被災地は見せ物ではありませんよという難しいラインではあるんですけど、現状を発信して多くの人に関心を持ってもらうということが何より重要じゃないかなと考えています。

2つ目が防災啓発活動です。日頃からの防災意識を高めるために必要で、これは大学生だけじゃなくて、より多くの人に実施してもらって、それをさらに広めてもらえたらなと考えています。



今度のスライドには挙げてないんですけど、現地に行って何か購買活動とか行っただけでも、その地域の地域経済を発展させるという意味ではすごい重要なのではないかなと考えています。

まとめということなんですけど、条件は違えど復興に大きな壁があったということ、そして日頃からの信頼関係、心のつながりが大切だということ、地域の中心となるリーダーの存在が大切であるということ、ボランティアの可能性は無限大であるということ、私たちはこれからも自分たちでできることを探してみようと考えています。

そして残る課題としては、復興過程で新たに生まれる何か副産物のようなものはないのかということ、人口流出という、震災と複合的に関わってくるこの課題についてどう関わっていくのか。あと行政と住民の意見の相違をなくすためにはどうすればいいのかというのを、これからも念頭に置いて活動していきたいと思います。

以上で、私たち LAN の発表を終わります。

御清聴ありがとうございました。

パネルディスカッション

テーマ：「伝える」ことから生み出した「新芽」 ～聴く、創る、報せるという観点から～

【コーディネーター】

- 京都大学防災研究所 教授 牧 紀男さん
- 明石工業高等専門学校 准教授 本塚 智貴さん

【グラフィックファシリテーター】

- 大阪防災プロジェクト 共同代表 多田 裕亮さん
- 山越 香恋さん

【パネリスト】

- 兵庫県立舞子高等学校 勝部 太智さん
- 滋賀県立彦根東高等学校 北川 空虎さん
- TEAM-3A 松岡 友菜さん
- 明石工業高等専門学校 D-PRO135° 地域連携チーム 西浦 航生さん
- 神戸学院大学 クローズアップ社会研究会 藤原 勝利さん

○司会 それではパネルディスカッションを始めさせていただきます。

今回のパネルディスカッションのテーマは、『「伝える」ことから生み出した「新芽」～聴く、創る、報せるという観点から～』です。

災害メモリアルアクション KOBE の10年の活動では、震災21年から30年という長期の震災経験の継承・語り継ぎの在り方について考えてきました。

活動の中から様々な新しい試み「新芽」が生まれてきました。最後の数年間考えてきた、聴く・創る・報せるという観点から、災害が頻発し、南海トラフ地震の発生が懸念される中で、災害の経験を伝えること、さらに被害を減らすための対策へとつなげる方法について、参加団体の学生とともに考えたいと思います。

ここでパネルディスカッションの出演者を御紹介いたします。

コーディネーターの災害メモリアルアクション KOBE 企画委員会、牧委員長と明石工業高等専門学校、本塚准教授です。

続きまして、パネリストの兵庫県立舞子高等学校の勝部太智さん、滋賀県立彦根東高等学校の北川空虎さん、TEAM-3A の松岡友菜さん、明石工業高等専門学校 D-PRO135° 地域連携チームの西浦航生さん、神戸学院大学クローズアップ社会研究会の藤原勝利さんです。

そして本日、グラフィックファシリテーションをしていただく大阪防災プロジェクト共同代表の多田さん、それから山越さんです。

ではここで、山越様、グラフィックファシリテーションについて、一言御説明をお願いいたします。

○山越さん 本日は様々な方がここにいらっしゃいまして、文字や映像といった形でも記録を残していただいているかと思うのですが、この場で話されたことのニュアンスだったり、雰囲気だったり、文字や映像だけでは残せないようなエネルギーなどもグラフィックファシリテーションという形で絵とイラストで、残させていただければと思っております。よろしくをお願いいたします。

○司会 それではここからの進行は、コーディネーターの牧委員長をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○牧コーディネーター それではパネルディスカッションに移りたいと思います。

今年度は、最後の10年目ということで、これでおしまいですので、私が本日、このパネルディスカッションのコーディネーターを務めさせていただくのと、本来は人と防災未来研究センターの연구원さんがするはずでしたが、急遽欠席ということで、1人だけでは心細いので明石高専の本塚先生に御参加をいただくことになりました。

3回ほど質問をさせていただこうと思いますが、まずは先ほどから御説明がありました「聴く、創る、報せる」という観点から、本日皆さんから御報告をいただいたんですけども、その中でももう少し聞いてみたいなということについて、先に私のほうから聞かせていただいて、もし本塚さん、もうちょっと聞きたいということがあれば補足でと思います。

順番は舞子から順番に行きますので、まず舞子高校のお名前が勝部さん。今日、「聴く」お話、新たに先生にインタビューするときに先生の素性を調べ上げて、しっかり聴こうという新しい取組をされたり、それから「創る」ということでは、私どもも今日いただきましたけど、大変分かりやすい資料を作られたり、それから今まではインタビュー結果、型にはめて作っていた。それを自由にすることで、もっとポイントが伝えられやすくなったという、この「聴く・創る」については大変よく分かったんですけども、この「報せる」ということで、今回QRコードも教えていただきました。それ以外に何か生徒に報せるために、こういうことを工夫しましたとか、こういう取組をしましたというのがあれば、補足で教えていただけたらと思いますが、いかがでしょうか。

○勝部さん 僕のほうからは「報せる」ということで、

今回のメモリアルアクションの発表を、学校に持ち帰って、学校の追悼行事で分科会という形で発表させていただいて、その発表の中で、今回のことだったり、メモリアルアクションでやっていることというのを共有、舞子高校の生徒の普通科の生徒だったり、ほかの学年の生徒に報告するというのを「報せる」という面でも取り組んでいます。以上です。

○**牧コーディネーター** ありがとうございます。本塚先生、何か追加で聞きたいことがありますか。

○**本塚コーディネーター** 勝部くんは今、2年生。

○**勝部さん** 3年生です。

○**本塚コーディネーター** 3年生。舞子高校の環境防災科、もう大分歴史が積み重なってきたと思うんですけど、勝部くんにとって舞子高校で防災を学ぶということはどういうことで、3年間やってみて、何か感じたこととかあれば追加でお願いしたいです。

○**勝部さん** ちょっとそれしてしまうかもしれないんですけど、昨年度に能登半島地震があったんですけど、東日本大震災であったり、阪神・淡路大震災というほかの災害に比べて、報道だったり、SNSやメディアで伝えられる数が少し減っていているように感じていて、私が所属している環境防災科も、能登半島地震については結構深く学んでいて、その思いがちゃんと伝えられているのかというのは、ほかの災害に比べて、まだあまり伝えられていないことというのが結構あると思うので、そういう報道などの面では、ちょっと気になる部分が多くあります。

○**牧コーディネーター** 今、能登の話も出しましたが、次、彦根東の北川さんにお伺いしようと思うんですけども、今、舞子から学んだ「聴く」技術ということで、相手の懐に入るといふのがあって。今回「聴く」ということと、それから「報せる」ということについて、「聴く」については高校生だから、今日はマスコミのOBの方もおられますけど、なかなか話してもらえないのが、高校生だから聞くことができるというふうなお話ですとか、「報せる」ということも後で聞いてみようと思いますが、あれだけの大量の字をしっかりと読み、ということポリシーとして置いている。だからインターネットで報せるとか、SNSじゃなくて、これだけの分量の文字、読んでみよというところを「報せる」ポイントに置いておられるというのは大変感銘を受けました。それとは別で「創る」という観点で、震災報道の在り方を朝日新聞の方とも議論をされたというお話がございましたけども、何か「創る」ということで、ここポイントとして置いているんだみたいなこと



があれば、少し補足で教えていただきたいなと思うんですが。

○**北川さん** 自分で作っていく中で、今回の能登号では結構多くの現地の方に取材をさせていただいたんですけど、その方の声もそのまま届けたかったので、いかに被害に遭われた方の気持ちだったり、今、どういふふうに住んでいらっしゃるかというのを、そのまま記事に込められたらいいなという思いで作りました。

○**牧コーディネーター** あともうちょっとだけ。例えば、今時マルチメディアですから、QRを紙面に仕込んでおいて、インタビューしているやつとリンクをすとかじゃなくて、やはり自分が理解した、相手の言葉を私がこう受け取ったというその言葉でしっかりと伝えようという、そういうふうにする紙面作りのときはされているんですか。

○**北川さん** QRコードでインタビューの動画を見れるようにするみたいな考えが正直なかったというのもあるんですけど、やっぱり新聞部としてやっていて、今まで発災当時から福島号を発行しているということで、今までの形を、今までの新聞というのを大事にしていきたいという思いも込めてやっています。

○**牧コーディネーター** まだ押すようですが、そっちのほうが伝わるとお思います。私は実はそう思って、時間かかりますやん、あんなにビデオ見るの。それで何か説得力はあるけど、一言でというか文字でしっかりと聞いたことを記者の方の目線でまとめたほうが、何となくタイムパフォーマンスもええんちゃうかなとか、伝わるんちゃうかなとも思うんで、そこら辺って何か考えてることってありますか。

○**本塚コーディネーター** 私も似たような視点で、この「聴く・創る・報せる」の中において、今回の能登半島では高校生だからって快諾されて、いろいろ話していただいた。被災者の方から皆さんに何か聴く過程で託されたものというのがたくさんあったりすると思うん

ですけど。何かそれを言葉にするときに気をつけて、個人としてではなくて、団体として彦根東の新聞部として心がけていることとか、継承していることとか、いろんな被災地だけじゃなくてインタビューした人から託された言葉を、どうやって創る過程で報せるに持っていか。何か引き継いでいるものがあれば、教えていただきたいなと思います。

○北川さん あんまり決まりとかはないかなと思ってんですけど、紙面を見ていて、インタビューした方のメッセージ、僕らに向けてであったり、その人が伝えたいことに向けてのメッセージというのを最後に聞いて、それを記事の中の最後に入れていたというのを僕もしていますし、そういう記事を彦根東高校の新聞でよく見ます。

○牧コーディネーター あともう1つ、先ほど我々にとって大変重いもの、風化してはいけないのかという質問をしていただいたんですけど、それはまさに我々もいろいろ議論してきて、一番専門が近いのが京大の中野元太先生なので、少し中野元太先生から「風化してはいけないの」みたいなことについて、どういうふうに我々防災研究者は思って、今どうなっているのかというのを少し御解説をいただこうかと思うんですが。

○中野先生 解説なんて別にそういうことはするつもりはないんですが、風化することが悪いことではないというお話は、私も本当にそのとおりだと思います。もう大賛成で、風化すること自体が悪いとまとめる必要はないのかなと。

でも、その風化することが悪いことではないということを、ちょっと言い方を変えるほうがいいのかと思うままて、それは新しい語りが生まれているというふうに考えるほうがいいのかかと。

つまり、何かがなくなっていくとか、風化していくというふうに我々感じるときには、でもその背後にあるいは、それと同時に発生的に、新しい語りとか新しい活動って生まれていると思うんです。

それは何か社会の中から、その活動、今回の彦根東さんの場合は東日本大震災というワードだと思いますけども、そのワードが何か新しいものではなくてきて、新聞の記事から消えていくんだけど、その背後にはきつといろんな伝承館での語り継ぎみたいなものが、ちょっとずつ当たり前になっていたりとか、社会の中にちょっとずつ防災活動というものが当たり前になっていっているとか、津波対策とか復興というのがちょっとずつ当たり前になっていっているというよう

なことがあるから、言葉というのが少しずつ使われなくなっていくんじゃないかなというふうに思うんです。

なので、風化していくことはもちろん悪いことではないですし、でもそれと同時に新しい何かが生まれているというところに今度はフォーカスをするというのは、私はとてもいいことなのかなというのが1つ目。もう一つは、まさに今日この場、震災30年という節目を迎えているわけですけども、風化していつているというふうに、神戸では言われますし、あるメディアなんかは語り継ぎ限界30年というふうに言ったりもします。けれども我々ここにいるメンバーにとっては、それはとても失礼な話だと思いませんか。語り継ぎが30年で限界です。いやいや皆さん語っているじゃないですかと。

だから、社会の中では少しずつ風化というのは、忘れられていくという側面は一方ではあるんだけど、他方ではまさに皆さんが今、新しい阪神・淡路大震災の語りを生んでいつてくれているわけです。

皆さん、実際に語り継ぎをしている感覚はないかもしれませんが、我々から見ると、皆さんがデザインしているゲームの中のルールであったりだとか、それから実際に語りを聞いて、それを書くという行為だとか、その中にやっぱり原点を阪神・淡路大震災に見いだすことができている。そう感じているんです。

なので、皆さんが今、新しい語り継ぎというのをどんどん始めていつている、それが何か風化を裏返すことなのかなと、話を聞いていて思いました。こんな感じで大丈夫ですか。

○牧コーディネーター ありがとうございます。いかがですか、聞いてみて。

○北川さん もともと自分は風化させてはいけないという考えだったんですけど、福島とかの現地の声を聞く中で風化は必ずしも悪いことではないという考えもあって、さっきおっしゃったので思ったんですけど、どうしても偏った見方しかできていなかったというのがあって、もうちょっといろんな角度から見るのが大事なのかなと思いました。

今のお話でそれが分かって、これは新聞に限らずなんですけど、いろんな角度から見ることで、全然考え方が変わるなと思いました。

○牧コーディネーター 皆さんにぜひ新しい語りを生み出していただけたらと思います。

舞子高校の経験したことがない先生って、生徒に聞かれるからもう困ったぞみたいな語りをされているんじゃないですか。何かそう思うことはありますか。

○**勝部さん** 震災を経験していない世代が先生になってきていて、インタビューする中で、阪神・淡路大震災を知らないという先生というのは増えてきてはいて、そのような先生方には、その先生の親世代の話だったりというのを聞いてもらっていて、その話をさせていただいたりというのがあったんですけど、その中で先生自身も初めてこんなことを聞いたっていうふうにおっしゃっていて、こんなことを自分の親が思っていたんだと初めて思ったみたいな話とかもあって、そういうのは1つあるのかなと思いました。

○**本塚コーディネーター** 中野先生がおっしゃったような舞子高校の取組なんか、阪神・淡路を経験していない人同士の新しい語りのきっかけになっている。まさに好事例なのかと思います。またそれが経験となって、経験者へもフィードバックしたりとか、その行ったり来たりがこの30年というものの支え方の1つのヒントなのかと、今、聞いていて思いました。

○**牧コーディネーター** それでは次に行こうと思いますが、TEAM-3Aさんは「創る」ということでは大変すばらしくて、我々も中間発表会で踊らせていただいたり、それからゲームがあったりということと、今日一番びっくりしましたのは、中学生の方は幼稚園のときに聞いてメンバーになった。だから人まで創り出してすごいなと思うのと、「報せる」はやっぱりいつものことながら動画作るのうまいなど。動画作るの好きですよ。皆さん面倒くさくないですか。

○**松岡さん** 私はあんまり得意じゃない。基本的に。

○**牧コーディネーター** 誰か別にいるんですね。

○**松岡さん** はい。

○**牧コーディネーター** あと、お伺いしたいの「聴く」。いろんな震災の経験を東日本に行ったり、それから神戸のことを聴いたり、能登のことを聴いたりして、いろんなコンテンツを作っておられるんだと思うんです

けど。その「聴く」ということをどうされているのかとか、聴くときのコツ、ポイント、そういうことがあれば、もうちょっと教えていただけたらと思うんです。

○**松岡さん** 東日本大震災で南三陸町に行ったのが私の先輩なので、もうそこら辺に関してはよく詳しく分からないんですけど、地域の活動に参加する際、防災の出前授業したときとか、参加する人がすごい高齢者の方が多くて、イベントが終わった後に、こういうことがあってんみたいな感じを片づけしながら何かすごいお話しして下さる方が多いので、そこで、あっ、そうなんやって。私たちの世代が当時何があったかというのは、詳しくは分からないので、イベントを通じて高齢者の方からそのときの体験談を聞いて、それを次のイベントに生かしてみたりだとかを、メンバーみんな意識していることだと思います。

○**牧コーディネーター** それで、聞いている中で、へえ、そんなあったんやというエピソードみたいなのが、もしあれば教えてください。

○**松岡さん** 記憶に残っているので言うと、避難所での生活ってトラブルが多かったり、トイレの片づけができていなかったりみたいな問題がよくあると思うんですけど、私が聞いたのは、その話聞いた方が避難していたところでは、すごい子供がわちゃわちゃして楽しそうで、そんな特別大きなトラブルもなく、子供が大きく体調を崩すこともなかったから、そんな苦労せんかったみたいな感じの話聞いたときは、へえ、そうなんやって思いました。

○**牧コーディネーター** 本物の話を聞いた感じが。

○**松岡さん** はい。

○**牧コーディネーター** そのお話しされる方って、うれしそうというか、どういう感じでお話しになられるんですか。

○**松岡さん** 確かにすごいうれしそう。そんな重い感じで話される方はいないですね。

○**牧コーディネーター** ちゃんと私の話持って行ってくれという、そういう感じではない。

○**松岡さん** そんな感じで話す方もいらっしゃいます。

○**牧コーディネーター** そのうれしそうって言い方あんまりですけど、自分たちの経験を皆さん若い方に伝えたいという、そういう感じ。

○**松岡さん** はい、そんな感じでいっぱい話して下さる。

○**牧コーディネーター** 長いですか。

○**松岡さん** 長いですね。

○**牧コーディネーター** そうですよ。しゃべりたいん



じゃないですか。だから皆さんがお作りになられたその道具とか場がその話を引き出して、それを聞く機会になっているような気がします。本塚先生、何か。

○**本塚コーディネーター** このTEAM-3A、団体そのものもまさにこのつくられた、この中でつくるということ、特にこの良さというのが、いわゆる学校の団体って卒業して終わってしまうところが多いんですけど。関わりしろをきちんと残しつつ、しかも学校の枠も超えて、地域の枠も何となく超えて活動されて、これが生まれたことによって、何か見えてきたものとか、何かやりやすくなったもの、逆に何かこれは失敗したなとか、何かやりにくいなと思うようなことがあれば、ほかの団体への示唆も込めて、教えていただければ。

○**松岡さん** 何かやりにくいなって思ったことは全くなくて、卒業生で今、社会人として頑張っている先輩方が優しく話しくて、先輩なんですけど、すごい友達みたいな感じで、気を遣わずにできるからすごい活動しやすい。イベントとかで、変に気張らず緊張せずにできるところがこのチームのよさなのかなって思っています。

○**本塚コーディネーター** 逆にMRDPのままだったらOBが来て、面倒くさいなって思っていたかもしれない。

○**松岡さん** どうだろう。今のこの形だからこそ楽しいっていうのはあると思うので。分からないです。

○**牧コーディネーター** では次、明石高専さんなんですけど。「創る」と「報せる」チームがちゃんと分離して、「創る」が開発チームで、今年から全世代対応ということで高校生向け、それから幼稚園向け。「報せる」は地域連携グループで、さらにアプリまで作ったり、マスコミに載ったりして、すごく広がっていったというのは分かったんですけど、今と同じで「聴く」、そのゲームを作る上でいろんな新ネタというか、新たな情報を取り入れたり、それからその本物感を出すためには、実際のその災害の経験を聞いたりということもあるかと思うんで、そこら辺、どういう取組をされているのか教えていただけたらと思うんです。

○**西浦さん** 自分たちは大体そのひと世代というか、自分たちの同学年で1つずつゲームを作っていくということで、まだ自分たちの世代でゲームを作っていないんです。自分たちって、今、結成して10年になるんですけど、その10年間で先輩方がためてきたたくさんの経験であったり情報というのが引き継がれていってありまして、それを今、使いつつ新しい情報、インターネットを中心に交えてゲームとかを開発して



いっているというのが現状です。

○**牧コーディネーター** その先輩の情報を引き継ぐってどう。大人はね、飲み会で聞いたりするんですけど、先輩の情報を聞くっていうのは、どういう形でやっておられる。

○**西浦さん** 完成しているゲーム自体がその防災の要素というか、防災の知識が詰まったものになっているので、防災ゲーム、もちろん自分たちが地域実装するためには自分たちもルールを知っておかないといけないので、自分たちもそのゲームをするんですけども、そうしていくうちに自然と防災の情報であったりとか勝手に入っていくというような形です。

○**牧コーディネーター** だったら、ゲームをやるときに、これはここ苦労したんやとか、ここはこういう思いで俺は作ったんやとかという中でその情報を聞いている。そういうこと。

○**西浦さん** そうですね。

○**牧コーディネーター** では、それはまさにこのゲームが目指している、そういうものが先輩から後輩に引き継がれる中でできているという、そういうことになるんですね。

○**西浦さん** そうです。

○**牧コーディネーター** そうか、地元やから。

○**本塚コーディネーター** ふだん聞かないことを聞いたんですけど。ゲーム作るっていう1つの目標を持って、先輩たちのゲームを分析しながら自分たちのオリジナルゲームを作るんですけど、体験した人の意識が変わるかというのが1つの課題なんです。作る過程で自分たちの意識っていうのはどう変化しているとか、先輩方が作ったゲームをやっている中で、何か意識が変わったとか、そういう気づきがあったことがあれば、エピソードを教えてください。

○**西浦さん** 自分がそもそもこの明石高専に入学したきっかけともつながってくるんですけど、自分がそも

そも気象災害に興味があってこの学校に入っていて、事前に明石高専に防災についてやっているクラブというのがあるよというのを入学前には知っていて、それで入学して、ぜひその同好会というか部活に入ってみようと思ったんです。ゲームを通じて伝えるということの斬新さという、そこがまず一番大きな発見というか、ゲームをすることで防災を発信するんやっていると、そこが一番自分にとっては驚いたことで、一般的に防災といったら講義で受け身になることが多いので、そういった防災をゲームで伝えるという部分が、一番自分にとって大きく驚いたところですよ。

○**本塚コーディネーター** ちょっと場外出して大丈夫ですか。そのゲームを作られた多田さんがここにいるんですが。作った本人がこの数世代を超えてこう言っています、どうでしょうか。

○**多田さん** 私、もともと学生サイドにいた人間で、D-PROの1期生というか、立ち上げメンバーの中に入っているんですけど。だからメモリアルアクションKOBEOの1年目から発表者サイドで参加していたんです。そのときからずっとゲームを作っていて、そのときのうちの学校は、例えば国際交流したいから入りましたとか、当然高専なので、そういう工業系の勉強したいんで入りましたっていう子がほとんどやったんです。今、すごい感動的で、そういう部活があるから選ばれたっていうのがすごいうれしいですし、私、卒業後も「だうでい」とか、いろんなゲームを個人的に体験させてもらっているんですけど、どんどんデザインもよくなって新しくなっているし、どんどん面白くなっていっているんです。中間発表とか、最初のキックオフ会でもずっと話聞いていると、自分たちが最初始めた頃の、何かわちゃわちゃとした熱い雰囲気はまだ残っているなというのは、すごい感動しています。

○**牧コーディネーター** 西浦さんは開発組なのか、地域連携組なのか、どっち組なんですか。

○**西浦さん** 地域連携組なんですけど、それこそまた来年度ゲームを作るのは、自分たちの世代を中心で作っていくので、ゲーム開発班に変わるかも知れないです。

○**牧コーディネーター** 学年進行に伴って、まずはその修行として地域連携で先輩が作ったので遊んだり、地域に出かけて行って、修行が終わると、次の「創る」組に昇進できるという、そういう仕組みになっているんですか。

○**西浦さん** そこまで何か決まりきったものでもないんですけど、1年生とかのうちは割と地域のほうに出て

いて、2年生、3年生と年を重ねるにつれて、じゃあそろそろ自分たちで防災ゲーム作ってみようかといった形で、防災ゲームを作っています。

○**牧コーディネーター** 何でそんな質問をしたのかというと、人間向き不向きってあるじゃないですか。そんなももう人としゃべるのは私絶対いやとか、だけどゲーム作ったり、デザインするんやったらすごく頑張れるとかって、こういう防災を学んでいく上でも、全世代というふうに言いますが性格もあると思うので。初めから僕そんな人としゃべるなんていややから開発がいいという方もおられるんですかね。

○**西浦さん** 自分の向いている部分というのはあると思うので、そこを上手に生かしながら防災を発信していく側なのか、それとも作っていく側なのかということを考えながら活動しています。

○**牧コーディネーター** コミュニケーションのありようですから。ゲームのデザインでそれが社会に伝わるとい場合もあるでしょうし、現場に行っていくという立場もあるでしょうし、それから新聞書くという方もいるでしょうし、ダンスするっていう方もいるでしょうし。そやからそこは何かいろんな自分が得意なものを選んでやっていけるような感じと思っていますか。

○**西浦さん** はい。

○**牧コーディネーター** 最後は、クローズアップ社会研究会ですけども、今日は「聴く」を中心に、調べるも含めて「聴く」だと思っんですけど、先生に聞いたり公約を調べたりして、いろいろ今回の選挙と防災について調べたところはお伺いしたんですけど。あと「報せる」と「創る」ということで、新聞、こういう形でいただきましたけども、そこら辺でこういうことを頑張ってるんねんとか、さっきの彦根東と一緒にですけども、そもそもこんだけのちっちゃい字、こんだけの文字量でなぜ勝負しようと思ってるのか。文字がちっちゃいということじゃなくて、やっぱり文字で行きたいというのが多分あるんですよ。何かそこら辺の「創る」「報せる」について、もう少し補足いただいてもよろしいでしょうか。

○**藤原さん** まず私たちは今回この「創る」「報せる」というところで作った新聞なんですけれども、そもそも私たちの団体に所属しているメンバーが、神戸学院大学の現代社会学部の社会防災科で防災を学んでいる学生だけじゃなくて、現代社会学科という防災をふだん学んでいない学生もいるんです。

そういった中で去年は山火事というのをテーマにし

て取り上げたんですけれども、そのときは動画という形で提出させていただきました。その前は新聞だったんです。新聞、そして動画というのをを出してきた中で、新聞でこの団体として求めているという声もあったんです。

そういう中で、僕らの団体が新聞として伝えること、そしてその新聞の記事を書いた学生というの、さっき言った防災じゃなくて、現代社会学科、すなわちふだん防災を学んでいない学生が書いたものになるんです。

なので、防災をやっている人の視点だけじゃなくて、防災をやっていない人から見たこの防災の視点というところ、さっきそれこそ中野先生からも新しい伝承の仕方みたいなのがでてきているというのはあったと思うんです。そういう観点というの、防災をふだんやっていない人から出てくるところもあると思いますし、それを新聞という形で文章にして、それこそ社説みたいな形で、自分たちの考えも入れてみたりというので、答えになっているか分からないですけども、新聞で今回はさせていただこうかなと思ってこの形で提出いたしました。

○**牧コーディネーター** その求めていると言った人の、先生の姿、大体思い浮かぶんですけど、お一人ではなく、ほかの先生方も、こういうメディアやるっていう御意見が多かったんですか。そもそも新聞読まないでしょう。今取っていないでしょう。

○**藤原さん** 僕は一応取らせていただいています。でも新聞というメディアが、正直、昔と比べて縮小してきているというのは事実としてあると思いますし、その中で新聞を求める声というのは、そもそも社会防災学科の先生だけじゃなくて、ほかの、それこそメモアの会場でお話をさせていただいたときに、あれ、今年はおさないのというのを昨年いただいて、そこから、



そういう声もあるんだなというのを拾って、今回はさせていただいたという形になりました。

○**牧コーディネーター** まだもうちょっと聞きたい。「報せる」という観点からこういうメディアというのはあると思うんですけど、今回新聞を作るのは初めてですか。

○**藤原さん** 作ったのは僕じゃないんですよ。

○**牧コーディネーター** じゃあ周りから見て、これ作るということで、どういう御苦労がありそうやったとか、何か気づいて、自分が作るんやったらこれこうしようかとか、ここら辺こうしようかとか、そういう作るということについての考えってありますか。今回は白黒で行ってたりとかあるんですけどとか。何かもしお考えがあれば。

○**藤原さん** 新聞という形にしたことによって、そもそも新聞って事実と、主観とを切り分けないといけないと思うんですけども、そういった中では今回は社説という形、コラムで用意させていただいたんです。その中で載せる文章というのを、動画のときとは異なって、制限する必要もありますし、さらに文章で表していくので。動画って時間を伸ばせたりもするので、また2本にしたりだとかでも可能なんですけど、新聞って1つの内容で載せられる限界もある。特に1枚で行っているんで、今回は。

という中で、どこを切り取ってどこを選ぶかというのは、切り取り過ぎると、今度それは一部の印象が全部になってしまうので、その辺りの難しさというのはすごくあるのかなと思います。

○**本塚コーディネーター** 私、個人的にクロ社研のこの取組が本当に毎年楽しみで、山火事と結び付けたり、選挙と結び付けたり、ほかの団体よりかは切り口が全然違う角度から、それを固定的にするんじゃなくて、今年はこちらからっていうのが、こんな多様な視点から見れるし発信できているチームっていうのはすごいなと毎年思っているんです。とはいえ、この「報せる」方法というのがまだ確立していないのかなとも一方で思っていて、もっと多くの人に知ってもらいたいし、もっと時間かけてどんな議論しながら作っているのか見てみたいしというのがあるんですけど。クロ社研としてその辺の手応えというか、自分たちのやっていることに対しての何かモチベーションみたいなものとか、今後の展望みたいなものがあればちょっと教えてもらいたいんですけども。

○**藤原さん** 迷っているところがあるんじゃないかって、先ほどおっしゃっていただいたと思うんですけど、

本当にそのとおりで、新聞をして、その後動画に変えて、そしてまた新聞という、迷走しているところもあって、どの伝え方がいいのかなというのがまず1つあって。でもそれって、先ほどいろんな、特にそれこそ彦根東さんだったら新聞だったりとか、動画をされてたりだとかっていろいろあると思うんですけど、いろんな媒体を結局は使うことが一番いいとは思ってますよ。でも、今後の展望というところで言うと、いろんな媒体で発信していくというのが一番いいと思うんです。何かその中でも世代ごととか、向けるその対象者によって変わってくるところとかもあるんで、それらをいろいろ加味しながら何かできるような発信があればいいのかなと思っています。

○**牧コーディネーター** 今回のテーマで取り上げられた選挙の1つの想定というのを、ラジオは何でやらなかったんですか。古い系のメディアでいうと、テレビやって、新聞やったら、ラジオじゃないですかね。

○**藤原さん** ラジオは考えなかったですね。

○**牧コーディネーター** そうですか。では先に進みます。

皆さん、聴いて、創って、報せるとフルセットをされているわけですが、伝わったということが、その評価になるわけです。皆さん、今回の取組を通じて、自分たちが伝えたかったことは伝わったと思いますか。舞子高校さんから順番に聞いていきたいと思うんですが。いろいろ改良をして、QRも作ってどうですか。

○**勝部さん** メモリアルアクションで意見をもらって、いろんな意見から変えていって、最初に比べたら全然伝わって行って、それで興味を持ってくれる先生だったり、メモリアルアクションの中でもそういう興味、防災読本新しいのできたんやとか言ってもらったりというのは、すごくその部分では伝わっているのかなとは思ってます。一方で、インタビューの冊子だったりというのは今1セットしかなくて、QRコードも作って発信していく取組に変えたんです。そういうのはまだ浸透しきっていない部分もあると思うので、そういうのはまだまだ発信していかないと伝わらないのかなと思います。

○**牧コーディネーター** 伝えるということを考えるときに、私もよく言われるんですけど、こういう冊子を作っておられる方とか、あと自分の学生にも言ったりするんですけど、誰にというのがやっぱり伝えるというときには、愛の言葉は彼女に届かないとしょうがないですし、そんなんぶつづつ一人で言うてもね。今回メインのターゲットはやっぱり高校生、同級生ですか。高



校生については伝わったのかどうかというのは、同級生の反応とか聞いたりしていますか。

○**勝部さん** 防災読本を各クラスに置かせていただいて、友達も読んでもらったりして、意見をもらったりというのは幾つかあって、その中でここはすごいよかったよとか、ここもうちょっとこうしたほうがいいんじゃないみたいな話というのを聞くと、ちゃんと読んでもらえているんだなというのは伝わるし、そういうところからまた改善もしていけると思うので、より伝わっていくんじゃないかと思います。

○**牧コーディネーター** 続きまして彦根東高校。硬派でこんだけの字を読み、というそのことで伝えたい対象である人たちには伝わっていると思っていますか。

○**北川さん** 正直ちょっと厳しい部分もあるのです。東高新聞は生徒に配っているんですけど、そもそも目を通さへんみたいな人も結構いて、自分も新聞部入っているから見ているんですけど、入っていなかったら見ているか、正直分からへんなみたいな感じだったりするんです。確かに字も多いんですけど、学校で友達とかが新聞読んだよって言ってくれたりとか、よかったとか言ってくれたりするんで、そういう人には伝わっているのかなと思います。

○**牧コーディネーター** 要するに伝わるということもいろいろあって、私が思うこの人たちが読んでくれて、ここを理解してくれたらいいんだよと。一般に広げるのやったら、皆さんは何を使われるんですか、SNSは。

○**北川さん** 一応、僕はインスタとTwitter入れています。

○**牧コーディネーター** Facebookとかは、おじさん、我々しか使っておりません。Facebookなんて読まないでしょ。そっちじゃなくて、ここを新聞で行くぞということもいいと思うんですけど、伝えるメディアとして、あの文字数で、自分が伝えたいと思っている読者層には伝わっているという感じってあるんです

か。みんな読んでくれてへんやろうけど、俺は彼が読んでくれたらええねんっていうのもありだと思っんですけど、何かもう少し思うところありますか。

○藤原さん 誰が読んでくれるかはあんまり分かりませんが、いろんなクラスに配ったときに、勉強した人とかが手を止めて記事読んでくれたりしたときは、作ってよかったなと思うし、伝わっているなとは感じました。

1人でも読んでもらって、少しでも震災についてとかの記事で伝えたいことを分かってもらえればいいなと思っているので、それで読んでくれる人がいたら、もう伝わっているなと思います。

○牧コーディネーター 幅と深さがあるんやったら、幅を狙うメディアと、深さを狙うメディアというのがあっていいのかな。TEAM-3Aさんは、自分が伝えたい相手に伝わった、何かそこで感想ありますか。

○松岡さん イベントを通して、参加してくれる人たちがニコニコで、家帰ったら娘に言うわ、というような感想も含めた感じで言うてくださる方が多いので、伝わっているんじゃないかな、少なくとも私は思っています。

○牧コーディネーター どのネタがええとかあるんですか。

○松岡さん それこそオリジナルゲーム「あにまるず」をイベントでさせてもらったときに、これ売ってへんのって言うてくださる方もたまにいます。ゲームが楽しい、防災の知識を得られてすごいいいよね、みたいな感じで感想くださるので、防災のことも伝わっているし、私たちが意図している「楽しく防災」も伝わっているんじゃないかなとは思っています。

○牧コーディネーター 明石高専さん、いかがでしょうか。

○西浦さん 自分たちのモットーは、防災の楽しさを伝えるということなので、それを伝えられているかどうかといたら、伝えられているとは思っています。実際自分たちが、ゲームを実装するに当たって学校に呼んでいただいたりとか、イベントにブース出展したりしているんですけども、ブースに来てくれる人っていうのは、もともと災害、防災に興味がある方っていうのが多くて。世の中には、防災について、後ろめたい気持ちとか、あまり防災なんてせんでいいんじゃないかって思う人は中にはいると思うので、防災の興味がある人には伝わるんですけど、防災に興味がない人にはあまり伝えられていないのではないかなというのが、今課題ではないかなと思っています。

○牧コーディネーター さっきの幼稚園の「つめつめ」、あの子たちは防災に興味ないですよ。そういう意識はない。そこは、伝わったか伝わっていないのかってどう評価しているんですか。

○西浦さん 取りあえず楽しんでくれているというのと、「つめつめ」のものって、釣るものっていうのが防災アイテムとかなので、防災アイテムっていうのを身近に知ってもらおうという分では新しく気づきとか、知ってもらえたということだと思っんです。

○牧コーディネーター では最後、クローズアップ社会研究会の方は伝わっていましたか。

○藤原さん 先ほど彦根東さんのお話でもあって、その中で出た牧先生の答えの中に、私たちの解でもあるのかなと思ったりしているところではあります。深さがあるメディアとして、新聞という形、文字上で伝えていくに当たって、期待してたよと言っていた方、先ほどもおっしゃっていただきましたけれども、そこには伝わったのかなというまず印象が1つあります。

それ以外に伝わらなかったのかというと、全くもってそうでもないのかなっていうのが、1つ僕の感想です。例えばその新聞という媒体を配ったとき、別にそれを意図せずとも受け取る形なので、そこで中身の文章まではたどり着かなかったとしても、例えばそこには選挙と防災っていうワードであったり、丸バツの最初のところであったり、そういうところだけでも、あっ、こういうこととかがあってあるんやなという知るきっかけになると思っていて、そういう面ではもうスタイルのところ、深さまでは行かずとも最初のきっかけとして伝わる最初の機会になったのではないかなと私は思っています。

○牧コーディネーター 本塚先生、全体で、もうちょっとこ聞いてみたかったとか。

○本塚コーディネーター 伝えるのところで、もしエピソードとしてあれば教えてもらいたいんですけど。意図せず何かこの人にこういうものを伝えようと思ってなかったけど、結果として何か反応として伝わって、こういうことも自分たちの活動の中でできるんじゃないかって、何か気づいたことってあれば教えてほしいんですが。何かあったりしますか。なければ、ないって言うていただければいいんですが。

○勝部さん さっきも言った中であつたんですけど、インタビューやったりすると、震災を知らない先生に親御さんに聞いて、それを知ってというのは、それにあてはまると思うし、それ以外にも防災読本というのを、

教室の後ろに置かせてもらっているんで、何かの拍子でそれを見てもらったら、それはプラスになるんじゃないかなと思うし、避難訓練とかするときの前に、ちょっと見てくれたりとかというのがあれば、それは確実にプラスになるんじゃないかなと思うので。

- 本塚コーディネーター 彦根東さんはどうですか。
- 北川さん 僕は自分らの伝えたいことを、高校の生徒らに伝えようと進めてきていたんですけど、その中で新聞社さんたちと意見を交えることがあって、そのときに大人じゃなくて、僕ら高校生としての伝える側への考えというのを新聞社さんの人に伝えられるというところ。もともと自分らの生徒に伝えるだけだったけど、新聞社さんとも連携を取って、自分らも新聞社の人にも思っていることを言えたりとか、相手からも知識を得られたりとかするんで、そこですかね。
- 本塚コーディネーター TEAM-3Aさん、どうでしょうか。
- 松岡さん ちょっと難しいなって、今思っていたんですけど、それこそ今日話してくれた中学生のメンバーがいるんですけど、その子が何か証明してくれているのかなって思っていて、私じゃなくて先輩たちの活動に憧れてって言うてくれているから、少なくとも小学校に授業しに行ったり去年したんですけど、その中でも、お姉ちゃん、お兄ちゃんかっこいいって言うてくれている子がいたので、この活動にでも、そうじゃなくても、ボランティアに対する興味を子供たちに意図せず伝わっていたりするのかなというのは思いました。
- 本塚コーディネーター D-PROさん、どうでしょうか。
- 西浦さん 自分たちは幅広い世代、お年寄りから小さい子供までを対象に、今までゲームを制作してきましたんですけど、今回「だうでい」「つめつめ」を作っ



たそのきっかけにもなるんですけども、そのイベントに行ったら実際にゲームをして実装してみたときに、小さい子供は、小さ過ぎると今あるすぐろくゲームとか難しかったり、逆にむしろ自分たちの高校生世代というのは、ふだんすぐろくゲームとかでも遊ばないというのに気づいた。対象の年代というのが難しいなというのを感じたというきっかけですね。

- 本塚コーディネーター クロ社研さん、どうですか。
- 藤原さん まず1つの点として、新聞の中で意図せず渡した人に対して、中身までは行かなくても見ていただいたというところでのきっかけづくりが1つなんです。それと別で、今考えていて思ったのが、本当に根本的な話にはなるんですけど、自分たちがまずこれ知るきっかけになったなっていうのがあります。

例えば、僕たちは今回この選挙の防災という形で、候補者だったりだとか、あとはインタビューで教授の方に話を聞いたり、それから学生の方にアンケートを採ってみたり行ったんですけども、その中で思っていたものと少し違うものがあった。例えば社会防災学科であったり、ここにいる皆さんの一部にも御協力いただいたんですけども、そのアンケートを採った中で、すごい防災に関する人がたくさん集まっているにもかかわらず、一番目に政策として重視するのは聞いてみると、防災は25.8%だった。経済とかのほうが多かったというので、防災をやっている人たちの中で聞いても、経済のほうが割合として大きいんだみたいな、自分たちも意図しなかったところの防災をやっている人たちの考えみたいなのところも、知ることができたので、そういう点で、自分たちが調査するに当たって知るきっかけになったかなと思います。

- 牧コーディネーター もう時間ですが、最後一言だけ短くいただきたいんですが。来年もやると皆さんおっしゃっていただいたんですが、残念ながら災害メモリアルアクションは今年で終わりでございます。

こういう場の役割、こういう場がやっぱり欲しいよねとか、こういう場がどう役に立ったとか、やるとお約束をするわけじゃないんですけど、こういう場の意味とかいうことを、最後一言ずつ言っていただいて終わりにしようと思います。順番にどうぞ。

- 勝部さん メモリアルアクション KOBE みたいな活動はやってほしいなと考えていて、こういう場があれば同世代だけじゃなくて、防災の知識を学んできている学校の生徒さんだったり、大人の方だったり、専門家、先生の方々からの意見というのはとても大きいですし、そういう校外の意見があることで違った視点か

ら考えることができたり、それを持ち込んで、こういうところを変えたほうがいいんだとか、こういう世代にはこういうのがはまるんやというのが分かるので、そういう活動はあってほしいなと思います。

○**牧コーディネーター** では彦根東さん。

○**北川さん** 自分は滋賀に住んでいるんですけど、震災というのは近くであまり体験したことなくて、震災に対してあまり意識することが今までなかったんですけど、こういう機会があって意識が変わって、震災に対する意識を持つようになってきたので、意識を持つことでその震災への危機感、震災への恐怖というのをちゃんと分かったら、震災を甘く見ず、ちゃんと起きたときに避難ができるというのがあるので、こういう機会は震災を経験していない人にとって意識が変わる機会になるのかなと思いました。

○**牧コーディネーター** TEAM-3Aさん。

○**松岡さん** この活動、メモリアルアクション KOBЕがなくなるのはちょっと寂しいな。私ごとなんですけど、このメモリアルアクションに参加させていただいたことで、こうやって人前で話すという力が身についた気がしています。

TEAM-3Aの活動を普及できる場にもなるので、ぜひこういう機会をまたつくっていただけたらなと思います。

○**牧コーディネーター** では明石高専さん。

○**西浦さん** 自分たちはゲームを作っていて、よりよくどうしたらいいのかとか、専門的な視点からたくさんアドバイスをいただける場がメモリアルアクション KOBЕだと思っていますし、ほかの東日本大震災とか能登半島地震とか、そういった中で阪神・淡路大震災というのが一番古いというか、そういう活動の最前線だと思うので、今後も似たような同じような活動というか、イベントが続いたらいいなと思います。

○**牧コーディネーター** クローズアップ社会研究会さん。

○**藤原さん** 私も大変こういう機会ってすばらしいなと思っています。

というのも、高校生の皆さんとかとお話する機会って、なかなかなかったりもするので、そういう中でほかの防災の活動されている団体があることは知っていても、でも実際何をしているんだろうとかということは分からないです。それこそ未災者から未災者へというところを伝えていくに当たっては、最初に新しい伝え方ができてきているというようなお話もありましたけれども、どんなことをみんながしているのか



ということを知る機会というのがあるので、次のまた新しい伝え方というの生まれますし、明石高専さんが最初のほうで言ったと思うんですけど、ゲームでこんな楽しい防災の伝え方あるんやみたいなの、そういうきっかけとかも知れて。そのきっかけというの、また次の未災者に伝えていくところのヒントになると思っていて、そういう次の新しい伝え方のヒントを得る、それをさらに共有できる場としてすごいよいのではないかなと思うので、ぜひ続けて、何か別の形でもやっていただければと思います。

○**牧コーディネーター** ありがとうございます。

御意見はお伺いいたしますが、21年から30年こうやってきましたけど、このやり方はほかでも使えると思いますし、ここが主体となってやることじゃなくて、皆さん勝手に集まってやってもいいと思いますし。ですけれども、こういう場があったということがよかったんだと、そこで交流が生まれてということは皆さんに御評価いただいたのはありがたいと思います。

でも、私が先ほども言いましたが、もう57歳で最後のなので、次のフレッシュな人たちにこういう取組のありようというのは考えていただき、本塚さんはそういう世代だと思いますけども、引き継いでいっていただけたらと思います。

取りあえずこの10年は、最後褒め言葉で締めくくっていただいたと理解をしました。どうも長時間にわたり御議論いただきましてありがとうございます。

では、皆さんへの拍手をもって、このパネルディスカッションを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

閉会のあいさつ

○人と防災未来センター河田センター長

初めまして、河田でございます。

今日は本当にとても寒い中を、朝からお集りいただきありがとうございます。

先ほどの話題にもありましたように、このメモリアルというのは、次どうなるのかということですが、なくなりません。少なくとも私がセンター長である間は続きます。

なぜ10年ごとに変わるかという、メンバーを変えなければいけない。分かりますか。僕は30年前からこれをやっているんで、30年間やるといのは絶対非常識です。ですから10年経ったら、全部入れ替える。こういうルールに決めたいんです。

だから最初の10年間、次の10年間、全部メンバー変えていただいています。牧先生は57歳ですけれども、これを受け継いでやっていただいたときは47歳だったんです。

僕も阪神・淡路大震災のとき、48歳だった。それがもう30年経った。まさかこんなに長くセンター長をやると思っていなかったんです。最初は1年ぐらいで辞めるつもりだったんですが、気がついたら長くやってたんですね。

でも、長くやっていたので、とてもすてきなセンターになりました。こんなセンターは世界にここしかありません。しかも、これからもっと強くなっていく。

皆さん知っているでしょうが、石破首相が3年間かけて防災庁をつくる。この30日にその懇談会が始まるんですが、私、座長なんです。私以外の人はみんな私より10歳以上若いんです。なぜ私が座長になっているかというと、一番かかっているからです。30年間やっていますから、無視できない。

政府の委員というのは、全部70歳未満なんです。70歳で定年です。だから中央防災会議の委員を、70歳のときに定年で辞めたんです。

だけど、今皆さん知っているでしょうが、南海トラフ巨大地震の被害想定、できてないんです。昨年3月に報告する予定がまとまらないう。

なぜかといいますと、先ほど報告ありましたように、災害関連死がどうなるか全く見えないんですね。上限がない。今、能登で関連死を認めてもらおうとしている人がまだ200人以上残っています。これがあと200人増えるかもしれない。えらい社会になってきたんです。

少子高齢化というのは皆さん御存じだと思うんですが、高齢化がまさにこの災害とリンクして、大変な状況になっていることが分かってきたんです。

そうすると、昔のことを知らない人間が、新しい組織なんか絶対できない。だから私が、11月15日に首相官邸に呼ばれて、どうしたらいいかアイデアが欲しいと言われ1時間話をしました。

30年前に阪神・淡路大震災が起こって、当時、将来このような問題が大きくなるとは、誰も分からなかったんです。つまり、将来のことは、分からないんです。

何ができるかという、そのとき、そのとき、考える一番いいことをやらなきゃいけないということは間違いないと思うんです。

さっき話題の中に能登半島でボランティアが活動できなかったという、そういう報告がありました。なぜか。石川県がボランティア要らないって言った。でも石川県にそんな権利があるんですか。ないじゃないですか。ボランティアというのは、個人が自分でどう思うかによって動くのがボランティアなんです。

なぜそんなことになったかという、実は阪神・淡路大震災で140万人のボランティアが動きました。これをどうするか考えたときに、一体どこが世話をするんだとなったんです。

そこで、全国的にここをきちんと管理できるのは社会福祉協議会しかないとなったんです。実は日本赤十字社にやってほしかったんです。でも日本赤十字社は断ったんです、医療だけやりたいと言った。赤十字が医療だけをやっているのは日本だけなんです。今、アメリカ合衆国では、例えばイスラエルのガザ地区にボランティアがたくさん行っているんですが、これはアメリカの赤十字社があっせんしているんです。日本は誰もボランティアに行っていないでしょう。なぜか。社会福祉協議会がやっているからです。

だから、今、例えば避難所の運営なんかみんな福祉しか考えていない。そこに災害関連死が増えてきたから医療が入った。じゃあ医療と福祉で解決できるのか。

先ほどの関西大学の奥村先生の研究室の報告から分かりますように、決して医療と福祉だけで災害関連死なんか減らないんです。日本の少子高齢化というのを止めないと。南海トラフ巨大地震が起こると、私が推定すると毎年1万人以上災害関連死で亡くなるんです。まさに津波と同じぐらいの被害が予想される。そんな社会になってきている。

先ほどの活動そのものはそんなに大きくありませんけれども、これからどうなるんだということ、一体誰が議論するんだ。高校生、あるいは大学生諸君がこの10年間、いろいろ発表していただいたこと、これをベースに私たち将来考えなきゃいけないということなんです。

だから、それは大きな力にならなくても、分かっている人間が将来をどうするというについて発言しないと、社会は変わらないと思うようになってきました。

本日の会は、2部構成ですから、第2部で牧先生や矢守先生と3人で、一体将来どうするんだというお話をします。まさに今、石破首相が防災庁をつくる。単に防災庁をつくるだけじゃないんです。日本の国づくり変えていかなきゃいけないんです。

なぜか。これだけ災害関連死で亡くなる。90%以上が後期高齢者。こんな国になってしまったんです。だから、私は、防災をきっかけとして将来の日本というのをどうつくっていくかなければいけないかというアイデアを、今日発表していただいた皆さんの努力に報いられるような形でやっていきたいと思っているんです。

30年やったからここまで来た。もっとやれば、もっといいものが出てくると思っていただいて。ぜひ皆さんも、毎年、年を取りますけれども、年取ってからも若いときにこういうことをやった。だから自分の生き方が変わった。私も、まさか最初からそんなことを考えていたわけじゃないんですが、結果的に非常にうまく進んでいるということをお話していただいて、閉会の挨拶とします。どうも御苦労さまでした。



河田恵昭センター長

第2部：災害メモリアルアクションKOBЕ 阪神・淡路大震災30年 特別企画

震災30年スペシャル座談会 ～臼井先生、その生徒、その生徒の生徒～

【進行】

- 兵庫県立舞子高等学校 環境防災科長
鈴木あかねさん

【出演者】

- 神戸親和大学 准教授 臼井 真さん
- 兵庫県立舞子高等学校 教諭 菅原 祐さん
- 兵庫県立舞子高等学校 2年 内林小都泉さん
- 兵庫県立舞子高等学校 1年 西口 知華さん

- 司会 ただいまから、災害メモリアルアクションKOBЕ 第2部、阪神・淡路大震災30年特別企画を始めさせていただきます。

まずは「震災30年スペシャル～臼井先生、その生徒、その生徒の生徒～」と題しまして座談会を行います。

ここからの進行は、兵庫県立舞子高等学校の鈴木先生をお願いいたします。

- 鈴木先生 進行役を務めます舞子高校の鈴木と申します。本日のスペシャル座談会、御参加いただくこちらの皆さんですが、私のほうから御紹介したいと思います。

まず、タイトルにもありますように、「しあわせ運べるように」を作詞・作曲された臼井真先生です。そのお隣、臼井先生の教え子であります菅原祐先生です。現在、舞子高校でお勤めになっています。そのお隣、お二人ですね。舞子高校の生徒の2人です。自己紹介をお願いします。

- 内林さん 2年生の内林小都泉です。よろしくお願いします。

- 西口さん 1年生の西口知華です。よろしくお願いします。

- 鈴木先生 ということで、臼井先生とその教え子、そのまた教え子という生徒の生徒ということで、言わば3世代が集まったわけなんですけれども、そのきっかけをつくったのが内林さんと西口さんなんですよ。

- 内林さん はい。私たち災害メモリアルアクション舞子チームでは、舞子高校の先生方に、震災体験をインタビューしています。その中で菅原先生が「しあわせ運べるように」を作った臼井先生から教えてもらったことがあるということを知りました。

- 鈴木先生 それを聞いたとき、どう思いましたか。西口さん。

- 西口さん とてもびっくりしました。

- 鈴木先生 それを舞子高校のほかの生徒に言って、10月の中間報告会のときに、うちの学校の先生で臼井先生に教えてもらった先生がいるっていうのを、ぼろっと言ったのを災害メモリアルアクションKOBЕの企画委員が聞いて、それじゃ「実際臼井先生に会いたいですね」という流れで今日の企画が生まれました。今日は3世代が集まって、また新しいお話が聞けるんじゃないかなと思います。

どうぞ、4人の皆さん、よろしくお願いします。

ということで、早速臼井先生からお話伺っていきたいんですけども、まず震災当時のこと、そしてその中からどうやって「しあわせ運べるように」が生まれたか、その辺りのお話聞かせていただいでよろしいですか。

- 臼井先生 はい。今から30年前になりますが、私は当時34歳で小学校の音楽の先生になって12年目でした。退職まで小学校8校赴任しましたが、3校目の吾妻小学校、現在、コムスタこうべ（神戸市生涯学習支援センター）になっていますが、校舎というか外観はそのまま残っているんですが、そこで5年目でした。29歳にそこへ赴任しまして、その年、2年生を教えていたので、2年生から教えてる子たちが6年生になるまで5年間勤め、転勤する予定でした。そのころ、ずっとマーチングバンドの早朝練習で毎朝4時半に起きて、7時半ぐらいから練習していました。あの日もそのマーチングバンドの発表会が近かったので、動きのフォーメーションをあの日から練習する予定でした。



いつもよりも少し早く目が覚めて、木造の2階建ての1階で朝食もすませました。そして2階に上がって2、3分後に地震が起こった。だから私は1階にそのままとどまっていたら、今ここにはいないですし、もちろん歌も作っていない。私の自宅の1階部分は完全に押し潰されて、2階が1階になってしまった。1階から2階に上がる階段が屋根にねじれて突き刺さっているような状態で全壊したので、本当にけがなく助かったのが奇跡的なような状態で命を取り留めました。そして、私は、今はもう亡くなっている母の姉が近くに住んでいて、その家は地盤が固くて無事だったので、そこで居候させてもらった。避難所には行かなかったんですが、勤めている小学校が最初は2,000人ぐらいの方が避難されている。もう学校じゃなくなってしまう学校に、たくさんのボランティアの方たちと一緒に、避難所運営をしていました。

多分地震から2週間後ぐらいだったと思うんですが、親類宅でたまたま交代勤務で、夜の8時、9時ぐらいに帰れたんですが、そのとき、夜のニュースで神戸の三宮の街が映ったんです。それが私が生まれ育った、そして思い出のいっぱいある三宮じゃなかったということに衝撃を受けました。もう神戸のまちは消えてしまったと思って初めてふるさと神戸っていう思いがものすごく込み上げてきました。そして、親類宅の同い年のいところに2歳の子供がいたんですが、その子供のために、いとこがアンパンマンの絵を描いていた紙の裏に、この歌の歌詞を。これは作ろうと思って作った歌じゃなく、そのときにこみ上げてきた思いを忘れないように記して作詞、そして作曲しました。私は、そのとき、神戸市の小学校の音楽の先生になって12年間で、既に150曲ぐらいの神戸市の子供たちのために歌を作っていました。いつも作詞をして作曲、そしてときと場所を選ばずに、いつも頭の中でメロディーが浮かんだのを歌詞の横に片仮名で音を書いて、後で楽譜に直すというような創作方法を探っていました。そのときも同じように作詞をして、心の中でメロディーを歌って、忘れないように片仮名で記するという状況で、親類宅で30年前の日にちははっきりと分かりませんが、その夜にこの歌を神戸の子供たちに未来を託して作ったという状況です。

○鈴木先生 ありがとうございます。

まず、ぱっと思い浮かんだ歌詞というのは、「しあわせ運べるように」のどの部分なんですか。

○臼井先生 本当に書いたとおりで、一番最初に書いたのは「地震にも負けない」。私は、本当に精神的に一番

苦しい、先が見えない、音楽の先生なんて何にも役に立たない、全壊した家をどうする、学校は授業がいつ再開できるか分からないっていうような、精神的にちょっとおかしくなりそうな状況でした。だけどボランティアの方の背中を見ながら、くじけそうな心を助けてもらったりだとか、そういう状況の崖縁状態でしたので。

けれども、先ほど最初に言いましたように、2、3分の差で命が助かる。あのとき亡くなられた方は、絶対にこんなところで死にたくないとか悔しい思いで去られていたのがすごく切実に分かっていました。その亡くなった方々のことを思えば、どんなにつらくても前を向いて生きていかなければいけないと思ったのが一番です。もうこの歌詞のとおりにより毎日の時間を大切に生きていくんだと、この歌を歌う子供たちにも生きてほしい、そして聞いてくださる皆さんにもそう思ってほしい。それで書き出しの部分ですね。そこが一番ということですよ。

○鈴木先生 そうですか。もうまさにその当時の先生の思いがそのまま歌詞に反映されているということなんですね。

そうやってできた「しあわせ運べるように」を今度は子供たちに歌唱指導という形でされてきたかと思うんですけど、どういう思いで歌唱指導されてきたか、そのことをお話しいただけますか。

○臼井先生 最初は、学校が避難所で、廊下には避難の人が寝ていたりしていた。けれども、ボランティアの方も授業を見に来られてたりとかした状況だったんです。全員の子供はそろっていなかったんですが、私が模造紙に歌詞を書いて、貼って、これは先生が神戸のまちに対するいろんな思いを込めて作った歌だと。けれども、これは先生が歌うんじゃなくて、みんなに歌ってほしいというメッセージを最初に伝えて、1年生か



ら6年生までの無事だった子供たちに音取りから始めてというような状況で、最初は教えました。

最初の子供たちは、そのままの状況で、この歌の歌詞のとおり歌えたんですけど。しかし、それが今30年たって、菅原先生もそうですけども、地震の後に生まれた人たちにどのように伝えていくかということ、30年間でいろんな経緯がありました。

○鈴木先生 そうですね。またちょっとお話を聞かせていただきたいと思うんですけども。さて、先ほど臼井先生からもありましたけど、菅原先生は震災後に生まれた世代の先生なんですよ。

○菅原先生 そうですね。

○鈴木先生 臼井先生との出会いというのはいつのことになりますか。

○菅原先生 私が2001年生まれで、低学年の頃に教えていただいていたので、2006、7、8年とかその辺りですかね。

○鈴木先生 21世紀に生まれた人なんですよ。

菅原先生は当時の地震のことは知っていたらうけれども、直接は体験していない。その世代の先生はどういう思いで「しあわせ運べるように」を歌っておられたんでしょうか。

○菅原先生 低学年とかの頃は、とにかく真剣に相手に伝わるようにということと、もう必死に頑張って歌っていたという記憶あるんですけど、それがだんだん高学年になったり、あと中学校に上がるにつれて、歌詞の意味というのがだんだん分かるようになってきて、例えば2番の歌詞の「優しい春の光のような」というところも、震災が冬に起こったので、もしかしたらちょっと先の未来の暖かさ、そういったことを考えながらこの歌詞書かれたのかなとか、そういったことを想像しながら歌うようになっていきました。

○鈴木先生 もちろん臼井先生から直接御指導いただいたときもあったんですよ。

○菅原先生 そうですね。

○鈴木先生 そのときの臼井先生のその指導の中で覚えておられることってありますか。

○菅原先生 指導というところから、ちょっと外れるかもしれないんですけども、とにかく臼井先生の音楽の授業が好きで、毎回本当に楽しみにしてて。というのも、臼井先生の歌とか、忘れ物をしたときの歌とか、何かそういった歌だったり、あと音楽会の最後に歌う「見えない翼」という曲があるんですけども、そういう歌をこの大人になっても思い出すこともあって、そこから私は音楽の習い事をしたりとか、合唱コンクール



の指揮してみようかとかそういうことにもつながっていったので、自分の中の音楽の基礎をつくっていただいたって言ったらちょっと大げさかもしれないんですけど、本当にそれぐらいすごく印象に残っています。

○鈴木先生 先ほどエレベーターホールのところで、何か踊っていたみたいな話もちょっと聞かせてもらったんですけど、それはどういうときに踊っていましたか。

○菅原先生 授業の始まる時とか、授業中とかも。

○鈴木先生 授業で踊る、授業中も体で音楽を楽しむというような、そんな楽しい授業をされていたんですね。

○菅原先生 あと「しあわせ運べるように」の歌唱の指導もしていただいたんですけども、その際にも相手のことを思うというのはもちろんそうなんですけど、歌っている途中で感動して、当時のことは分からない、イメージではあるんですけど、本当に感動して涙が出そうになるくらい引き込まれる授業だった、貴重な経験させていただいたなという、そういった思いです。

○鈴木先生 そうでしたか。臼井先生、今のお話聞いて、どうですか。震災を知らない世代だけでも、思い出してぐっとくるものがあるということ。

○臼井先生 とてもうれしいのは、私、本当に1万人ぐらいの教え子いるんですけども、今はもう40歳、50歳になっている人たちが、その音楽の一番最初の出会いが臼井先生であって、それで音楽が好きになって、今も菅原先生言ってくださったのが、僕は本当にうれしくて、それを願って音楽の指導をしてきたので、それが私が作ってきた歌にも通じているところがあって、国語の先生だし、とっても言葉が大変美しくて心に響きました。

○鈴木先生 菅原先生、国語の先生なんですよ。音楽の先生じゃないんですけども。やっぱり詩的なところに引かれるところがあるんだなって、さっきのお話聞いて思いました。

30年という時間がたって、先生の指導もちょっとず



つ伝えたいことも変わってきているかなと思うんですけども、もちろん菅原先生みたいに震災を知らない、直接教えられた生徒さんで、端に座っている2人なんかは歌は知っているけど、臼井先生には直接教えてもらっていない。そういう子たちもたくさん「しあわせ運べるように」歌っているんですけども、歌を通じてそういう世代の子に伝えたいことって何かありますか。

○**臼井先生** 歌を知っていても、私がこの歌に込めた思い、歌詞の本当の意味、そういったものを今、小学校とかゲストティーチャーで呼んでいただいたときに、お話ししているんですが、例えば「傷ついた神戸を」というのは、神戸のまちは死んではないんだと、大げがをしているんだと。だから絶対によみがえるという願いがあったんです。人間のように例えていた。傷ついたという意味であったりとか。先ほど言われた「優しい春の光のような」はまさしく本当に心も体も凍りつくような思いの中で、この悲惨な神戸のまちにも、やがてそよ風が吹き、桜の花が咲き、そういう優しい春の光のような未来が来てほしいなということをして2番の歌詞に思いを込めて書きました。そういう歌詞の本当の意味を、私が命ある限りは、また直接お話しして伝えていけたらいいかなと思っています。

○**鈴木先生** きっと、ここにいる人たちも初めて聞いたこともたくさんあるかと思っています。

さて、端に座っている2人、とっても緊張していると思うんですけども、今、臼井先生、菅原先生のやり取り聞いて、菅原先生にインタビューはしたかと思うんですけど、改めて何かインタビューし直すなら、これ聞いてみたいということありますか。

○**西口さん** 菅原先生は、教師になってから何か気をつけるようになったこととか、意識するようになったこと、ありますか。

○**鈴木先生** 防災に関してってということやね。教員採用

試験みたいな質問ですけれどもね。

○**菅原先生** 意識が変わったことは山ほどあるんですけども、中でも、私は3月まで大学生で、4月から教員になるぞということで、今までの大学生みたいに、責任感はないところから、今クラス担任しているんですけども、クラスの子の命を預かっているんだという、そういった気持ちはすごくあります。

その中でも例えば、地震起こったときに逃げるということはもちろん大切なんですけど、その後のどう生き抜くのか、そういうところまで教員になってから発想が行った。例えば避難所のことであったり、様々なトラブルが予想されるとか、後は事前のこの準備しておけばとか、そういうことをよく考えるようになったかなと思います。

あともう1つ、この職業まだ9か月なんですけど、教員している中で伝える、高校生みんなと一緒に時間を過ごすというすごい貴重なことをさせていただいているなというのはすごく感じて、意識としては。悔いのないように伝えたいと思ったことはすぐ伝えるというところですよ、

○**西口さん** ありがとうございます。

○**鈴木先生** 今の菅原先生が子供たちに伝えたいということは何かありますか。

○**菅原先生** よく自分のクラスの子には言っているんですけど、本当に命だけは大切にしてください。そういうことは言っていて、命さえあれば、今苦しいし思春期真っただ中で様々なことが周りで起こるわけですけど。本当に何とかなるからってというのはすごい言っています。

○**鈴木先生** 本当にそうですよね。災害が起こるとか、起こっていないとか、そういうこと関係なくやっぱり命あってこそですよ。それはやっぱり私も同じ教師として思うところはあります。

内林さんも何か聞きたい。

○**内林さん** はい。今、臼井先生のお話を聞いて、改めてそういう授業を使って生徒に伝えたいことって何かありますか。

○**菅原先生** 来週であれば舞子高校はメモリアル行事もあって、この震災のことを考えるという期間があるんですけども、そのときにも、もちろんさっき言った命を大切にということは言うんですけど、それにプラスして、今後起こり得る南海トラフ地震の話なんかも交えながら、クラスの子だったり、授業でとかちょっとでも伝えられたらいいのかなというのが1つあるのと、後は最近、家族で地震について話すということが

あって、父のエピソードが1つあったので簡単に説明します。父は神戸市の出身で、震災当日は京都のほうで仕事をしていて、地震が起こったということに気づいて、車で神戸に戻る、様子見に行くってことがあったんです。そのときに父の職場の方がこれもあれもっていろいろ食料品を提供してくれて、それを車に積んで運んだというエピソードを聞いて、苦しい中でも人の温かさというのは大切なことや、苦しい中でもそれをばねに頑張れる、自分もみんなも震災は経験してはいないんですけど、もし起こったとき、苦しいときは人の温かさを大切にしたいよね。そういう話は来週クラスではしようかなと、今考えています。

- 内林さん ありがとうございます。
- 鈴木先生 そういうエピソードがきっとたくさんあったんだろうなと思いますし、直接体験してない菅原先生でもお父さんのお話を聞いて、こうやって皆さんの前でお話しするというのも、また1つ語り継ぎの形なのかなと思いますね。きっとそうやって御自身のお話をされると、生徒ってとっても引きつけられるところありますよね、臼井先生。絶対、心に響くものがあると思うので、ぜひお話ししてあげてください。
- 菅原先生 ありがとうございます。
- 鈴木先生 せっかくお会いできたので、臼井先生に何か聞きたいことがありますか。
- 西口さん 菅原先生のお話でもあった南海トラフ地震。今後必ず発生すると思うんですけど、そのとき臼井先生は、阪神・淡路大震災での経験をどんなふうに生かして対応していきたいですか。
- 臼井先生 私が生きているうちに、もう起こってほしくない、あんな目にはもう二度と遭いたくないとは思っているんですが、防災安全教育でいうと、あのときに建物とかタンスとか重いものが寝室で倒れてきたので、備えを常にしておくということ。頭を打たれて



亡くなった方もいっぱいおられたり、もちろん今は建物も、耐震構造で造られていると思うんですが、いっどこで地震が起こったらどう行動するか、家族がどこで会うか、約束をどうするか、携帯が使えなかったときどうするかということを常に想定しておかないといけないという準備ですね。阪神・淡路のときは何の予備知識もないときに地震が起こって、学校も初めて避難所になり、公務員が避難所の運営するということも私も知らなくて、そういう戸惑うようなことばかりだったので、常に備えておくということですかね。

- 西口さん ありがとうございます。
- 鈴木先生 臼井先生は今、大学生をお相手に音楽を教えておられるとお聞きしましたが、大学生の皆さんにそういうお話をされるということはあるんですか。
- 臼井先生 私は音楽教育を中心に教えているんです。今、4年目で、今年の4月から5年目になるんです。防災安全教育というのも1週間に1度担当しているので、1年に1回は1時間半の講義で、「しあわせ運べるように」の歌に込めた思いとか、今までの経緯、そして願いをその授業を取っている学生にはしています。あとは音楽のゼミを担当しているので、3年生、4年生のゼミ生を受け持っているんです。来年度からは共学になって、初めての男子の学生も入ってくる。一番近い存在のその人たちに、より深く、いろんな場面で、大学生バージョンの「しあわせ運べるように」をどう伝えていくかということをしていきたいなと思っています。
- 鈴木先生 大学生バージョン、時間があつたらぜひ聞いてみたいですね。
内林さんも何かありますか。
- 内林さん その「しあわせ運べるように」の歌詞で、今私たちに「しあわせ運べるように」の歌の指導をするってなったときに、歌詞のどのフレーズを一番重要というか、一番意識して歌ってほしいとあってありますか。
- 臼井先生 先ほど言った「亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう」ということが、私がこの歌に込めた一番のメッセージかもしれないので、先ほど菅原先生も言われたように、6,434名の方、生きたくても生きられなかった命がたくさんあったということ、この歌を歌うときに、いま一度思い返してほしいし、御自身の命、そして周りの方々の命、そういうことをこの歌を歌うときに大切に歌ってほしいなと思います。

- 内林さん ありがとうございます。
- 鈴木先生 いろいろ初めて聞くお話もたくさんあったかと思うんですけども、菅原先生、この後もまた「しあわせ運べるように」を歌うわけですけども、どんな気持ちで歌いますか。
- 菅原先生 経験していないんですけども、亡くなった方の思いを考えながら、歌いたいと思います。
- 鈴木先生 内林さん、西口さんはどうですか、お話をかせてもらって。
- 内林さん 私も小学生のときからずっと1月になったら毎年歌っていて、臼井先生からのお話を今聞いて、その歌詞の意味を理解して歌いたいなって思ったし、環境防災科に入って阪神・淡路大震災のことを詳しく学んだからこそ、今日のお話もそうだし、阪神・淡路大震災のお話ももっといろいろな人に伝えていきたいなって思いました。
- 鈴木先生 西口さん、どうでしょう。
- 西口さん 今のお話を聞いて、これまで歌ってきた中では、歌詞を分かったつもりでちゃんと考えて歌っていたつもりだったんですけど、臼井先生のお話を聞いて、よりもっと思いをはせて歌うことができるんじゃないかなと思います。
- 鈴木先生 「しあわせ運べるように」は、神戸の歌だけじゃなくて、各災害で被害に遭われたところでも歌われておられるわけですけども、改めて臼井先生、歌の力ってどうですか。人を救ったり励ましたりするものがありますか。
- 臼井先生 私は、講演会のタイトルとして「歌の力を



信じて」というタイトルで、たくさんの講演もさせていただけるんです。私は幼いときから歌うことが大好きで、いろんな歌に励まされたり、慰められたり、元気を与えられたり。歌は時間の壁を越えていくようなものだと思うので、人の心をつないでくれますし、そのときの記憶を思い返してしてくれる。そういう思いでこれからも歌を作っていきたいと思っていますし、今まで作った歌も大切にしていきたいなと思っています。

○鈴木先生 ありがとうございます。

この後の記念ミニコンサートでも御披露いただけるということで、臼井先生も引き続きよろしくお願いたします。

そろそろお時間が来たということなので、震災30年スペシャル座談会～臼井先生、その生徒、その生徒の生徒～はここまでということになります。

臼井先生、菅原先生、内林さん、西口さん、ありがとうございます。



記念ミニコンサート

指揮：神戸親和大学 准教授 白井 真さん

演奏：長田区合唱団

曲目：「しあわせ運べるように」「群青」



特別シンポジウム

「これまでの30年とこれから～“アクション”の次は?～」

【コーディネーター】

- NHK大阪放送局 チーフ・アナウンサー 大山 武人さん

【グラフィックファシリテーター】

- 大阪防災プロジェクト共同代表 多田 裕亮さん
- 山越 香恋さん

【パネリスト】

- 人と防災未来センター長 河田 恵昭さん
- 京都大学防災研究所 教授 矢守 克也さん
- 京都大学防災研究所 教授／
災害メモリアルアクション KOBE 企画委員会委員長 牧 紀男さん
- 明石工業高等専門学校 准教授 本塚 智貴さん
- 兵庫県立舞子高等学校 環境防災科長 鈴木あかねさん
- NPO法人 TEAM・あげあげ 代表理事 高橋 徹さん
- NPO法人防災デザイン研究会／
株式会社G K 京都 第1デザイン部 シニアディレクター部 兼慎さん
- 株式会社G K 京都 第2デザイン部 シニアデザイナー 伊藤奈緒子さん
- 関西大学社会安全学部 教授 奥村与志弘さん
- 京都大学防災研究所 助教 中野 元太さん

- 司会 ただいまから「これまでの30年とこれから～“アクション”の次は?～」をテーマに、特別シンポジウムを始めさせていただきます。

ここからの進行は、NHK大阪放送局チーフアナウンサー大山様をお願いいたします。

- 大山コーディネーター NHK大阪放送局アナウンサーの大山と申します。



災害メモリアルアクション KOBE の企画委員を務めております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

今日は、これまでの30年ということで、いろいろ話が出てきていますけれども、今の災害メモリアルアクション KOBE は3代目のプロジェクトであります。

初代、そして2代目、3代目という形で、プロジェクトのリーダーの方に今、既に御登壇いただいています。

阪神・淡路大震災を経験した世代による「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」というのが2005年まで、これ初代のプロジェクトです。その教訓を次世代に伝えるための災害メモリアル KOBE が2015年まで、これは2代目です。そして、そのバトンを引き継いだ災害メモリアルアクション KOBE が2016年から今年までとなっています。

今日は、その3つのプロジェクトの位置づけや意義を共有するとともに、この10年で参加した若い世代の変化やプロジェクトの成果、さらにこの先の10年を見据えたこのアクションの次のキーワードは何なのかということを探ってまいりたいと思います。これから90分語り合ってみましょう。

そして、グラフィックファシリテーターを御紹介します。大阪防災プロジェクト共同代表の多田さん、そして山越さん、引き続きお願いします。

今日のシンポジウムの構成をお伝えします。まずこの30年、そして災害メモリアルアクション KOBE の位置づけとか意義について、このお三方とお話をしてみたいと思います。

さらにこの10年、参加した若い世代の変化とは、ということで、教育現場の視点から、主に教育現場の企画委員の方に壇上に上がっていただきまして、話を伺ってまいります。

そして、この10年の成果物の取りまとめということで、様々なプロダクトが生まれていますけれども、そこから分析するとどんなことが言えるのか、さらに、この成果の取りまとめで、どんなものが出てくるのかということをお伝えしてまいります。

最後に、ここ一番重要なところでございますけれども、この先の10年、「アクションの次は?」ということで、また話を進めてまいります。

それぞれパート2からパート4に関しては、災害メモリアルアクション KOBE の企画委員が代わる代わる登壇していただきまして、お話を進めてまいります。

パート1：震災30年「災害メモリアルアクション KOBE」の位置づけ・意義は?

- 大山コーディネーター では、もう既にスタンバイしていらっしゃると思いますが、パネリストの御紹介と、それぞれ震災30年を迎える思いを一言お願いします。

まず、人と防災未来センター長の河田先生です。よろしくお願いいたします。

- 河田氏 一言で言いますけれども。

とても信じられないといいますが、30年前に起こったときに、全く考えてもいないような30年後が今起こってると思っています。



- 大山コーディネーター そして、2代目の京都大学防災研究所教授、矢守先生です。では30年の思い、いか

がでしょうか。

○矢守氏 30年は、皆さんそれぞれ

今、自分の頭の中で自分の年齢を
言っておられると思うんですけ
ど、私は32歳から62歳の30年間で
した。ちょうど自分が仕事を人生の中で、一生懸命
やっている時期に、この30年が重なりまして、その30
年、一緒に仕事をしてくれてよかったなと思っていま
す。今日はよろしくお願ひいたします。



○大山コーディネーター ありがとうございます。

そして3代目、京都大学防災研究所教授で災害メモ
リアルアクション KOBЕ の企画委員長の牧先生です。

○牧氏 30年目で、中越地震があっ

て、それから東日本大震災があっ
て、昨年、能登半島地震があっ
て。一言で言うと。創造的復興という
復興の姿も変わらないといけないのかな。30年1世
代、一区切りという気もいたしております。よろしく
お願ひします。



○大山コーディネーター 今、申し上げましたけれども、
3つのプロジェクトが10年区切りで進められてきまし
た。

最初のメモリアル・コンファレンス・イン神戸、河
田先生、これはどういったプロジェクトだったんで
しょうか。

○河田氏 まず、震災が起こった当時、都市災害の研究
をやってる人は世界で僕1人だったんです。だから、
非常に大きなショックを受けたわけです。三宮に来た
ときに、目の前に廃墟になったまちが展開している。
それまでは、非常にプライドを持って研究していたわ
けです。だから、世界一流の研究をやっているという
自負があって。でもあの惨状を見たときに、何をやっ
てきたんだ。たくさん論文も書いたし、一生懸命やっ

てきたんだけど、ちっとも役に立ってないというこ
とが分かったんです。

だから、震災のときに思ったのは、役に立つ研究や
らなきゃ駄目だって思ったわけです。実は当時の防災
というのは土木工学が主流だったんです。そこに
ちょっと建築が入っているという形でね。だから、こ
んな大きな都市災害が起こって、土木とか建築だけ
じゃ駄目だと。だから、この震災に関心のある人を全
部集めて議論しなければいけない。これが実はこのメ
モリアル・コンファレンス・イン神戸を作った土台に
なっているんです。

○大山コーディネーター その最初の提言というのがこ
こにありまして、1996年2月20日に提言がありました。

こういった8項目です。1番目が広域防災体制の確
立とか、2番目が地震規模の予測とインフラの設計法
の見直し、3番目が産業とくらしの早期復興のための
国会による財政支援、そして4番目が地域に根差した
協働型まちづくりシステムの確立など、こういったこ
とを提言されていますけど、今、30年前のこの提言御
覧になってどうですか。

特別シンポジウム
これまでの30年とこれから～“アクション”の次は？～

MEMORIAL CONFERENCE IN KOBE
“AN ACTION FOR THE FUTURE”

メモリアル・コンファレンス・イン神戸 提言 - 第1回 1996年2月20日 -

1. 広域防災体制の確立
2. 地震規模の予測とインフラの設計法の見直し
3. 産業とくらしの早期復興のための国家による財政支援
4. 地域に根差した協働型まちづくりシステムの確立
5. 巨大都市災害対応におけるコーディネーション機能の強化
6. 支援のネットワークづくり
7. 建物の設計・施工システムの見直し
8. 心のかような災害情報は、生きた地域コミュニティを作ることから

○河田氏 ここに至るまでのプロセスがとても大事で、
実はメモリアル・コンファレンス・イン神戸という組
織をつくったのはいいんですけど会議をする場所もな
い。お金もない。こういう中でどうやって大きくして
いこうかということが非常に大きな課題になったんで
す。

それで土木や建築だけではなく、まちづくりとかい
ろんな人を集めなきゃいけないというので、当時500
人ぐらい集まって実行委員会をつくって、80人ぐらい
で毎月会合をやって、1年後の2月に大会をやろうと。

神戸国際会議場というのが潰れてなかったの、2
日間借りるのに当時600万円が必要だったんです。

○大山コーディネーター 大金ですね。

○河田氏 組織委員長に新野先生になっていただいて、
実行委員長に土岐先生、僕が幹事長で、幹事が当時助





教授の林春男で、この4人が動き始めたわけです。それで、お金が一銭もないと分かったんです。もう予後はしたんですが600万円必要です。どうするとなったときに、僕が幹事長で、河田に責任があるとなったんです。突然です。困った。

それで東京の土木学会に行ったんです。専務理事に、こういうことやるから100万円ほしいと言ったんですよ。そうしたら専務理事がびっくりして、そんなこと私に今言っていたら、急にそんなもの出せないって言われた。もう2月にやらないといけなないから。土木学会で理事会やって100万円くれるの決まるまでに6か月ぐらいかかるでしょう。これはいかんと思って、とっさにうそをついたんです。建築学会が100万円くれることになったと言ったら、土木学会が、えっ建築学会が出したのか。じゃあ出さなしゃあないというので100万円もらった。それで、その足で建築学会行ったんです。それで、土木学会で100万円もらったと言ったら、何、土木学会が100万円出した。じゃあうちも100万円出すって。これで200万円。これはいいと思って大阪に帰ってきて、今度は関西電力に行ったんです。それで、大阪ガスが100万円くれたと言ったら100万円くれて。今度大阪ガスに行って、関西電力が100万円くれたと言って、それで400万円です。

しめしめと思い、今度JR西日本に行って、民鉄協会が100万円くれたって言ったんです。何、民鉄協会100万出した。じゃあうちも100万円出さないかんなんて。これで600万円です。

1か月で1,280万円集めたんです。僕は大学の先生にならなくても、立派な経済のリーダーにはなれた。だからお金なかったらできないではない。そういう苦労から始まったんです。要するに、このメモリアル・コンファレンス・イン神戸というのは、つくった時点でみんなの意思をそこに反映しなければいけないということから始まっているわけです。補助金で行ったん

じゃないので。

だから、この提言は土木と建築が中心になっているんです。ですが、コミュニティの問題など、今は本当に大切な問題も実は当初から入っているんです。そういう意味で非常に大きな不幸だったけれども、これを学ばないで一体どうする、そういう熱意だけはあったんです。

○**大山コーディネーター** そういった知見を10年間積み重ねていって、バトンを受け取ったのが、この2代目のプロジェクト、災害メモリアル KOBE です。矢守先生、どういうふうになバトンを受け取りましたか。

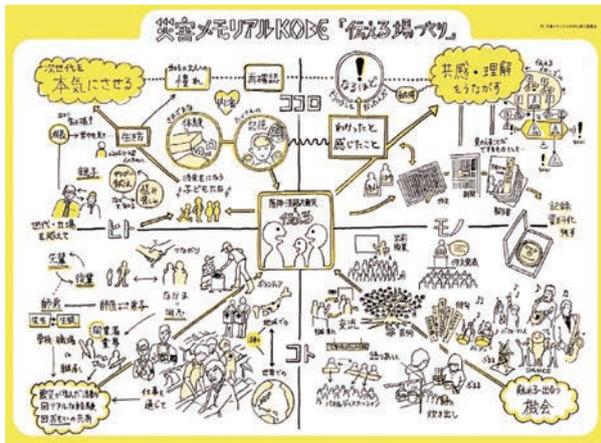
○**矢守氏** 大体3代続いたものって、2代目の印象がない場合が多くて、徳川将軍もそうだし、足利将軍もそうだし、そもそもバトンをもらっているという段階で、自分でバトンをつくっていないというのが問題なんですけど、今、河田先生がお話くださったように、絶対1回しか通じないテクニックで1,280万ですかね。ファンドレイジング、お金を集めていただいて、そのおかげで第1世代から渡ってきたバトン。これをどう受け渡していこうかというときに、私たち2代目なので、第1世代と第2世代をどうやってつなぐかというのが、最初からキーワードになりました。

後でまたゆっくりと思いますけど、私とその第2世代を担当させてもらっていた期間、2006年から2015年なんですけど、その間に2011年東日本大震災が起こったので、それをどう第2世代として受け止めるかというの、もう一つ大きな課題だったですね。

○**大山コーディネーター** この第1世代、第2世代という言葉、非常に印象的なんですけれども、これはすなわちどういう問題に向き合おうとしたんですか。

○**矢守氏** 一言で言うと、さっき白井先生とその生徒、その生徒の生徒というすてきなお話と歌を聞かせていただきましたけれども、全く同じような意味で、第1世代、河田先生を中心に引っ張ってきていただいた皆さんと、それから直接は震災を経験していないという世代はまだそんなにいなかったんですけど、子供だったっていう世代がたくさん、10年たっているんで、当時7歳だった人が17歳、10歳だった人が20歳。その人たちが、高校生とか大学生とか、あるいは就職し始めたという時期だったので、その当時の10代後半から20代の人たちを第2世代というふう位置づけて、震災当時、もう第一線で活躍した世代を第1世代と位置づけて、その間をどうブリッジするかというのが大きな課題だったんです。

○**大山コーディネーター** まさしく、この図のようなこ



とですね。

- 矢守氏 これは懐かしい資料で、第2世代の10年間で終わった後にみんなで作った資料なんです。その中に今、画面で皆さん御覧いただいていると思うんですけど、キーワードとして、横に「ヒト」と「モノ」でつないでいく、それから縦のほうに「ココロ」と「コト」でつないでいくというのがあって、例えばその中に、先ほども披露いただいたような歌もあれば、それから左下のほうですか、先輩と後輩、それから先生と生徒、師匠と弟子とか、こういう関係の中で第1世代から第2世代へバトンをつないでいこうと。そのバトンをつなぐというときの、バトンを手渡す人と送られる人の関係、これはいろいろあると思うんですけども、それをいろんな形で模索しましょう、探しましょうというのが大きなテーマでした。
- 河田氏 それも大事なんですけど、例えば、このメモリアルアクションのパンフレット。これ実はGK京都が頑張ってくれて作っているわけです。GK京都のト部さんは、被災者なんだけど。30年前若者で、彼はずっと30年間やってくれている。こういう個人の熱意。これがこの会議に活かされている。だから、今発表して



もらった内容、中身は変わったけれども、どう出すかというふうなところは1回目から変わっていないんです。これが非常に大事だということです。

○大山コーディネーター 今日はト部さんも登壇されますので、お楽しみに。

そしてそのバトンをさらに3代目が引き継ぐわけですけども、牧先生、災害メモリアルアクション KOBEBEとして、どのように引き継いでいんでしょうか。

○牧氏 3代目というのは初めのうちは楽なんです。先代2代にわたって大変すばらしい成果をつくっていただいているので。ただ、同じ商売を30年続けるというのはなかなか難しく、やろうと思ったこと、アクションとつけた意味は、もうそろそろ南海トラフ地震も来るから、語り継ぎだけではなくて、これをどういう形で実際の防災・減災に続けていくのかということ。もう一つ受け取ったメッセージは、今日の午前中のパネルディスカッションで最後に皆さんに聞きましたが、こういう場をどう維持していくのかということが大事ななと思いました。3年目ぐらいまでは矢守先生の成果というか、先代の御意思を食い潰して、結構うまいこと行ってるなと思っていたんですけど、このままやってもいけないのかなという、その後少し不安になってきたということです。

○大山コーディネーター 若い世代が震災の教訓を伝えるための仕組みづくりを目指したということで、今日この後のお話につながってまいります。この10年間でどんな活動で、どんなことが見えてきたのかというのを見ていきたいと思います。

ここからはお三方にはコメンテーターとして残っていただきまして、企画委員がそれぞれのテーマごとに登壇いただきましてお話をいただきます。

パート2：この10年 参加した若い世代の変化とは？ 教育現場の視点から

○大山コーディネーター 2番目のパートは教育現場の視点からということです。この10年、参加した若い世代の変化というのも、私見てきて感じておるところがあります。そこを教育現場の視点から、先生方に登壇していただきます。災害メモリアルアクション KOBEBEの企画委員から3人の方に登壇していただきます。

まず、明石高専の本塚先生、午前中に引き続きよろしくお願ひします。

そして、県立舞子高校の鈴木先生、先ほどに続いて

よろしくお願ひします。

続いて、元明石南高校で現NPO法人のTEAM・あげあげの高橋先生、よろしくお願ひします。

それではまず、それぞれの先生方に、それぞれの学校でどのような形でもって、このメモリアルアクションKOB Eに参加してきたのかというのをお話しいただきたいと思ひます。

まず、本塚先生、お願ひします。

○**本塚氏** 明石高専の本塚です。

私はこのメモリアルアクションKOB Eに関わったのは、もともと人と防災未来センターのときに、出身校の明石高専が参加しているので、メンターのよう な形でも関わらせてもらったというか、ちょうどその頃がD-PRO135°の生まれたてのほやほやの時期で、まさに一緒に歩んできたという形なんです。3年目ぐらいに私が母校に戻るようになって、そのまま顧問を務めさせていただいているというような状況になります。



○**大山コーディネーター** D-PROが母体となつてということは、防災士の資格を持った学生たちですか。

○**本塚氏** D-PR135°のこのメモリアルアクションKOB Eに関わる前に、明石高専を含めた近畿の高専が、神戸に位置する高専を中心に防災に特化した事業を始めよう。その中に太田先生もいて防災リテラシーという事業を始められて、2年目ぐらいにその防災士の資格の養成講座に登録されたことで、学内でも防災士が生まれるようになった。

生まれてそこで終わりだと、何も活動しない防災士をたくさん生み出すことになるので、太田先生がうまいこと学生のお尻を叩いて、おまえら何もしなかったら単なる防災士やぞと。何かやることないんかと言って、まさに第1世代の多田くんたちが、じゃあ自分たちで組織つくるっていつつあったD-PRO135°が、このメモリアルアクションKOB Eとともに10年間どんどん大きくなっていったところを伴走させてもらっているような状況です。

○**大山コーディネーター** そして、舞子高校の鈴木先生。舞子高校ではどのような形で生徒さんは参加しているのでしょうか。

○**鈴木氏** ここにいるのは環境防災科の生徒なんですけれども、本当に有志なんです。別に強制しているわけでもなく、先輩たちが午前中見ていただいたようなインタビューとかをしていて、そういう活動をやっているからやらないっていうふうな勧誘をかけて、それで

いいなと思った子が手を挙げてチームに入ってくるという、そういう形で集ってきています。

○**大山コーディネーター** じゃあ有志が10年間続いて参加してきたってことですね。

○**鈴木氏** そうなんです。私はこれには転勤と同時に関わったので、私この10年の最後の3年間だけなので、その淵源は分からないんですけども、そうやって続いてきたんだと思ひます。



○**大山コーディネーター** そして高橋先生は、元明石南高校の先生でいらっしゃるって、めいなん防災ジュニアリーダーでしたか、メモリアルアクションKOB Eには、そこから途中参加しているんですね。

○**高橋氏** どういう流れか、太田先生にえらく気に入られまして。参加しませんか、えっ、そんなん出れんのかと思ひたんですけど、子供たちの勉強にもなるやろうし、不細工でもやっているうちに、様になるやろうと思ひて参加したのが、6年ほど前です。だから、ちょうどこのメモリアルアクションKOB Eの5年目ぐらいからですかね。参加させていただきました。



○**大山コーディネーター** そして、この10年なんですけれども、若い世代の変化といいましようか、この阪神・淡路大震災というのが距離感、つながり感が変化してきたのかなと思ひております。本塚先生、明石高専ですと、今、多田さんがいますけど、多田さんとか、活動を思い出したら渡部さんという世代から、今日いらっしゃる世代まで、阪神・淡路の距離感とかどうですか。

○**本塚氏** 当初は阪神・淡路だけじゃなくて、自分たちのスタイルを模索していったという時代があって、募金活動したり、阪神・淡路の教訓を得るためにインタビューしたり、いろんなことやってる中で、彼らなりにゲームを作るというのに到達したのがまさに第1世代です。

第2世代にどうバトンを渡すのか。そのまま作ったゲームをそのまま使わずずっと遊んでたらしいじゃないですけど、やっていたらよかったんですけど、第2世代はゲームを作らずに地域連携にずっと走ったんですね。

第3世代がそれを見て、両方できるんだということで、その辺りで大体形ができてきたのかなというところで、ですから私が何かを言っているというより、内部で何となくその先輩の姿であったり、姿が見えなく

なっても出来上がったプロダクトのゲームなんかを体験する中で、こういう込められた思いがあるんじゃないか、じゃあ自分たちはどういふものを作るんだ、越えるべき壁としての先輩たちの姿が出来上がって、今70人近い学生が参加しているというような状況になっています。

○**大山コーディネーター** 70人ですか。

○**本塚氏** そうなんです。だから私も全然顔と名前が一致しなくなってきたし、初めはすごく優秀な第1世代だったので、こんな人たちが卒業したら多分この活動は止まるんだろうなと思っていたんですが、それぞれの代がいいところを出しながら、よく分からないけど継承している。それが実は防災って楽しいという一言に行き着いているのかなと感じています。

○**大山コーディネーター** 今日、午前中、非常に印象的だったのは、牧先生が明石高専の学生さんに、先輩から何か引き継いでいるもの、聞き出しているものがあるのかというふうに問うて、学生さんがそういうのはありませんというふうなお話でしたけども。ここにすごく象徴されているというか。

○**本塚氏** だから、私も講師とかで地域に出て、防災をきちんとつなげないといけないとか、依頼を受けてマニュアルをつくらないといけないとか、そういう相談受けるんですけど、ないほうが本人たちも自覚して自分で学んでいって、それでもきちんと伝わっているところを、目の当たりにしてきたので、本人たちもすごいなと思います。5年ぐらいして、第1世代の先ほど話していた渡部くんが、自分たちの熱意込めて作ったゲームの使い方が分からないと言い出して、このゲームのルールを教えてくださいって言いに来たときに、そんなものがあったのかと思うこともあったりして、何となくそういうつながりが生まれているのが面白いなと思っていますし、それがこのメモリアルアクション KOBÉ という活動で、毎年1回ほかの学校さんとかグループと共有していく中で、それがより洗練されていったし、自分たちらしさを見つけていった過程なのかなと思います。

○**大山コーディネーター** 若い世代らしいなと思うのは、何か口伝えみたいなものが詳細に伝わったりとか、マニュアルがあったりとかいうことではなく、伝わってきたゲームをプレイすることによって、それで伝わってきたということなんですね。

○**本塚氏** 今となっては、このゲームの正確なルールって、一応そのマニュアルがついているんですけど、誰も読んでいないし、同じチーム内でもやって

いる人によって全然違うけど、最終的にアウトプットとして伝えたいことは一緒という、何かそういう不思議な状況になっています。それが若い世代のこの取組の一番の魅力なのかなというふうに思います。

○**大山コーディネーター** 私たちではちょっと思いつかないですね。若い人ならではの感性でありますけども。

鈴木先生、今日午前中、先生から話を聞くインタビューの話があって、若い先生は親御さんから話をさらに聞くことになってという話があって、そこから新たな語りが出来たって話ありましたよね。そういった若い世代ならではの取組が最近見えてきた。

○**鈴木氏** やっていることは、きっと先輩から先生にインタビューをするということによって変わってなくて、まとめ方もあのようの手書きで超アナログで1冊しかないという、そういうアナログなやり方をずっと口伝えじゃないけれども、先輩と一緒にインタビュー行って、先輩と後輩と一緒に活動する中で引き継がれていったところだと思うんです。

決して新しいということではなくて、ただインタビューするお相手が震災の御経験がないから、じゃあどういふインタビューをしていこうかっていう彼らなりの工夫の中で、そういう話が引き出せたんじゃないかなと思いますね。

○**大山コーディネーター** 阪神・淡路大震災との距離感。皆さんもちろん生まれていないわけですよね。そこら辺ってどうお感じになりますか。

○**鈴木氏** 私たち、学校の中ではメモアクって呼んでるんですけど、メモアクメンバーといっても環境防災科の生徒なので、決して阪神・淡路大震災のことを知らないわけでもないから、どこかひとごとには思っているわけではないとは思いますが、生のお話を聞くという、難しい話じゃなくてもその人にしか聞けない話を聞くというところが、より自分に引きつけるというところにつながっていくとは思いますが。

○**大山コーディネーター** 聞くことが大事だっていうことなんですか。

○**鈴木氏** まず聞かせていただくというところが、全て伝えて語り継ぐということにつながっていくと思うので。聞くというのがまず第一歩かなと思いますね。

○**大山コーディネーター** 舞子高校は聞くことを大事にされていますよね。

○**鈴木氏** 語り継ぐというのは、このメモアクだけでなく大事な教育活動の一環なので、そこはどの生徒も感じているところだと思います。

○**大山コーディネーター** 高橋先生の明石南高校は途中参加で、メモリアルアクション KOBÉ に新しい風を吹き込んだ注目のグループでございますけれども、彼らの阪神・淡路大震災との距離感はどうですか。

○**高橋氏** 高校で最初にスタートしたときに、実は私、そんな子がいるというのを全然知らなかったんです。総務部というところに配属されて、防災の担当にはなったんですけど、管理職が勝手にボランティア部とか生徒会の担当者に、こんなあるから生徒を出してくれて言ったのが、1回目の淡路での育成合宿だったんです。スライドには女の子5人映っていましたが、それまであの5人全く知らなかった。よい子たちばかりだったので、君ら実はこんなせんとかあかんけどって言うたんやけど、なかなか分からないんです。防災のぼの字も興味がなかった子ばかりなんで。

次の年から1年生に頼んで募集をかけたのが実際の始まりです。ただ、やってきたのは、なんか無口な、おまえできるんかみたいなぼやとした男の子1人やったんです。でも彼がいなかったら今がなかったと思います。

○**大山コーディネーター** どんな活躍をされたんですか。

○**高橋氏** その子の友達とか友達の彼女とかが入ってきて、4人ぐらいになったんですけど、何もできない子たちで、何も分からない。

次の年に割と元気な4人が入ってきたんですけど、防災をやるより、部活も何かあんまり面白くないし何かないか、というて来た子ばかりなんです。

ただ、この子たちが賑やかで、いろんな話をするうちに、へえとか、はあとか言いながら。だから、阪神・淡路大震災との距離も何もない子らやったんです。その辺から上と相談して、きちんと教えていかなあかんなど。その子たちだけに教えてもしょうがないんで、総務部の防災担当やったので、年間2回ずつ、1年から3年まで計6時間、防災のホームルームやらせてくれないかということで。1年生から、その子らがおるうちに、元気な子らに対して。実際に私、阪神・淡路大震災の前に明石南に1回目いましたので、一番奥の校舎と体育館がもうほぼ全壊で、実際全部建て直しているんです。私がおった2回目のときでも、まだその余波といいますか、壁にひびが入っている。壊れかけようから次の地震で落ちるぞって。よう言っていました。

そんな状態なので、そういう話もしながら、工事で取り壊している写真とか、3年生の卒業式が何と体育

館が使えないので、市民体育館でやったと神戸新聞で出ていたその記事見つけてきて見せたりして。ずっとやる中で、ちょっとずつ関心が向いてきた。課題研究というのがあるんですけど、総合学科なので。そこで阪神・淡路大震災のことに取り組んだ。全然その防災授業に関係ない子が。聞いたらお父さん、お母さんが被災したんです。

そういう中で、少しずつ、先ほど松岡が言っていたけども、活動すると結構いろんな話をしてくれるんですよ。家が燃えて、これはもうどうしようもない。体育館行ったらもう寝床もなかったという話をしてくださる方がたくさんいて、だんだん、その活動を通じて距離が狭まってきたといった感じになりました。

○**大山コーディネーター** 明石南高校の取組が始まったこの一連のグループの皆さんは、とにかく楽しくやるということがありますが、それはどういうところから出てくるんでしょう。

○**高橋氏** 先ほども言いましたように、何も意識のない子らなんです。そこで難しい話をしたら辞めるいうて出ていくに決まってるんです。だからせっかく集まって逃したらあかん思って、わざと楽しいこと、スライドにもありましたが、廃油と空き缶でランプ作れへんか言うたら作る作るというて、トイレ作れへんか言うたら作る作るというて。あのダンボールのトイレ1個作るのに2時間ぐらいかかったんです。ああでもない、こうでもないと言いながら。喜んでいました。その後に入ってきた子らが、今度は自分らで何か作る、作りたいうて言い出したのが、あのゲームにつながってくるんです。

○**大山コーディネーター** 牧先生、このTEAM-3Aとか彦根東高校新聞部など、途中の新規参加もかなり多くなりましたよね。そういった新規参加のグループが、このメモリアルアクション KOBÉ に与えた影響というのはどうですか。

○**牧氏** 一言で言うと気抜けへんなど。先ほど先生がおっしゃったみたいだけど、メモアクで頑張っているやん、これはよできるチームやと思ってるけど、ほかから新しいの入ってくると、おいおい、大分ええやないかというので、すごくいい刺激になりましたし、その頃からお互いのそういう活動を共有しませんかと。お互いこんなことやっている、知らん子たちがいっぱいいるんやから、そういう子と知り合うのもいいよなという、そういうことも気がついたということがあったと思います。

○**大山コーディネーター** 交流するという話が結構聞こ

えるようになりました。

ただ、この若い世代が震災の教訓を伝える仕組みづくりというお話だったんですけども、課題と感じるところもあると思うんですが。本塚先生、どんなところが課題と、この10年で感じになりましたか。

- 本塚氏** メモリアルアクション KOBE に参加させてもらって、何度も失敗の経験も話させてもらっているんですけど、例えば2代目の学生たちは地域に出て行って、行政からの補助金を受けて、感震ブレイカーの設置を要配慮者の家に自分たちでブレイカーの形が違うから、高専生の技術をもって既製品をつけていったら、役に立つんじゃないかっていつけて回ったら、施工が甘くて普通に落ちて、要配慮者の人は普通にブレイカーを上げられなくなって、自分とこだけ停電するという、今じゃ考えられないことを起こしているんです。ただ、それを地域の人を受け入れてくれる。学生がやることだから失敗も含めて受け入れてくれて、失敗したとしても地域でまだ活動させてもらえる。そこがやっぱり難しいですし、学生がすることの意味なのかなと思っています。

だから、イベントとかの依頼を受けても、学生がやることなんで失敗はありきですと。だから皆さんが期待する、新聞に載ってすごく高いものができると思っているかもしれませんが、そんな大したものはありませんという相互理解なのかなと思います。

- 大山コーディネーター** 温かく見守るというやつですね。
- 本塚氏** これだけ結構いろんなところで報道されて、何やこれはすごいですって褒められている一方で、裏ではいっぱい失敗して、それを地域の人たちにうまくフォローしていただいて育てていただいているというような状況かなと。
- 大山コーディネーター** 地域連携をしたということが、地域との交流、信頼づくりになっていますよね。
- 本塚氏** よく学生に言うのが、被災地にボランティアに行くのもいいんですが、自分たちの住んでいる地域に足を運んで、その人たちに怒られて、一緒に頭を悩ませて、その地域に参加させてもらっている中で、今回は自分たちのチームなんで、主催で防災ゲームをさせてもらいます。次回は皆さんの主催の秋祭りの警備のお手伝いしますでいいんじゃないかなと。そういう関係づくりというのが、うまく行きつつ失敗も繰り返しているようなところなのかなと。
- 大山コーディネーター** 舞子高校、鈴木先生はどうですか。課題と感じられていることは。

- 鈴木氏** 今、本塚先生のお話聞いていて、地域というのがキーワードで出てきたと思うんですね。きっと高橋先生もフィールドは地域でいろいろ活動されているんですけど、じゃあ舞子高校が地域をフィールドにしてメモリアルチームが活動できているかといったら、そうじゃないなと思っていて、結構伝えたい相手というのは自分の同級生だとか、インタビュー対象の学校の先生だとか、割と舞子の中で完結しているなというのは、お二人のお話聞いていて、地域という視点が欠けているなって。

今、地域っていうところをフィールドにして、これから活動していかないといけないなと、お話聞いていて思いました。

- 河田氏** こういう活動ってここだけやっているんじゃないんです。もう20年、「ぼうさい甲子園」というのをやっていて、これは、非常に大規模になっているんですけど、まさに今、御紹介いただいたように、学校と地域がどうつながっているかというのがポイントになっているんです。

だから、こういう災害メモリアルアクションの活動だけじゃなくて、これが発端になって、国的にそういう防災教育が、非常に見直されている、どんどん変わってきているんです。だから、ここの活動だけがどうかというよりも、30年間やってきて、日本の防災教育の中身も随分変わってきているというのに、つながっているということも僕は高く評価しないと。単に1年に1回ここに集まって、それを成功させるためにそれぞれところで努力しているというレベルで評価してはいけないと思うんです。

- 大山コーディネーター** 高橋先生、明石南高校の皆さんとかはすごく活躍してましたけれども、課題も感じられるところもありますよね。
- 高橋氏** 今一番思っているのが、よく新聞の記事とかニュースでも、地域で若い人がどうのこうのってあるんですけど、じゃあその子たちが本当に将来的に地域に残って、南海トラフ地震とか、大きな災害があったときに活躍してくれる人材になれるんだろうかという一つ疑問があるんです。

というのは、私が今まで活動に参加してもらっていた高校生、大学生は基本的に自分たちの発想でやってきたんです。もちろんスタートはこれやって、はいやります、こんな手伝うて、はい手伝いますで入ったんですけど。途中からは、ちょっとこんなやらせてもらえませんかということで、それをやっているうちに自分たちの自信がつかますし、今まで50人ぐらいが

集立っているんですけど、その50人が生まれ育ったところに戻ってきて活躍しているかどうかという自信はありません。けれども、何かのときに、ぱっとひらめいて、気になって戻ってくる子は絶対おるなと思うんです。そういうのを、地域の力で一緒に育てていただけるようなことをしていかないと。学校とか特定の個人が幾ら頑張っても駄目だなというのがあって、去年から明石市の担当部局とか、コープこうべさんが結構支えてくれているんですけども、社協さんとかと連携して、できるだけ自治会とかに呼びかけて、地域の中で、地域の力で育ててもらえませんかということをやっていると続けているんです。

○**大山コーディネーター** 矢守先生、地域の力で若い人たちの力を引き出すというんですかね、広げていくという取組ってやっぱり重要ですね。

○**矢守氏** 自分もそういう考えに則ってあちこちの地域で、学校と地域のおじいちゃんおばあちゃんといろんな活動してきましたので、本当に大事だと思います。

あと、それにちなんでですけど、高橋先生がさっきおっしゃったことの中で、あと本塚先生もおっしゃいましたけど、今日、距離感というのはちょっとキーワードで出ていたんです。高橋先生が、この子何も知らんとか、何も意識なかったんですっておっしゃったんですけど、それが大事だったんだと思うんですね。つまり、これを知ってからじゃないと、何か防災のことをやっちゃいけないとか、阪神・淡路のことを考えちゃいけないってやるから、距離感ができるんであって、距離感を何かつくっているのはこっちだということです。それは全然ゼロで、白紙でボンと臨んでくださった皆さんには、これあんまり距離感なかったんやなと思いました。

○**大山コーディネーター** むしろそれがよかったと。

○**矢守氏** もちろんいきなりブレーカーが落ちるとか、そんなことは起こるんですけど、でもそれが大事だったんだなって、今気づかされました。

○**大山コーディネーター** まさしく牧先生、この後にも出てきますけれども、今のお話というのが、この10年での気づきの1つでしたね。

○**牧氏** そうですね。だからさっき3代目としては、語り継がなあかん、語り継がなあかんのやと思っていた、それが要するに重いと。今日、午前中の彦根東の御発表の中でも、風化するっていうのでいいじゃないというお話がありましたけれども、その壁を越えたこの20年目から30年目やったのかなと。

だから、「KOBEのことば」ということをずっとタ



イトルに銘打っていて、本当に「KOBEのことば」という私たちのイメージは臼井先生の話を知るとか、被災した人の話を聞くやっただんですけど、そうじゃないんやと。逆に言うと今、気づかされたのは、そこに距離をつくってしまっていたのかなと思います。

○**大山コーディネーター** この10年の活動、特に教育現場の視点で御覧になったからこそ言える次のキーワードのヒントみたいなことをお話しただけならと思うんですが。本塚先生いかがですか。

○**本塚氏** 難しいですね。

○**大山コーディネーター** これまでのキーワードでも、楽しむとかもうさんざん明石高専で出てきていますよね。

○**本塚氏** 明石高専としては楽しむですし、OBなんかと私が言っているのはキリンというのを1つキーワードにしているんです。キリンというのが明石高専の代表作の「RESQ」っていうゲームのカードの中に、ホイッスルを吹いたら動物を呼べるという効果があるんですね。それを初めて遊んだ私が、動物呼ぶんなら僕はキリン好きなんで、キリン呼びますとってゲームを破綻させたんです。でもそれから何となくゲーム作るときにキリンの要素を入れよう。だから完全にオリジナルじゃなくてファンタジー要素、そういう教えるサイドとしては、きちんと取り組んでもらいたいし、しっかりするというのを指導するんですけど、それが明石高専というキリンなんです。そういうのがあることが、自分ごととして取り組めるきっかけになっているのかな。

○**大山コーディネーター** 鈴木先生、いかがでしょうか。

○**鈴木氏** 本当、難しいですよ。でも、こうやって私たち教師って基本自分が得意なことを常に教える立場で、答えが分かっている、分かっているのに質問するという、ちょっと意地悪なところもありますけど、こうやって分からないことをポンって出したときに、一

生懸命一緒に考えてやるのが大事なのかなって思いますね。私もそうやし、一緒に考えてやるというか。

どうしても、活動しているところ見たら、何でもっと早くやらへんのやとか、何やねんともう本当にピャッと何でも口も手も出したくなるんですけど、本当にここでぐっところえるだけの、こっちの胆力というか、それも要るかなって思いますね。

○**大山コーディネーター** この胆力に関して、牧先生、この10年、割とぎゅっと抑えたところもありましたよね。胆力というか、何でもかんでも答えを言わないというんでしょうか。かなり自主性に任せて、彼らに自由に考えてもらうというところですか。

○**牧氏** そうなんです。まさに、いつも企画の中では、こっち側が片づけて、私たちの考えたこの夢を、生徒に実現していただきたいということを思って、いつも押し込んで、いつも安富先生に、そんなことできるか、おまえて怒られるんです。ですが、それがすごくよかったです。胆力というか私たちが思っていることを押しつけるのではなくて、そこから生まれてくることで学ぶということがすごく多かったような気がします。

○**大山コーディネーター** それも10年の1つの気づきでありましたね。

高橋先生、いかがでしょうか。

○**高橋氏** さっきの話に戻りますけど、何か難しいこと、こややってやろうという気負いとか、そういうものは捨てていかなあかんのかなという気がします。実際、私はそこからスタートしたんです。何も分かってない子らやし、阪神・淡路大震災のこと何か言うてみ、言うても何も出てこないんですよ。せいぜい1月17日なんですよ。何時やと言うたら、6時やら7時やいろいろ出てくる。小学校や中学校で習ったんちゃうかというようなレベルの子ばかりやったんです。だから、そこからスタートしていたので、いきなりこんなのって出しても絶対駄目やっていうのは分かっていたんです。だから、低いいうたら言い方悪いですけど、下のほうからこう掘って行って、それで外に出て、ちょっとずつ積み上げていくみたいなことしかやっていなかった。それで、自然に自分らで考えるようになっていたというのがあったので、私としては今までどおり、そういうスタンスでやっていくのが一番かなと思います。今、全員で集まってというようなことはなくて、LINEとか、そういうものを使ってしかやり取りできませんので、余計かなと。

○**大山コーディネーター** 10年で得たその気づきと、この先しばらくはその発想も生きていくんじゃないかな

という感じですね。

ここまで教育現場の皆さんからの視点から、お話を伺いましたけども、河田先生、何か感想はありますか。

○**河田氏** まず、能登半島の地震が起こって1年たつんだけど、この1年間、地元の防災教育というものがどうなっているかなんていうのは全くメディアに取り上げられていないんです。避難所がどうだったとか。つまり30年前と変わらないということです。さっきの歌じゃないけど、あの歌を聞いた途端に涙出てくるでしょう。だけど、涙出てこない地域があるんです。これ、どうするんだって。南海トラフ地震が起こったら6,100万人が被災者になる。国民の2人に1人です。そんな状態が地域間で、例えば防災教育の格差が、結局被害にレスポンスするんで、これを放っておいたら駄目なんで。そこはこういう組織から出していかないと、放っておいたら駄目です。

もちろん、高校生とか高専生とか大学生が成長するプロセスってとても大事なんだけど、それを待っておれるところと、待っておれないところがあるというその切迫感をこの会で伝えないと。悠長なことをやっていたら日本潰れちゃうぞと僕は言っているわけです。

○**大山コーディネーター** その切迫感をどう伝えていくかというのは、私たちの知恵の絞りどころだなと。それもこの30年以降の1つの視点にもなってくると思いました。

ここまで本塚先生、鈴木先生、高橋先生、どうもありがとうございました。

パート3：この10年 成果物のとりまとめから見えてくるものとは？

○**大山コーディネーター** 続いてはこの10年、成果物の取りまとめから見えてくるものは何だろうということ、皆さんと一緒に確認してまいりたいと思います。

先ほどお話ありましたG K京都からト部さん、そして伊藤さんに御登壇いただきます。お願いします。

災害メモリアルアクション KOBE では、この10年の活動の成果を取りまとめるための作業を実施してきました。成果物として今後発表することになっているんですが、その中心となっているのが、ト部さんと伊藤さんです。

この10年の活動の成果を取りまとめるための作業が、昨年の秋、2回にわたってG K京都で行われました。

これがその様子ですね。皆さんこのように、一生懸命



命、真剣に様々な議論をしています。大きなこの壁に、縦軸が年代で、横軸がそれぞれの各グループの時代ごと、その年ごとのプロダクトを並べて、そこから見えてくるものを検討しています。

ト部さん、この成果物の検討について、まずお話しいただけますか。

○ト部氏 GK京都はデザイン事務所でございます。河田先生からも紹介いただきましたけど、最初のメモリアル・コンファレンス・イン神戸のロゴマークとかレポート、その辺をお手伝いさせていただいたところから30年です。当時は25歳でした。



取りまとめの冒頭はせっかくなんで、一緒に動いている伊藤さんのほうからお願いしたいと思います。

○大山コーディネーター 今、このように、プロダクト、ことば、グラフィックレコード、という様々なものが積み上がっていますけども。

○伊藤氏 各年度で出している災害メモリアルアクションの報告書というものがあるんですけども、そちらにまとめられている、各参加されている団体さんの成果物のページと報告書の後ろにある各回の言葉ですね。印象的だった言葉というところがまとめられているページと、今書いていただいているグラフィックレコードのページがあります。そちらをばらばらに一旦出力をしまして、それを一覧で見られるように整理を行っていきました。



1回目は10月頃、皆さんが出されたプロダクトと団体というのを先ほど言うように縦軸・横軸という形で整理したということです。

そこに加えて、それぞれのプロダクトにどういう人たちが関わっていたかということも併せて彫り出していきました。



2回目は12月にあったんですけども、そちらではその横軸・縦軸のところに加えて、それぞれ出てきた言葉をさらに整理していったという流れでやっております。

○大山コーディネーター ということで、今こういう形で見えてきたところですね。

○ト部氏 じゃあ私がここから説明しましょう。

まず、先ほど大山さんから御紹介いただきましたように、縦のずっと並んでいるのが各組織やチーム、その方々が1年目からずっとやってこられたことで、それを引いて見てみたら、大きく4つに分かれるよねということが分かりました。

牧先生も、この壇上でおっしゃっていましたが、最初の3年ぐらいは、皆さんが模索しながら、うちは何をやる、これをやるというのがいろいろ出てきます。そういった中で、それぞれの団体さんのやりたいこととか、やっていきたいことというのをずっと見ていくのに、3年ぐらいかかった。

そして、2019年あたりから、これも先ほど牧先生からもおっしゃられましたが、「KOBEのことば」からちょっと離れようというのが、皆さんの活動の中から垣間見える。神戸を引きずるということだけではなくて、もっとワイドにやっていくというのがよく見えた。神戸にとどまらない。ここからは神戸という言葉ではなくて、大震災を伝える、つながっていくんだみたいな時間になった。

2020年にコロナがありまして、これによって、こういう集まりができなくなったから、それによって社会も大分コミュニケーションのやり方が進みましたが、オンラインでやろうと、それによって動画であったりとかやり方も広がったと思うんです。それがこのアク

ションの中で大きかったということで、社会も変わったよねと。

それで、そろそろ取りまとめないといけないということで、やっとテーマを決めまして、「聴く」「創る」「報せる」というのを3年やってみましょうということで動いたのかなというのが、このメモリアルアクションを検証した形になります。

それで、この10年で生み出されたものとして見えてきたのは、もの、ことば。1つ前の10年でもう随分出てきたんですが、新しい人がどんどん出てきた。人と人とのつながりであったりとか、学生さんなどで3年から5年とかで、人が入れ替わっていくという中でも、10年続いているというのは、3代とか3.5代みたいな形になってきて、そのつながっていく感じて非常に面白いし、特徴的だということ。都度都度、壇上で話していただく方とか協力しているチームの人とか、人が出来上がってきている感じで、若い被災者の方々の中で新たな人がどんどん出てきている。人、物も新聞もあればゲームもある、それも何種類もある。それからインタビューもあれば防災読本もあるということで、もうメディアも非常に多様です。

それから、言葉ですね。さっき伊藤さんが説明してくれたとおりですが、グラフィックレコーディングの中でも、言葉を常に拾っていただいているので、既に編集が入っていい言葉は残っている。この3つが出たとまず思います。

それをさらに分析をかけたのがこのページになるんですが。ちょうどこの私の後ろあたりに手書きでウワッと書いてあるのが、これって結局こういうことだねっていうのを、さらに近いものを集めたり、それに対してのタイトルを決めたり、これはよくあるデザインプロセスなんですけど、コンセプトを絞っていつているんです。

ざっくりですが、まず、聴く、報せるという取組からは、やってみてこれが伝わった、伝えるってこういうこと、それで、聴くってこういうことというのが、皆さんの経験が見えたような気がする。

創るという行為からは、新しい世代の方々、何でこれをやっているんだみたいなモチベーションとか、あと、何度も出てきている、それやるのがとにかく楽しいというようなこと。あと、みんながいるチームがある、こういう場がある、クラブがある、そういう被災者の方の原動力、そういうものが見えてきた。

それで、旧世代は後世を死なせないために、生きて楽しいことができるようになってほしいなという思

い。これは多分、河田先生が最後の締めるときに言っている。それもしっかり拾われています。いつも言っているのが、もっと勉強して、もっと知って、もっと周りのみんなにも広げてほしいという、そのためにやっとなねん。そういうことをおっしゃっていたので、そうかなと。

ここにいつもの吹き出しのデザインで抜いていっているのは、これがいいという意味ではないです。もっとあります。代表例として幾つか並べさせていただいて、教訓は大事にしてきたんですが、それも全てじゃないし限界がある。上から聞いたことじゃなくて、周りから聞いたことでなくて、自分が知ることが大事じゃないみたいなことを、我々がじゃなくて、皆さんがこの会場で言っていたらいいというのを大事に集めていつています。

最後、これはまだイメージなんですけど、そういう皆さんのどういう人がこの10年いて、どういうものができて、どういう思いを持っていたのかを、新芽として捉えて、アクショングラフィティーということでちょっと引いて、全体が見えるような図を作ってみたらどうでしょうと。

このまま行くと限らないです。実際こうならないかもしれないけど、でもそこから、この人たちはメディアも違うし人も違うけど、これを狙ってたんだなみたいなことが見えてくるようなのが幾つか出ればいい。アクションをやった結果になるかなと思って、こういうのも考えてみてください。

そういう意味では、今ここにはいらっしやらない10年前の先輩、渡部さんという言葉が出て、多田君は多分言ったらすぐ来てくれると思うんですけど、前やっていたときと今と何が違うんみたいなインタビューを撮ってみたり。その心の変化みたいなものも集めて、皆さんの手に取れる、こういったメディアとして10年



をまとめておくということは、とても意味があるかなと思っています。

○**大山コーディネーター** 牧先生、取りまとめ作業も入られておりましたけれども、牧先生はどのように御覧になりましたか。

○**牧氏** この10年振り返ってみて、全然やっているときには気づかなかったんですけども、こうやって引いてみると、非常にシステムティックに論理的に動いていて、我々いつも言いますけどフロントランナーですから、こういうふうな形でやっていけばいいんだよというのが伝えられるような、そういう仕組みができてきた。そういうプロダクトができてきているのかなと思いましたのと、一番の今回の気づきであり、これが30年続いた1つの鍵は、ある段階で神戸だけ、「KOBEのこぼれ」を捨てたとは言いませんけども、神戸の教訓だけにこだわらなかったというのが、実は若い世代の方が続いてきていただけたのかなと、非常に私個人としては思っておりまして、ずっとおまえら絶対神戸や言うたら、やってられるかいと言われたような気がすごかったです。

○**大山コーディネーター** 先ほどの教育の視点でも、それを言うことによって距離感がかえって生まれてきたというお話もありました。まさしくそういったところがつながってきたというのを思いますけども、河田先生は、これをお聞きになってどうですか。

○**河田氏** また裏話になるんですけど、1回目からこういうまとめをG K京都にやっていただいて、ト部さんはとても才能のある方なんで、僕たちが意図する以上のことを出版物でやっていただいた。ずっとやってきたのが途中で県がもっと安いところに発注しろと言い出したんです。もう話にならないので、僕は科学研究費でこのメモリアル・コンファレンスの運営費を要求したら、文部科学省は問題ないんです。レベルの高いことをやるのに当然経費も高くなる。だから認めてくれたわけ。だから、みんな政府が悪いと思っているけど違うんです。自治体のほうがもっと悪い。

○**ト部氏** G K京都は決して高い会社ではありませんということをお願いします。

○**大山コーディネーター** 矢守先生、一連の取りまとめについて何か。

○**矢守氏** さっきのお話と、あと牧先生がさっき言われたこととも併せて、メモリアルという言葉、この言葉だけは3世代全部共通しているんです。ここから先は全然英語学的には正しくないんですけど、メモリアルって言葉は、さっき気づいたんですけど、これ分解



すると、「メモ」と「リアル」と分かれる。

メモのところ、今日まとめていただいているようなグラフィックレコードとか記録です。神戸の記憶とか記録を牧先生も言われたように、完全に忘れるということじゃなくて、横にちゃんとメモとして置いておいて、しかももう一方で、若い方中心に、今、リアルなこの場面で楽しいとか、あるいは新しいものを付け加えられるとか、自分の思い入れを持って活動できるということが組み合わせないと、そのメモの部分というのも、いつしか死んでいってしまうので、そういう意味でこのメモリアルという言葉は、日本語になったメモリアルですが、そういう意味なんだろうなと、さっき気づきました。これ多分グラレコに残るかなと思って。残してください。お願いします。

○**大山コーディネーター** ここまで成果物の取りまとめをしてきましたけど、最終的にはト部さん、どういう形の成果物になりそうですか。

○**ト部氏** まだ分かりませんが、紙媒体というのは何らかの形で残して、こういうふうに関いたりこの場で渡したり、さっきの新聞と一緒にですね、即効性があるんで作るかなと思っています。また、インタビューを行ったり、ゲームも実際にこうやっているというのが動画で見れたほうが多分伝わりやすいので、今回はマルチメディアみたいなものもできたらいいんじゃないかなとは思っています。

○**大山コーディネーター** 今回、10年の成果の検証を経て、今後のキーワードにつながるような発見というのはいかがでしょうか。

○**ト部氏** 30年のロゴが全部並んでいるページがあったと思うんです。これ、一番最初ってジグソーパズルの神戸なんです。臼井先生のお話を伺っていて、ものすごく同じような感覚で捉えていまして、僕も木造の2階建てで2階にいました。臼井先生は天井を階段が突き破ったということでしたけど、僕は2階の壁が滑り



落ちて、おやじの車の上で止まって助かった人間です。そういう意味で、ばらばらになってしまった神戸。地層が7層あるんです。河田先生から分科会は7つあると聞いた。それでいろんな人間がしゃべって、これからやっていくんやということ聞いたのがコンセプトなんです。だから7つの積層のジグソーパズルが、まさにまろうとしているということ、これは描いています。

次の10年は、これは語り合いということで、そういう場を描いています。だから吹き出しが語ろうというデザインになっている。

3代目はクロス。これ十字架なんですけど、そういう人がクロスする場で動きが出るという、牧さんがアクションでやりたいとおっしゃったから。

だから委員の先生が、何をコンセプトとしてやりたいかというのが非常に大事なと思って、それをビジュアルとか見て伝わるように描いていく。だからこれ矢印が先にちょっと出ているでしょ。これ本当は、ここに座っていてほしかったGK京都の横山愛子さん、矢守さんの代から長年一緒にやっていっているんですけど、今お子さんができてお休みをしているんですけど、彼女がデザインしてくれたんです。こう動きが出て、新しいものを生み出すという、そういう意味なんです。

そういう意味ではその次ですよ。じゃあ次は何を目標に狙ってコンセプトを立てるかというのは、牧先生の次を担っていく委員の方々が1回議論する。ヒントは僕、動きをやったんで、もうちょっとそれを大きくするとか、さらに、輪が広がるとか、何か非常にビジュアルチックな言い方で申し訳ないですが、そんなんかもしれない。

でもそれは僕が思っているだけで、皆さんで決めていただければいいかなと思います。

- 大山コーディネーター** 伊藤さん、何かありますか。今回、成果物の取りまとめ、次のキーワードにつなが

るんじゃないかというような。

- 伊藤氏** こんなト部さんが立派なお話をした後で言うのは何ですが、私も本当に横山さんの代打というかつながらで、つい最近入らせていただいて、このメモリアルアクションに参加しているんですけど、こういう脈々と受け継がれてきたもので、今30年目でそのアクションがいろいろ出てきたよというところで、次はそのアクションが行った先、それぞれで波及していく、さっき広がりって言いましたけど、波紋のように広がるみたいなイメージとかが何となく私の頭の中ではあるんですけど、それも次の委員、次の40年の委員の方々とお話をしながらビジュアライズしていくのかなというふうに思っております。

- 大山コーディネーター** ありがとうございます。次のパートへの引渡しも意識してお話いただきまして、ありがとうございました。

GK京都のト部さんと伊藤さんでした。

パート4：この先の10年・「アクション」の次は？

- 大山コーディネーター** さあ、次はですね、いよいよ最終のパートです。これまでのお話を踏まえて、この先の10年のキーワードを探ります。

関西大学社会安全学部の奥村先生、そして京都大学防災研究所の中野先生に御登壇いただきます。よろしくお願いします。

この先の10年、アクションの次は何なのかということでもありますけれども、まずこれまでの議論を聞かれて、感想から伺ってまいります。

中野先生、いかがでしょうか。

- 中野氏** メモリアルアクションKOBECの感想とか、本日の感想というよりは、非常に感慨深く感じていました。というのは、私自身、



舞子高校環境防災科の2期生で2003年に高校に入学して、生徒をしていたわけなんですけども、そのときから、もちろん河田先生、矢守先生、牧先生のことを存じ上げていて、そこから20年たって、この次の10年を考える場に立っているということにすごい感慨深さを感じましたし、ちょうど災害メモリアルのとき、2008年か7年ぐらいだったと思うんですけども、そのときも私はこのイベントに、大学生のときに登壇者として出させていただいてお話をする機会があったので、そうしたイベントに、今、委員として関わっている。そういうメモリアルイベントの長い歴史の一端に関わって、

これから引き継いでいかなければいけないんだということに、すごく感慨深さを持っているという感想です。

○**大山コーディネーター** 中野先生自体がメモリアル的成果物みたいなもんなんです。

○**中野氏** そう思っていたけると嬉しいです。

○**大山コーディネーター** 奥村先生、これまでのお話の感想、いかがでしょうか。

○**奥村氏** 私は阪神・淡路大震災のときは中学2年生で、京都に住んでおりましたので、全くと言っていいぐらいに、小・中学生にとつては京都から神戸というのは遠いんですね。ですから、我が事と思って向き合ったことは当時はなかった。飼っていた犬がオシッコこぼしたぐらいで、特に大きな被害はなかったんです。



けれども、2003年に人と防災未来センターが始まった年に河田研究室の4年生の学生として河田先生と出会った。私は別に防災やりたいと思って河田先生のところに行ったわけではなく、友達についてきてくれと言われたから、嫌だな、面倒くさいなと思ったけど、嫌な友達ではなかったからついて行った。河田先生の話聞いて防災をやりたいとはこれっぽっちも思わなかったんですが、河田先生の生き方、いろいろなお話を聞いていてかっこいいなと思ったんです。それを私はどう受け止めて、自分の生き方に反映させていこうかなというのを考え始めたのが、今から20数年前のことなんです。

今日、白井先生のお話を聞いていて、あるいはト部さんのお話を聞いていて、生きるか死ぬかというような大変な思いをされて、その後その思いを秘めながらここまで生きてこられたその熱いものに触れて、河田先生に感じたものと同じようなものを今日は感じる事ができたと思っています。

この後、これからのことについて、いろいろ話があると思うんですけど、今日午前中、多くの学生さんたちの発表を聞いていて、その背中を見て自分たちもまねをしたいと思っているもっと下の世代が出てきているというのは、私が河田先生の背中を見ながらこれまで数十年生きてきたのと同じようなことが、次の世代でも起こっているんだなということを感じたというのが今日の私の受け止めです。

○**大山コーディネーター** というわけで、いよいよこの先10年のキーワードということで、画用紙を壇上に上げていただきまして、そしてマジックと画用紙を皆さんにお渡しいたします。ここにこの先10年のキーワー

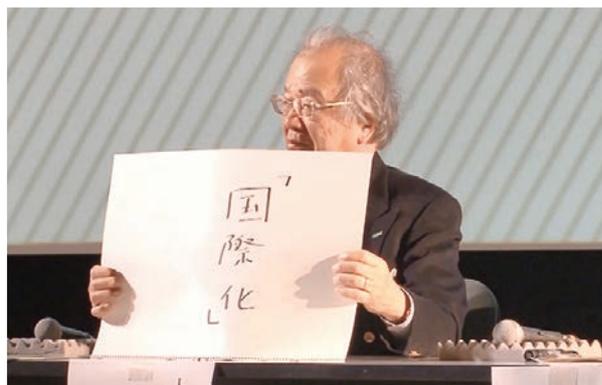
ドと思われるフレーズをお書きになって、一人一人伺ってまいりたいと思います。その理由も併せてお話しさせていただきます。

キーワードですね。メモリアル何とか何でもいいですし、全く別物でも構いません。あるいは、こういうコンセプトが大事だということで、そういうワードを挙げていただいても結構です。

10年までがメモリアル・コンファレンス・イン神戸、20年までが災害メモリアル KOBÉ、そして30年までが災害メモリアルアクション KOBÉ というキーワードでありました。もう河田先生、よろしいですか。じゃあ河田先生からお願いします。

では、開けてください。「国際化」ですか。

○**河田氏** 皆様、御承知のように、気候変動で世界各国で大きな災害が今起こり始めているんです。今まで起こってきたところは何らかの防災対策はできるんですけども、今まで災害が起こったことがないところで大きな災害が起こることは考えておかないといけない。例えばパリのセーヌ川とか、ロンドンのテムズ川というのは、ここ最近あふれたことないんです。あふれたらどうなるかと考えたら、東京とか大阪の被害の比じゃないです。起こったことがない。しかも防災というのは必ず起こってからやるという流れになっているので、未然に被害を少なくするという事は、今までの歴史にないんです。これじゃあ困るわけで、今、実は南海トラフ地震だけ心配だけど、阪神大震災の後、みんな南海トラフ心配して何とかせないかんと思っているんじゃない。こんな国、日本だけだ。ほかの国は絶対そんなこと思ってない。だから起こってからじゃ遅いんで、阪神大震災の教訓というのは、起こったらどうしようもないということ。だから起こる前に被害を少なくしなきゃいけない。そうするとこのメモリアル・コンファレンス・イン神戸から始まった30年。このほとんどの情報は日本国内に向けてしか発信してい



ないんです。阪神大震災で世界各国からものすごく御支援いただいているわけ。その御恩返しを実はやっていないんです。国内だけやっている。

ですから、これから大きな災害が世界各国で起ころうとしているここにおいて、日本のこの姿勢を海外で使っていただきたい。つまり、起こってからじゃ駄目だっていう、そういうことを実行していただきたい。

皆さん、ウクライナの戦争とかイスラエルの問題とか、そういう問題はメディアがどんどん伝えてくれるから関心高いんだけど、地球温暖化ってもう避けられないんです。もっと大きな災害が、今まで起こったことのないところで起こるとなったら、阪神・淡路大震災ぐらいの被害には収まらないんです。そこを私たち先取りしなきゃいけない。

ですから、これからの10年というのを、この活動をもっと世界に対して貢献するということをやっていたきたいと思うんです。

実は、人防では2年前から防災絵本100年計画というのを始めていて、100年間で500冊の絵本を出版する。これは、日本語だけじゃないんです。英語、フランス語、いろんな言葉に訳して少なくとも500冊出す。これで母親から子供に対する語り継ぎのようなものを普及させたいと。そういう今、出発点になっていると僕は思っていますので、よろしくお願いします。

○**大山コーディネーター** 若い世代への非常に大きな期待。そして1つのこれはヒントです。大きなヒントをいただきました。

では、矢守先生、お願いします。出していただきましょう。「君」。

○**矢守氏** あなたという意味の「君」という言葉です。これはさっきの2曲目の歌、「群青」に触発されて、今の河田先生のお言葉も少しお借りしますと「君」。皆さんにとって「君」って呼ぶ、あるいは呼びたい人っていらっしゃると思うんですけど。その人が亡くなっ

たときのことを、あの歌は歌っていました。でもそれからでは戻ってこないの、自分にとっての「君」はどういう人かな。それから、その人を守るために何をしなければいけないのかなという、原点っちゃ原点なんですけど、それをもう一回、30年目から戻って考えたらどうかという意味が、この「君」という言葉です。

ちなみに僕は10回に1回ぐらい、河田先生に「君ね」、あのシンポジウム聞かなかったのかとか言われるんです。この「君」とは違う意味かもしれませんが。

○**大山コーディネーター** ありがとうございます。では、牧先生、お願いします。

○**牧氏** 私は「場」。私がこの会に参加させていただいたのは、私だけが98年に神戸で仕事を得まして、それからずっとこのメモリアルという活動には参加をさせていただいて、この10年、自分でこの「場」を維持させて、させられたらおかしいけど、しないといけなかったんですけども。私も河田先生にお教えいただいたさっきの建築学会などのお金を集めるというのを今年1回やってみました。この「場」を維持し続けることは年寄りにとっては大変重要な役目なんだろうな。アイデアというのは実は私はあんまりよく分からなくて。でも、この10年何とか頑張ってくると、先ほどト部さんがお示しになられたような大変すばらしい人、それから気づきというのを得られましたので、この「場」を維持していくということが大変重要なんだろうと。中野先生は、私はここの「場」でつくられましたと言いましたが、そのうちに、今日お座りの方があの「場」、私は、今後維持していきたいということ、人ができてくるということが重要なのかなと思います。

それから、ちっちゃいほうで「定番化」と書いたのは、これを次にされる方々にこの「定番化」、これが見つかったら大変すばらしいことで、今回は「聴く」創



る「報せる」というのを見つけるのに6年かかっているわけです。これはその時代の流れの中で生まれてくることでしょけれど、こういう定番化を最後見つけるようなことを目指した「場」を維持していくということが大変重要だと思いました。

○**大山コーディネーター** ありがとうございます。では、奥村先生お願いします。

○**奥村氏** 全くコーディネーターの指示に従わず、キーワードじゃないんですけど。まず1つ目の言葉は「時代の壁を越えられるもの」。これは、今日臼井先生の言葉から出てきたことです。もう一つは「花や実をつけさせる」と書かせていただきました。

まず1つ目のこの「時代の壁を越えられるもの」ということを書いた思いを、話をさせていただきたいんですけども、歌は時代を超える、そういう力があるんだというお話をされていて、私は20数年前、河田先生の生き方を見てすごいな、カッコいいなと思ったんで。時代の壁を越えることができる何かを生み出せる人はすごいなと、自分の頭の中の言葉を今日置き換えました。

歌だけではなく、私たち研究者がやっている知識も、一瞬で消える知識もあれば、何十年、何百年と残る知識もあるんです。

今日、私の研究室の学生は、研究成果として生み出された知識を一生懸命発表してくれていましたが、高校生の中には自分たちで一生懸命作ったゲーム、劇、紙芝居、そして新聞記事であるとか、いろんなものを紹介してくれていましたけれども、私の価値観を押しつける気はさらさらないんですが、時代を超える力のあるものを残すってカッコよくないですか。皆さんもそういうものを残せる、何かそんな生き方ができたら、自分の人生いいなって思ってくれる人が出てくれればいいなと思うんです。

河田先生は、阪神・淡路大震災のときに、自分がやっ

てきたことは何にも役に立たなかった、愕然としたとおっしゃってたんです。そういうことを二度と繰り返してはいけないと思うと、時代を超える、時代の壁を越えられるような力のあるものをこれからどれだけ残していけるか。そういう生き方を自分もやってみたいと思える、別に阪神の言葉とか、神戸の言葉とか、こだわらないんです。たくさんの種があって、そこに水をたくさんやれば、花や実はあるんです。

私、今、自宅でバクチー育てているんです。研究室は南向きで暖かいので、研究室でもバクチー育てているんです。実らない種もいっぱいあるんです。だけど、たくさん種があると、その中から芽吹きたいと思っている意識のある子たちは芽を出すんです。こんな寒いのに。南国の植物ですよ。

そう考えると、この10年間の振り返りを自分の中でやったときに、皆さんは種だと思うし、皆さんの周りにも種はたくさんあると思うんですけども、しっかり水をやって、栄養をやって、次の10年間は、もっともっと花を咲かせたり、実をつけさせられるような「時代の壁を越えられるもの」をつくれる人を生み出していきたいというか、私もそうなりたいし、その仲間になってくれる人がこの中から生まれてきてくれたらいいな。

次の10年間、一言でというか、全然一言でしゃべれないですね。まだまだ私も未熟ですので、3年、4年ぐらい次の活動をやりながら、キーワードを探っていくといいかなと思っています。

○**大山コーディネーター** 中野先生、お願いします。

○**中野氏** 私は「コネクト、新しい阪神・淡路」と書きました。この「コネクト」という言葉は、実は先ほどト部さんがこれまでの10年の検証を2回話し合ったというときの、1回目にも出てきたキーワードでもあるんです。

このメモリアルアクションのパンフレット、これも





ト部さん、おっしゃっていましたが、十字架になっているんです。十字架で矢印が1つついている。

私はこの矢印を2つにするのが次の10年かなと思っています。なぜかという、これ左から右に矢印が伸びていて、これ阪神・淡路の矢印しか伸びていないんです。そこにもう一つの線を持ってくる、その線というのはほかの地域で起きた災害かもしれないし、ほかの地域での様々な防災に関する学びであったりもするかもしれません。新しい何か、もう一つの要素を持ってきて、それを常にコネクトするというのを次の10年試みるのがいいんじゃないかと思っています。

本当は「コネクト」じゃなくて「クロスロード」にしたかったんです。ただ、「クロスロード」だと、既に聞いたことのある、分かる人には分かる、「クロスロード」という有名な防災ゲームを矢守先生が作っておられるので、「クロスロード」にすると何か被るなと思って「コネクト」という言葉にしました。

この「コネクト」という言葉に込めたい思いはたくさんあるんですけども、1つは、いろんな阪神・淡路大震災のことをこれまでやってきて、その教訓って本当に伝わったのかなと思うような出来事って、日本

でも、そして世界でもたくさん起こってるじゃないですか。

それから、阪神・淡路大震災をいい契機にして、いろんな支援が生まれて、神戸からいろんなところに支援に行くと、能登でもそうだし、東日本大震災の被災者もそうだし、神戸から来てくれたんだねということで、すごく身近に感じてくれる、どこかでコネクトする場って必要だと思うんです。

そういう「コネクト」というのを、たくさんつくっていくと、私は原点の阪神・淡路大震災に戻っていきたくて。だからここに新しい阪神・淡路って書いたんですが、1世代目の10年とも、そして2世代、3世代目の、それぞれ10年、10年とも違う、4世代目の阪神・淡路大震災ってこうだったよねという、阪神・淡路大震災のイメージ、像というのを、次の10年で改めてつくり出すというんですかね。

そのときには、例えば、教訓が生かされていないと思っていたんだけど、やっぱり生かされてきた阪神・淡路大震災だったよねと言えることもあるかもしれないし、いやいや、まだまだだねということになるかもしれない。それは分からないんですけども、そういった10年をぜひここにいらっしゃる皆さんも含めて、一緒につくっていただけたらいいかなと思っています。

○**大山コーディネーター** 奥村先生、この先の10年、どのように進めていくというか、あまり奥歯にものが挟まっているような言い方になりますけれども、抱負をお願いします。

○**奥村氏** キーワードは定まらないんですけど、中野先生とこうできたらいいよねみたいなことに関しては結構重複しているところもあって。ですので御賛同いただける方々のそれこそ花を咲かせたり実をつけさせようと思ったらいろんな栄養やらないかんし、2種類だけでは大したもの育たないと思うんです。

ですから、私は河田先生と矢守先生に御指導いただきながら、学生時代勉強してきたんですけども、あまりにも偉大な恩師に御指導いただいた分、自分の力のなさというのもすごく痛感していて、それを補ってくれるものというのは仲間だと思っているので、私の未熟さであったり、中野先生は立派な方ですけど、いろんな皆さんの知恵と、それとさっき実をつけるとか花をつけるって話しましたけれども、ここに高校生とか大学生の方がいると思うんですけど、別に高校生や大学生である間に花咲かせなくたっていいんですよ。この災害メモリアルアクションのここでの参加した経験を踏まえて、その後社会人になって、どこかで実つ

けてくれるかもしれないんです。

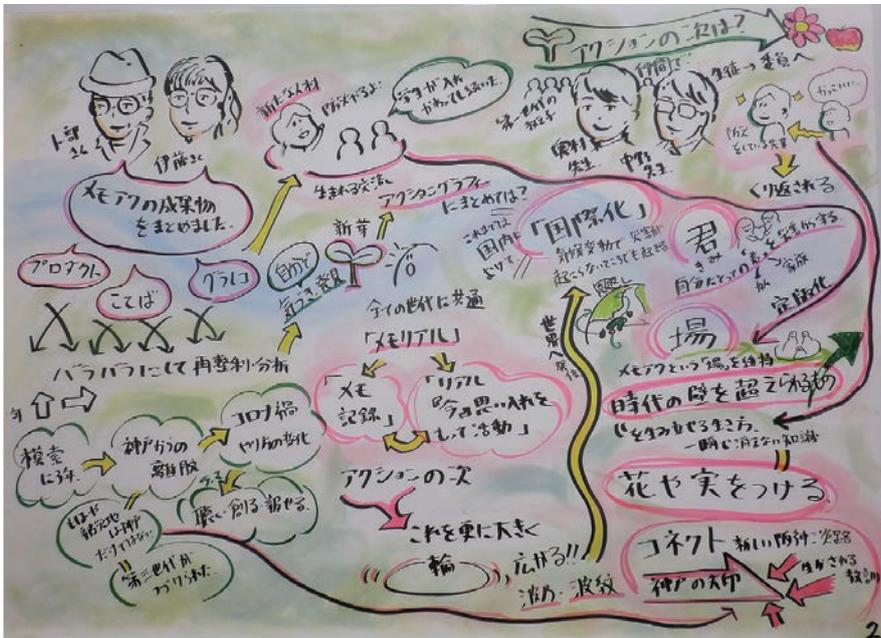
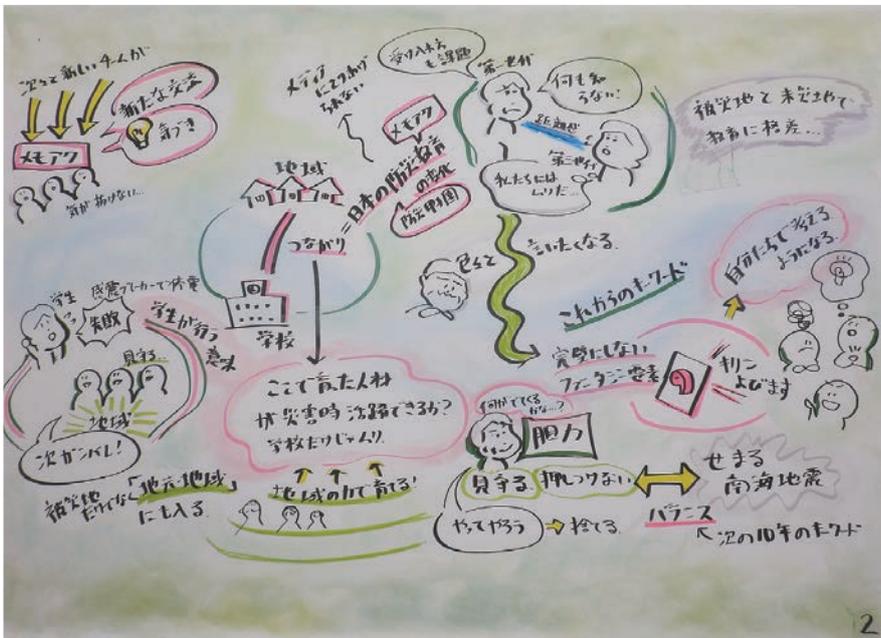
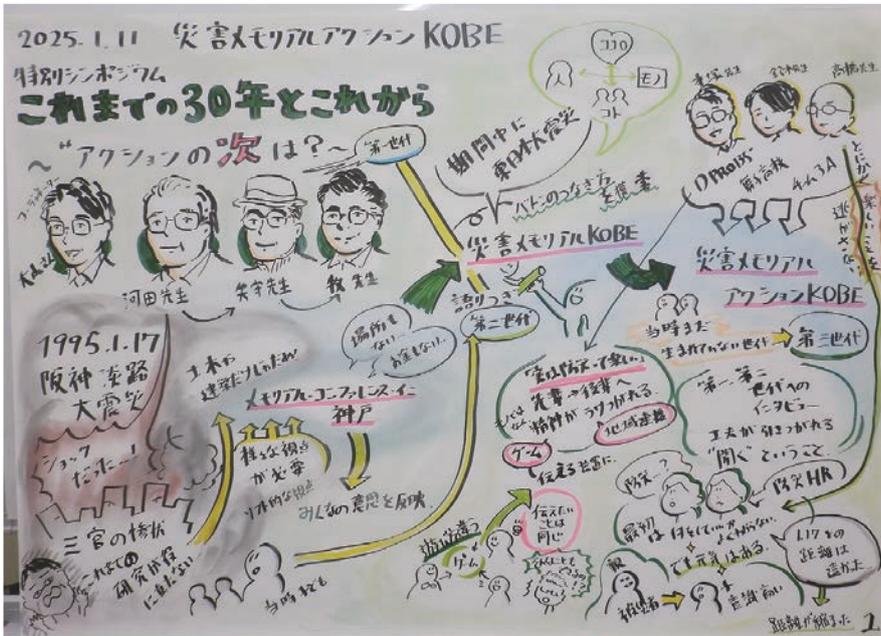
そのきっかけを、この学生生活の間でやっていらっしやるし、私もまだそんな大した幹になっていないんです。これからちゃんと花をつけていけるような人間になっていかないかなと思っているんですけども、そういう「場」をここで次の10年間、もっと広げていけるように、「Expand」という言葉をちょっと実は英語では考えていたんですけども、もっと広げていかないかと。でなければ、美しいものにはならないんだろうなと思いますし、次の世代の皆さんと共に、私が今日感じた、あるいはこれまで感じてきたような、自分もこう生きたいなと思える目標を与えられるような「場」を、この神戸は残していかないといけないんじゃないかなと思っています。

○**大山コーディネーター** 中野先生、最後、一言、今後10年に向けての抱負をお願いします。

○**中野氏** 非常に重たいバトンではありますが、しっかり頑張っていきたいと思います。

○**大山コーディネーター** 奥村先生と中野先生、どうもありがとうございました。

そして、長きにわたりまして御登壇いただきました河田先生、矢守先生、牧先生、本当にありがとうございました。



災害メモリアルアクション KOBÉ2025 のことば



災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2025 のことば

風化してもよい、忘れてもよい。
この言葉が被災者を救う。

風化してなくなるだけではなく、
新しいもの変わっていく。
当たり前になっていく。

「風化」自体は悪いことではないと思う。
メディアには神戸は語り継ぎの限界と言われるが、
今、まさに若い世代が新たな語り継ぎをしてくれている。
それが風化を裏返すことになる。

幼稚園の時に防災メモリアルのお兄さん、お姉さんたちの活動に参加する機会があって、
すごく楽しくて憧れを持って。(運営側で) **自分もやりたい!** と思ったのが参加のきっかけです。

防災の活動の最前線だと思うので、メモリアルアクションみたいな場は続いたらいいなあ。

先輩から後輩へ何かよくわからないけど継承している、
マニュアルが無く自主的に学ぶ防災が
「実は防災って楽しい」に行きついている
のかなと感じます。

学生の失敗を地域の人たちは
受け入れてフォローしてくれる。
地域との交流の中で、
学生がやることに意味がある。

最初は何をしていいかわからない。
でも元気はある。
そんな学生たちが入ってきた。

時代の壁を超える力のあるものを
作り出す生き方を自分もやってみたい
と思える人が出てくればいいなと思うんですよ。

学生のうちに実や花をつけなくてもいい。大人になってからつくのかもしれない。
(災害メモリアルに参加した経験が) **そのきっかけになれば良い**と思うんです。

プログラム

阪神・淡路大震災 30 年

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2025

伝える大震災、つなげる防災

KOBÉのことば

参加無料

当日先着順
(事前申込不要)

活動報告会

日時

2025.1.11 SAT
10:00 → 16:15

会場

阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター

主催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所
共催：京都大学防災研究所 自然災害研究協議会近畿地区部会
企画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会
後援：兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞神戸総局/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞神戸総局/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部/兵庫県立舞子高等学校/兵庫県立大学/兵庫県立尼崎小田高等学校

これまで私たちは「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」、そしてその教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアルKOBÉ」を実践してきました。

2016年からの10年は当時大人だった世代が少なくなるさらに次の10年を見据えて、今後使える方法やしくみを試行錯誤し、発見し、つくる10年とし、「KOBÉのことば」をキーワードに「災害メモリアルアクションKOBÉ」という取り組みを行ってきました。

「KOBÉ」とは、阪神・淡路大震災の被災地域全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。

阪神・淡路大震災から30年、大震災を直接経験していない若い世代の人たちが、災害を経験した人々へのインタビュー、アンケート、交流事業などの活動を通じて、次世代に伝えるべき「KOBÉのことば」を紡ぎ、活かし、拡げます。「過去・いま・未来」を見据え、世代を超えて活動する、最先端のアクションです。

プログラム

第1部：災害メモリアルアクションKOBÉ2025 活動報告会

※敬称略

10:00

開会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会委員長 京都大学防災研究所 教授 牧 紀男

10:05

活動発表

- 発表
- ① 兵庫県立舞子高等学校
 - ② 滋賀県立彦根東高等学校
 - ③ 兵庫県立尼崎小田高等学校
 - ④ TEAM-3A
 - ⑤ 国立明石工業高等専門学校D-PRO135°(明石高専防災団)開発チーム
 - ⑥ 国立明石工業高等専門学校D-PRO135°(明石高専防災団)地域連携チーム
 - ⑦ 神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
 - ⑧ 神戸学院大学 クローズアップ社会研究会
 - ⑨ 関西大学 社会安全学部 奥村研究室
 - ⑩ 兵庫県立大学 学生災害復興支援団体LAN

12:05

パネルディスカッション

「伝える」ことから生み出した「新芽」～聴く、創る、報せるという観点から～

災害メモリアルアクションKOBÉの10年の活動では震災21-30年という超長期の震災経験の継承・語り継ぎのあり方について考えてきました。活動の中から様々な新しい試み(「新芽」)が生まれてきました。最後の数年間考えてきた、聴く・創る・報せるという観点から、災害が頻発し、南海トラフ地震の発生が懸念される中で、災害の経験を「伝える」こと、さらに被害を減らすための対策へとつなげる方法について参加団体の学生とともに考えたいと思います。

コーディネーター

京都大学防災研究所 教授 牧 紀男
人と防災未来センター研究部 研究員 餅原 秀希

パネリスト

兵庫県立舞子高等学校/滋賀県立彦根東高等学校/TEAM-3A
国立明石工業高等専門学校D-PRO135°(明石高専防災団)
神戸学院大学 クローズアップ社会研究会 以上5団体代表

グラフィックファシリテーター

大阪防災プロジェクト共同代表 多田 裕亮/山越 香恋

12:55

講評・閉会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会顧問 人と防災未来センター長 河田 恵昭

13:00

昼休憩

第2部：災害メモリアルアクションKOBÉ 阪神・淡路大震災30年 特別企画

14:00

震災30年スペシャル座談会 ～臼井先生、その生徒、その生徒の生徒～

神戸親和大学 准教授 臼井 真 兵庫県立舞子高等学校教員、生徒

14:30

記念ミニコンサート 「(しあわせ運べるように)ほか」

指揮：神戸親和大学 准教授 臼井 真 演奏：長田区合唱団

14:45

特別シンポジウム 「これまでの30年とこれから～“アクション”の次は?～」

阪神・淡路大震災を経験した世代による「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」(~2005年)、その教訓を次世代に伝えるための「災害メモリアルKOBÉ」(~2015年)からバトンを引き継いだ「災害メモリアルアクションKOBÉ」(2016年~)。その位置づけや意義を共有するとともに、この10年で参加した若い世代の変化やプロジェクトの成果、さらにこの先の10年を見据えた、「アクション」の次のキーワードは何なのか?語り合います。

コーディネーター

NHK大阪放送局チーフ・アナウンサー 大山 武人

パネリスト

人と防災未来センター長 河田 恵昭
京都大学防災研究所 教授 矢守 克也
京都大学防災研究所 教授 牧 紀男
災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会 委員

グラフィックファシリテーター

大阪防災プロジェクト共同代表 多田 裕亮/山越 香恋

アクション参加チーム紹介

活動発表

兵庫県立舞子高等学校



今年度は、先生方への被災体験インタビューや、防災読本の配布・紙面改良、避難所運営マニュアルの作成に取り組みました。被災者・未災者問わず、皆さんの思いに真摯に向き合い、私たちが得た気づきをできるだけ多くの人へ広めていけるよう、頑張ります。

滋賀県立彦根東高等学校 新聞部



「福島をつなぐ」と題し東日本大震災復興支援の連載をはじめ13年になります。本年度は能登半島地震にスポットを当て災害復興特集号を作成しました。石川県金沢市を中心に現地取材を行った復興の課題について考えたり、現地高校生との交流等を行いました。

兵庫県立尼崎小田高等学校



災害が発生した時に学校が「HUB」となり、地域コミュニティが協力でき、「助けて」と言える関係を、平素から構築していくための取り組みをはじめ9年。災害時要配慮者の支援に高校生ができること、防災・減災文化を地域社会に根付かせる取り組みを報告します。

TEAM-3A チーム トリプルエース



TEAM-3Aは2022年5月にスタートして今年度が3年目。現在は現役高校生と卒業生の学生・社会人、さらに今年度から中学生も参加した幅広い年代のユースチームとして「いつでも、どこでも、たれでも楽しくぼうさい」をテーマに活動を展開しています。

国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団)



開発チーム
D-PRO135°開発チームは、昨年度より制作を進めてきた「災害版人狼ゲーム だうでい」および未就学児を対象とした避難バッグ「つめつめ」の開発・展開に取り組んでいます。今後は、継続的なプレイと実際の教育効果に焦点を当てて活動していきます。



地域連携チーム
D-PRO135°地域連携チームは、前年までの経験をもとに新たな挑戦として、幼稚園児を対象とした防災講義や、働く世代に向けた活動など、日々防災の広め方を模索しています。防災寺子屋といった小中学校への出張講義のような新たな活動を作ります。

神戸学院大学 現代社会学部



安富ゼミ
ゼミでは地震や水害の被災地を訪れ、実際に現場を見て災害情報や復興について考えることをモットーにしており、今年度は1月1日に震度7の大地震に見舞われた能登半島を2度訪れ、ボランティア活動を実施。初期対応などの危機管理、復旧・復興について考えた。



クローズアップ社会研究会
私たちは、身の回り起こっている社会・時事問題について研究をしています。今回は「選挙と防災」を研究テーマとし、学生や教授に調査を行うことで、候補者視点・投票者視点のギャップについて研究していきます。研究したことは、これから新聞という形でまとめ、発行していきます！

関西大学 社会安全学部 奥村研究室



阪神・淡路大震災では、大きな精神的ストレスと劣悪な生活環境により命が失われることが、初めて「災害関連死」として広く社会に認知されました。私たちは、その後も繰り返される関連死の実態を分析し、当時の教訓がどのように生かされているのかを検証しています。

兵庫県立大学 学生災害復興支援団体LAN



兵庫県立大学学生災害復興支援団体LANは、東日本大震災を契機に結成され、被災地復興支援や防災活動などに取り組んできました。今年度は、福島や能登でボランティア活動や交流活動を行っています。

合唱



長田区合唱団



長田区合唱団では区民のみならずに合唱を通じて元気を届けようと12年前に長田区役所職員が集まり、西市民病院でのロビーコンサートや身近な場所で歌っていました。今回は有志十数名で「しあわせ運べるように」と福島から生まれた合唱曲「群青」を披露します。

座談会・指揮 臼井真 (神戸親和大学准教授)



1960年、兵庫県神戸市生まれ。神戸市内の小学校で音楽専科教諭を務める。1995年、阪神・淡路大震災で東灘区の自宅が全壊。震災から約2週間後、「しあわせ運べるように」を作詞・作曲。独自の音楽指導で知られ、小学生のための自作のオリジナル曲を400曲以上作詞・作曲している。

災害メモリアルアクション KOBЕ 企画委員会名簿

※2024年4月1日現在

役 職	氏 名	所 属
委 員 長	牧 紀男	京都大学 防災研究所 社会防災研究部門
委 員	伊藤亜都子	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	伊藤奈緒子	株式会社GK京都 第2デザイン部
	浦川 豪	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	卜部 兼慎	NPO法人防災デザイン研究会 株式会社GK京都 第1デザイン部
	太田 敏一	防災リテラシー研究所
	大塚 毅彦	国立明石工業高等専門学校
	大山 武人	NHK大阪放送局
	奥村与志弘	関西大学 社会安全学部
	鈴木あかね	兵庫県立舞子高等学校
	高橋 徹	NPO法人 TEAM・あげあげ
	中野 元太	京都大学 防災研究所
	西口 正史	ラジオ関西 編成営業局
	福岡 龍史	株式会社エフエム・プランニング
	福田 秀志	兵庫県立尼崎小田高等学校
	本塚 智貴	国立明石工業高等専門学校
	安富 信	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科

サポーター	甲斐聡一郎	兵庫県災害医療センター
	越山 健治	関西大学 社会安全学部、人と防災未来センター上級研究員
	近藤 誠司	関西大学 社会安全学部
	諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
	松元 正博	NPO法人 人・家・街 安全支援機構
	宮本 匠	大阪大学大学院 人間科学研究科
	矢守 克也	京都大学 防災研究所
	高森 順子	情報科学芸術大学院大学、阪神大震災を記録しつづける会

顧 問	河田 恵昭	人と防災未来センター長、関西大学社会安全学部特別任命教授
	土岐 憲三	立命館大学衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所（特別研究フェロー）
	林 春男	京都大学名誉教授
事 務 局	高見 隆	人と防災未来センター副センター長兼研究部長
	島田三津起	事業部長
	横山 淳	事業部普及課長
	足立 耕三	事業部普及課課長補佐（事務主担当）
	餅原 秀希	研究部研究員（研究員主担当）

災害メモリアルアクション KOBÉ2025 参加学生名簿

※順不同

グループ名	氏名	所属
兵庫県立舞子高等学校	細谷 悠彬	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	勝部 太智	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	田中千恵美	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	阪上 菜穂	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	森本みなみ	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	岸 宥里	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	鎌野 萌生	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	浅井 颯人	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	田村 洸太	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	内林小都泉	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	長谷川虎粹	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	高橋 人逢	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	関 歩飛	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
	西口 知華	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科
一柳 春香	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	
滋賀県立彦根東高等学校	小谷 優介	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部
	北川 空虎	滋賀県立彦根東高等学校 新聞部
兵庫県立尼崎小田高等学校	中塚 莉子	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
	喜納 歩菜	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
	大竹 咲綾	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
	荒木 楓	兵庫県立尼崎小田高等学校 看護医療・健康類型
TEAM-3A	濱田 桃花	社会人
	平川 莉子	兵庫教育大学
	松岡 友菜	明石南高校
	奥田 彩世	野々池中学校
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団) 開発チーム	西田美野里	国立明石工業高等専門学校
	北原 加菜	国立明石工業高等専門学校
	蒲地 渉太	国立明石工業高等専門学校
	村川 咲良	国立明石工業高等専門学校
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団) 地域連携チーム	久保田千晴	国立明石工業高等専門学校
	佐藤日向子	国立明石工業高等専門学校
	西浦 航生	国立明石工業高等専門学校
	川木 惺真	国立明石工業高等専門学校
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	森 千晶	国立明石工業高等専門学校
	中井 亜胡	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	東 美穂	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	植村 佳奈	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	宮本 優斗	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	安富 大貴	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	加賀山 潤	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	北添 凌駕	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	大角 悠真	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	福本 颯多	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	大塚 陽仁	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	岡崎 陸央	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
	神戸学院大学 クローズアップ社会研究会	小林 春菜
名越健一郎		神戸学院大学 現代社会学部 現代社会学科
加賀山 潤		神戸学院大学 現代社会学部 現代社会学科
西山 潤		神戸学院大学 現代社会学部 現代社会学科
藤原 勝利		神戸学院大学 現代社会学部 現代社会学科
菅 桐吾		神戸学院大学 現代社会学部 現代社会学科
関西大学 社会安全学部 奥村研究室		飯田 茉夏
	山形 啓太	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
	松本 汰寛	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
	保田 香音	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
	齋藤 圭悟	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
	石田 莉子	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
	木俣 青波	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
	久世真侑子	関西大学 社会安全学部 奥村研究室
	山崎 健司	関西大学大学院 社会安全研究科
兵庫県立大学	北川 凌雅	兵庫県立大学 学生災害復興支援団体 LAN
	芦田 悠真	兵庫県立大学 学生災害復興支援団体 LAN
	島田 都羽	兵庫県立大学 学生災害復興支援団体 LAN
	乾 瑠翔	兵庫県立大学
	品川 萌夏	兵庫県立大学
	堀田 綾音	兵庫県立大学
	吉岡 美陽	兵庫県立大学
	赤畑 実鈴	兵庫県立大学
	田中 晶貴	兵庫県立大学
	森本 樹	兵庫県立大学

発表風景等

キックオフ会 (ワークショップ)

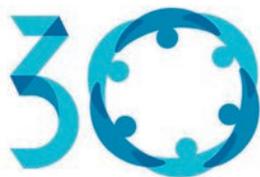
2024年8月17日



中間発表会 (ワークショップ)

2024年10月27日





阪神・淡路大震災30年
1995 1.17



災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION

令和6年度 災害メモリアルアクションKOBÉ 報告書

主 催：阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
京都大学防災研究所

企 画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

人と防災未来センター 事業部普及課内

災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1丁目5-2 西館6階

Tel：078-262-5066

<https://www.dri.ne.jp/pickup/memorial-action/>

本研究は京都大学防災研究所共同研究(令和6年度一般研究集会2024WS-02)研究代表者名:(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構人と防災未来センター長 河田恵昭、京都大学防災研究所自然災害研究協議会近畿地区部会の共催によるものです。